

平泉文化研究年報

第 8 号

平成 20 年 3 月

岩手県教育委員会

序

岩手県では、中尊寺金色堂に代表される平泉の文化遺産を総合的に調査研究し、その成果を広く公開し活用していくため、研究機関の整備を検討しています。

そのための条件整備として、平泉遺跡群の中核遺跡である国指定史跡「柳之御所遺跡」の発掘調査を進めるとともに、「平泉文化研究機関整備推進事業」として、平泉文化研究に必要な人材の発掘と育成、研究者相互の連携や多角的・学際的な研究の推進を図るための共同研究など、研究基盤の整備と拡充に取り組んでいます。

また、平成13年4月、「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに登録されたことから、世界遺産本登録に向けて、「平泉文化フォーラム」などの機会を通じて平泉文化に関する県民の学習と理解の場を提供するよう努めているところです。

この「平泉文化研究年報」は、毎年度の平泉文化共同研究の成果をまとめているもので、今回が第8号となります。

今後、この年報について多くの研究者の方々より御意見御指導を頂戴することにより、本誌が平泉文化研究の中核的な研究誌となるよう目指して参りたいと考えています。

最後に、共同研究に参画の諸先生がたをはじめとする関係機関各位のご協力に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

岩手県教育委員会

教育長 相澤 徹

目 次

序

「苑池都市」平泉	－浄土世界の具現化－	前 川 佳 代……………	1
平泉の市街地形成	－建物軸方向の特徴について－	磯 野 綾……………	17
平泉文化と北方交易 2	－擦文期の銅碗をめぐって－	関 根 達 人……………	33
12世紀の二つの都市	－平泉末期と鎌倉初期の遺物様相－	鈴 木 弘 太……………	51
柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷（中間報告その4）		柳之御所遺跡調査事務所……………	65
第8回平泉文化フォーラム実施報告……………			76

1 本書は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が実施している平成19年度「平泉文化研究機関整備推進事業」の成果のひとつとして発刊するものである。

2 本書は、岩手県教育委員会と平成19年度平泉文化共同研究者との共同研究成果等を掲載している。

共同研究者は公募により決定していて、平成18年度から20年度まで3ヵ年研究を継続する中堅研究者3名（研究A）と、年度毎に公募する若手研究者（研究B）1名から構成されている。

平成19年度平泉文化共同研究者

- 関 根 達 人（弘前大学人文学部准教授、研究A）
- 前 川 佳 代（京都造形芸術大学講師、研究A）
- 磯 野 綾（千葉工業大学大学院生、研究A）
- 鈴 木 弘 太（鶴見大学大学院生、研究B）

3 本書の編集は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が行った。

「苑池都市」平泉

—浄土世界の具現化—

前川佳代

はじめに

藤原氏初代清衡は、中尊寺とそれに連なる丘陵地に寺院を建立し、平地には旧地形を残して僧達が暮らしていたと推測でき、平泉に仏法修行の場を作ろうとしたのではないかと推測した(前川2007)。清衡は、平泉への巡礼道を整備し、「中尊寺供養願文」にいう「界内の仏土」として「聖地」化した。それは平泉の恒久の平和を意味していた。ところが基衡代になると、平泉は様変わりする。低地は埋め立てられて平坦面を造りだし、正南北を基調とした地割が施され、都市化する。柳之御所遺跡にも堀が繞らされる。後を継いだ秀衡もまた前代の地割を踏襲し、都市構造を充実させる。後半期には柳之御所遺跡や無量光院一体を再開発し、東に傾いた方位の地割が展開する。これら平泉中心区の変化にはどんな造営思想や理念が存在するのだろうか。このように各代で都市構造が変化するが、最終期において調和した形で我々の目に映るのは、三代の理念が通底していたことを想像させる。

三代それぞれの理念を次のようにみる。清衡は祇園精舎のような「聖地」を目指し、基衡は浄土思想に基づいた「苑池都市」を創り上げ、秀衡は阿弥陀浄土信仰によって統一した極楽の苑池を創ろうとした。その根底にあったものは、浄土世界の具現化であったと想定する。

本年は、基衡と秀衡の平泉造営理念について詳しくみてみたい。なお、ここでいう「平泉」とは、平泉中心区のことである。

1. 苑池都市とは

(1) 「苑池」

「苑池」という言葉は、古代中国に存在した広大な「苑」とその中にある多くの池の周囲に諸施設が存在する園林(庭)をイメージし(図1)、寺院や邸宅に付属する個別の「園池」と分けて使用するために名付けた。すなわち「現代用語の庭園より規模が大きく、古代都城に付属した「苑」に類似した広大な領域に、山や池、寺や邸宅などを配置した空間」と規定する¹。そして都市域が「苑池」の構造をとる形態を「苑池都市」と呼びたい。

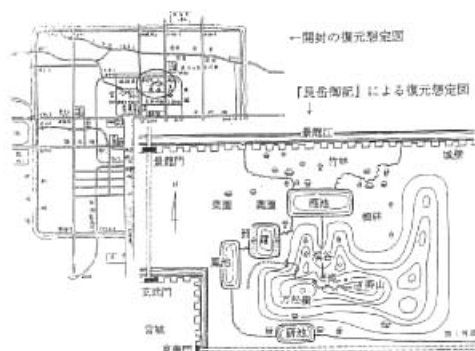


図1 北宋開封の宮苑・長岳復原図(右下図・河原1992)

個別の園池については、長年にわたる庭園史の研究が積み重ねられているが、官苑や離宮や別業のように一つの大規模な庭園とみなせる「苑池」と個別園池の区別はされてこなかった。そのため東野治之氏が指摘するよう

に、中国庭園史の中で述べられる大規模な「離宮・別荘型庭園」が日本に及ぼした影響についても研究者の関心は薄いのである（東野2002）²。そのような中で、近年の飛鳥地域で検出された池の存在などから、古代の宮苑の淵源を古代中国の園林との関係で考察する研究が提出されている（金子2002、飛鳥資料館2005）。中国では「皇帝の庭園施設を苑と呼んだ。苑は皇帝の徳を表すものとされ、規模や数は王朝の力を象徴した。苑は水を湛える園池だけでなく、動・植物園や宮殿、その他の諸施設が複合された巨大施設であった」という（金子2002）。それが日本古代の宮苑に与えた影響が少なからず存在するのであれば、個別庭園とは別の広大な「苑池」という発想が12世紀にも存在していた可能性はある。また当時の大陸、とりわけ宋との交渉で「苑池」というものが日本にもたらされた可能性も否定できない。例えば、京都の南に位置する鳥羽殿は、離宮全体を庭園と化している（図2）。また平清盛の福原について森蘊氏は、福原京の四季の御所の配置の仕方や巖島神社の造営から、清盛が瀬戸内海を泉水とする一大構想を練ったと指摘している（森1945）³。



図2 鳥羽殿復原図（上村2007）

（2）「苑池都市」

白河上皇が橘俊綱に、「おもしろき所」を問う場面が『今鏡』にみえる⁴。石田殿、高陽院に続く3番目に、上皇は鳥羽殿をあげたけれども、俊綱は鳥羽が「地形眺望なといとなき所なり」と自身の伏見亭を推した。俊綱の「おもしろき所」選択理由に「地形眺望」という自然環境があり、それは趣向を凝らした造庭に優先することがわかる。俊綱は平安時代の造庭書である『作庭記』の著者と伝えられる人物である。上皇は、自身の離宮を「おもしろき」よう造営し、名だたる勝地を意識して造ったことが窺えよう。

鳥羽殿は、「苑も都遷りのごとし」といわれたように⁵、上皇以下の近臣下僕が屋地を賜い、都市的な景観が存在した（図2）。京都の南、朱雀大路を南に延長した鴨川と桂川の合流点に位置し、淀川を経て大阪湾へ直結する外港としての水運と、山陽道という陸運を兼ね備えた鳥羽殿の水陸交通の要衝地としての機能を重視する見解もある（大村2006）。また遊興の場であり、「白河・鳥羽院政期の王家という権門の家政が行われた場所」として「権門都市」という評価もある（美川2001）。鳥羽のように、都市的機能があり、内部は広大な池に各施設が臨み築山や中島を備え、また個別園池も存在する「苑池」の構造をとるものを、「苑池都市」と呼ぶことにする。

平泉は二代基衡の治世に「苑池」の形態をとることは、本年報第1号で示した（前川2001・以下前稿）。平泉の特徴は池が多いこと、四神相応の地を選び、浄土思想や自らの理念に基づいて創り上げた広大な苑池空間である。平泉の「苑池」とは、北は関山、東は北上側、南は太田川に囲まれた範囲（平泉中心区）に、中尊寺境内地、金鷄山や塔山を背景に花館廃寺と花立溜池、鈴沢池、毛越寺、観自在王院、無量光院、柳之御所、伽羅御所などが散在している景観をいう。「苑池」に創り上げた意義は、浄土・神仙世界の具現化で、平泉中心区は彼岸であり北上川対岸は此岸である。平泉という名前は、その苑池の性格から名付けられたと考えた。

基衡期は、街区が形成され都市の様相が濃厚になる。それゆえ、平泉を「苑池都市」と呼称する

2. 基衡の平泉

(1) 「苑池都市」平泉

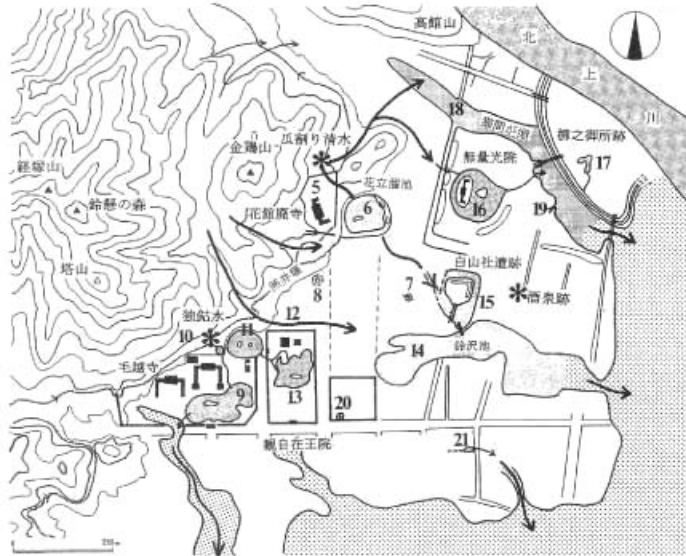


図3 平泉の「苑池」復原想定図（秀衡期も含む）

て最後は北上川へそそぎ入る。

各池の復元流水経路を推定すると、次になる（番号は、図3の番号に対応。秀衡期ものも含む）。

瓜割清水（金鶏山沢水）→花立溜池(6)→白山社池(15)→鈴沢池(14)→北上川

独鈷水（塔山沢水）→弁天池(11)→舞鶴が池(13)→鈴沢池(14)→北上川

独鈷水→遣り水奥池(10)→大泉が池(9)→チゴ沢→太田川→北上川

瓜割清水→花立溜池(6)・花立北沢水→無量光院梵字が池(16)→猫間が淵(18)→北上川

??→志羅山66次池(21)→太田川→北上川

いずれも西の丘陵から流れ出た水が、いくつかの池を経由して北上川へと流水する⁷。この中には、浄土庭園を構成するものもある。これらを総合して空から平泉をながめると、広大な「苑池」の光景である。

(2) 宋の名園「艮岳」と京都・法金剛院

前稿において、平泉と北宋の帝都・開封の「艮岳」という皇家園林の構造が似通っていることを指摘した。「艮岳」は、北宋の徽宗皇帝（在位1101～1125）が、政和七年（1117）から宣和四年（1122）にかけて、宮城の東北に築いた人工の山を中心とした「苑池」である（図1）。杭州の鳳凰山を手本にしたといわれ、周囲は5.59km、山の高さは138mを測ったという（クーン2007）。寿山と万松嶺という山や、そこから流れ落ちる水が4つの池や沼をめぐる。山上や山腹、沼や池の周囲や平地には、亭や堂、書館、館、城、庁、薬園、梅林、竹林などの建物や施設が存在した（『宋史・地理志』、河原1992・1994）。「艮岳」の造営は、靖康元年（1126）まで約十年の歳月の中で整えられていったが、その直後に起こった金の侵攻によって北宋は滅亡し、官苑艮岳も運命を共にした（『宋史・地理志』）。

平泉は、金鶏山や塔山がある西の丘陵から流れ出る水や泉の水は、池を巡回して最終的に北上川へそそぐ。周囲には、寺院の伽藍や神社、邸宅や館が存在する。「艮岳」が創りだした空間と酷似する。

基衡は、清衡の平泉を一変させ、中心部の旧地形を整地して平坦面を造りだした。まず西南部最奥の沢筋を埋めながら池を造成し、毛越寺や観自在王院前身施設を造り、それに続く街区を造営した。その中には街区をまたいで庭園的修景が施された鈴沢池や猫間が淵が位置する。これらは水を湛えた池でなく、沼状であったと推測される。そして花立溜池や白山社の園池など多くの園池を造った。

池はそれぞれが独立して存在するのではなく、花立溜池から白山社池¹⁵、そして鈴沢池へと、高位から低位の池へ流水し巡りめぐつ

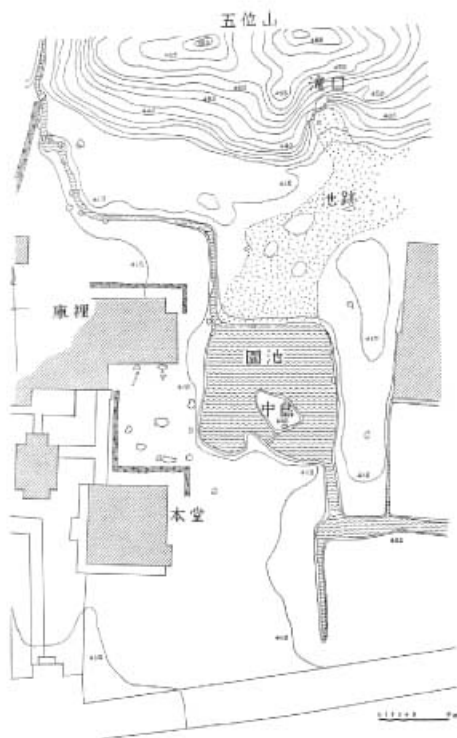


図4 法金剛院庭園（整備前）

良岳は二つの山の間から滝が流れ落ちるが、山から流れ出る滝を園池に取り込んだ庭園といえ、京都市にある法金剛院である（図4）。法金剛院の池には五位山麓の青女の滝と西ノ川からひいた遣り水が流れ込んでいたと想定されている（小松1998）。法金剛院は、平安時代前期の右大臣清原夏野の双丘山荘跡で、のち天安寺となったが、大治五年（1130）に待賢門院の御所ができ、御願寺として御堂が建てられた。東西一町、南北二町の敷地の中央は池で、それに東面して阿弥陀堂が建ち、池東には御所があった。青女の滝は滝壺から落差5mを測る。造庭者は伊勢公林賢⁸と徳大寺法眼静意⁹である

（3）神仙世界の風景

ところで、二つの山の間から流れ出る水の光景が、蓬萊山を題材とする絵画描写として存在したことを伺わせる史料がある。『今昔物語集』巻11-35「藤原伊勢人始建鞍馬寺語」には、「(略) 王城より北え深き山有り。其跡を見に二の山指出て、中より谷の水流出たり。絵に書ける蓬萊山に似たり。山の麓に副て河流れたり。(略)」と出てくる。当時、二つの山から流れる水の情景は蓬萊山の姿であるという認識が存在したようだ。良岳や法金剛院、平泉丘陵からの水の流れる景観は、蓬萊山を意識したと考えられる。

その光景は、現在、毛越寺庭園の遣り水に見ることができる。

毛越寺の遣り水は、塔山麓に湧き出る独鈷水を引き入れ、一旦小さな池に落とし、池と遣り水の北西側と南西側にある土塁から「伝え落ち」状の滝で中・下流域に水が流されている。これは、『作庭記』「遣水事」にいう、「遣水谷川の様は山ふたつかはさまよりきひしくなかれてたるすかたなるへし」を再現したものであろうことは想像がつく。そして「泉事」には「唐人必つくり泉をして或蓬萊をまなひ」ともあり、泉の意匠に「蓬萊」を写すことが出てくる。上記『今昔物語集』で想像された蓬萊山の絵画描写の存在をも加味すると、毛越寺の土塁から流れる遣り水は、蓬萊山を写したと推測される。

また、背景としての山と前面の池を蓬萊とみなす認識もあった。『中右記』永久二年（1114）四月一四日条には、「渡御泉殿、御覽新堂地形、遠山之体、前池之様、宛如蓬萊歟」とある。山を背景とする平泉の寺院や庭園は蓬萊世界ということになる。

以上から、山を背景とし、そこから流れる水を利用した「園池」造営には神仙思想が存在したと想定できる。

（4）花立伽藍一花館庵寺と花立溜池

平泉で滝はというと、上述の毛越寺遣り水と観自在王院舞鶴が池の滝石組みくらいである。他に可能性があるのは、花立溜池への導水箇所である。

花立溜池は、寛文年間（1661-1673）の北照井堰開通に伴い農業用水池として開削されたと考えられてきた¹⁰。しかし池をみると、中央よりやや西側に中島らしき畦畔がみられるし、東側の土手の東北隅に築山かと思われるマウンドがある（写真3・4）。また図5左の明治42年北上川河川台帳図を見ると、南と東堤は

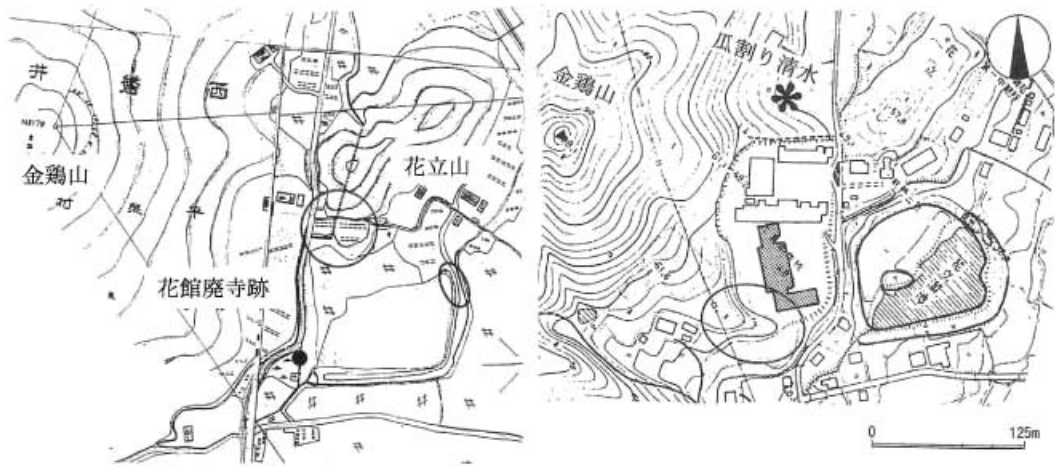


図5 花立遺跡付近図（左：明治42年北上川河川台帳図、右：昭和39年都市計画図）

左図：●は石敷き道路検出地（花立Ⅱ-17次）、○は発想定地、楕円部は築山状マウンド位置。
 右図：楕円部は、金鶏山から延びる尾根。現状では確認できない。



写真1 花立溜池から花館廃寺と金鶏山を望む



写真2 花立山からの張り出し部と水路



写真3 東堤防の築山状マウンド（西から撮影）



写真4 築山状マウンド（南から撮影）

直線的である（図5左）。12世紀に存在した池を利用して用水池を作ったとも考えられるのである。

花立溜池への導水に、金鶏山麓の瓜割清水を利用した場合、落差が10mほどみられる。図5左の北上川河川台帳図では、花立山西南部から溜池方向に二つの張り出しが確認できる。現況では、写真2のように、西の張り出し部は住宅になり、東側の張り出しのみ現存する。両者の間には照井堰からひいた水路がある。二つの張り出しを二つの山とみなし、そこから滝が流れる情景を想像できないか。

花立溜池は、花館廃寺と一体として一つの伽藍を形成していたと考えられる（前川2001）。廃寺南西の尾根は、昭和39年の都市計画図をみると、東に張り出しており（図5右図の楕円部）、この形状は毛越寺西土壘に類似する。その張り出しを東に延ばすと、直線を呈する溜池の南堤に当たる。花館廃寺と花立溜池を一つの伽藍とみて、「花立伽藍」と呼ぶことにする。

但し、廃寺の中軸線と池の中心が合致しないし、両者の間に道が存在していたこと¹⁴や、かなりの高低差があることから、両者には時期的差があると考えた。廃寺は清衡期と想定されており、溜池は次代基衡期になるのではないだろうか。基衡期になって、水が回遊する池の構造を構想した際に、金鶏山瓜割清水からの取水と貯水を目的に、花館廃寺との景観に配慮しつつ設定されたと考える。

（5）水が巡回する都市—浄土世界の具現化—

基衡期の平泉は、西の山から流れる水が巡回するという苑池構造になっていた。このような形態は日本に見当たらず、「良岳」に範を求めたのだが、水が巡回する理由を考えておきたい。

西の山には点々と経塚が営まれている。金鶏山は金峯山信仰を取り入れたと推測した（前川2007）。つまりは弥勒信仰である。この西の山には弥勒浄土、すなわち兜率天が想定できる。兜率天から流れ出る聖なる水が巡回する構図になる。

これは大蔵祝詞の「高山の末」から流れ落ちる水に靈力があるという（中島2006）、高山祭りの儀式にも適う。この水の靈力によって禊や祓いに有用だとすると、天上世界に由来する生命の水が曲水遊びなどで人々に生命力を及ぼすとする小南一郎氏の指摘と似た構図となり（2000）、高山の水ももとは天上世界になろう。平泉の庭園の水もまた、天上世界に由来しそれ故に浄化力・生命力を持ち、平泉を回遊し海（北上川）に流れる。

また西から東に流れる水にもエネルギーがあるとみなされていた。西には西王母がおり、そこに宇宙のエネルギーが来て、東に流れるために禊などの力を持っているという（小南2000）。平泉中心区は、西から東に流れる北の衣川と南の太田川に挟まれる。この自然地形も中心区を清浄域にする装置となっている。

浄土の水、清浄なる水を都市域に回遊さす目的は、平泉に浄土世界を具現化することであろう。『無量寿経』によると、無量寿仏の国土には、講堂・精舎・宮殿・楼観がみな七宝で荘厳され、近隣には諸々の浴池があったという。それらは、「清浄高潔にして味わい甘露のごとし」であり、黄金・白銀・水晶、瑠璃、琥珀・珊瑚・磤磤（しゃこ）・瑪瑙・白玉・紫金の池があったという。平泉に池が多いのは、浄土の浴池を意識してのことではなかろうか。

3. 平泉の「浄土庭園」の系譜

毛越寺は当時の造園書、『作庭記』によったとおもわれる造作が多いことはすでに森氏によって指摘されている（森1986）。親自在王院舞鶴が池の取水口の滝組は、『作庭記』に通じるという。また無量光院は、平等院を模している点、撰園家と血脈関係を有す著者が記した『作庭記』との関係を想定できる。

すべてが『作庭記』流かといえばそうではない例も見受けられるが、ここでは『作庭記』がつづられたで

あろう京都や奈良の「浄土庭園」に平泉の「浄土庭園」の系譜を探りたい。

(1) 観自在王院庭園と浄瑠璃寺庭園 (図6)

観自在王院舞鶴が池は、奈良市に隣接する京都府木津川市加茂町にある浄瑠璃寺の池とよく似ている。浄瑠璃寺は、久安六年(1150)に興福寺一乗院の恵信によって造庭され、嘉承二年(1107)に建立された九体阿弥陀堂を保元二年(1157)に池西岸に移築された。阿弥陀堂の真東にそびえる三重塔は治承二年(1178)に京都一条大宮より移築されたものである(森1959、本中1994)。

観自在王院の舞鶴が池は、浄瑠璃寺の池を本堂に対して180度回転させ向きを変えれば、よく似ている。すなわち観自在王院の舞鶴が池の導水用の滝石組み部分は、浄瑠璃寺の池の排水部に当たる。また左上と右下の2カ所に湾入する部分がみられ、右下の湾入先端部の先に中島が位置している。浄瑠璃寺のそれは、先端部(凸部)が切り離されて中島になっているようだが(森1986)、舞鶴が池では凸部に伝普賢堂跡がある。両池の類似性を指摘した藤島亥治郎氏は、当時京都でこの形の池が存在し、それを平泉に模したとし、浄瑠璃寺の造営時期から、秀衡期に手が加えられていると推測した(藤島1995)。しかし、私は浄瑠璃寺を造庭した一乗院恵信が、関白藤原忠通の息子であったことから、摂関家と平泉藤原氏との関わりで同形の池ができあがったものと推測する。忠通は、「吾妻鏡」の「寺塔已下注文」「一、毛越寺事」によると、円隆寺の額を書いた人物であるし、藤原氏と摂関家との関わりは初代清衡に遡る(丸山2005、前川2005)。

(2) 花立伽藍と奈良・円成寺 (図7)

花館廃寺は金峰山関係の施設と考える(藤島1995、前川2007)。また先に花立溜池とセットとして「花立伽藍」となる可能性や廃寺と池の造営に時間差がある可能性を示した。

山を背後に堂があり下段に池が構築されている景観は、奈良県奈良市忍辱山町にある円成寺に共通する。

忍辱山円成寺は、天平勝宝八年(756)の開基とされ、当初の本尊は十一面観音であったが、天永三年(1112)に経源が阿弥陀像を本尊とした。その後12世紀半ばに東寺長者や東大寺別当を務めた仁和寺僧寛遍によって建物や庭園が整備され、興福寺の末寺になった(本中1994)。

当地は奈良市東北の山間部で、柳生へ抜ける街道沿いにあたり、狭隘な地形のため、楼門と園池の間は、

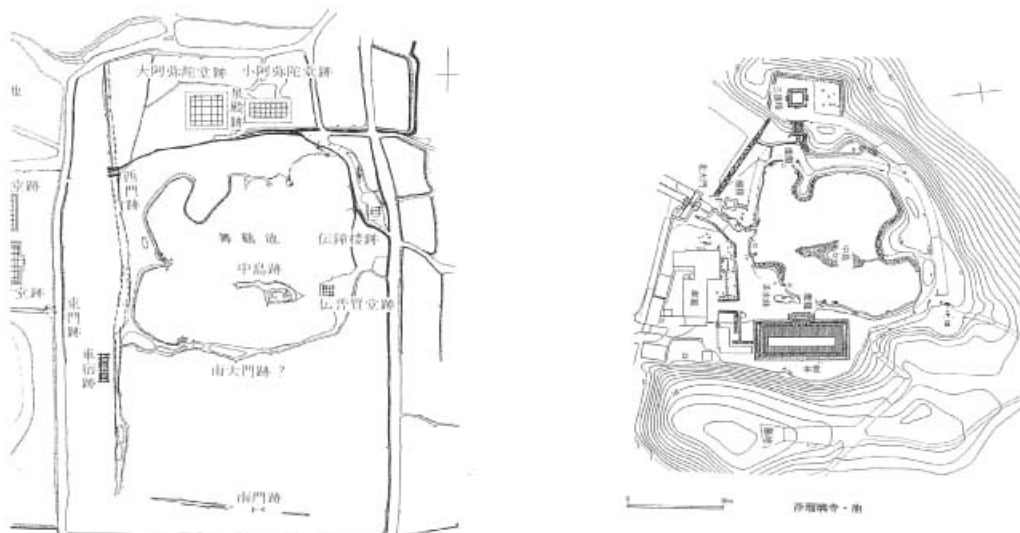


図6 観自在王院・舞鶴が池と浄瑠璃寺園池

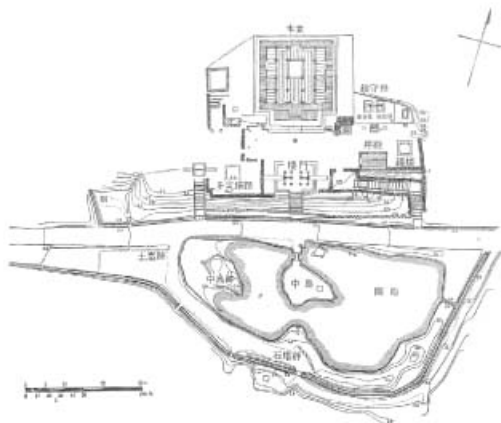


図7 奈良市・円成寺平面図

(3) 山を背後・周囲に持つ浄土庭園

円成寺は本堂の後ろ（北）に山があり（図7）、京都市の法金剛院は伽藍の北側に五位山があり（図4）、近隣には双丘の丘陵が控える。京都市山科区にある法界寺は南面する本堂で東に山がある。奈良市興福寺大乘院や一乗院では三笠山が東にある。洛東の法勝寺は東山が近く、御白河院の法住寺・最勝光院は東面するため東山が前面に当たる。

森蘊氏は、興福寺大乘院庭園と興福寺末寺の庭園との類似性を、「山麓又は溪間の狭隘な敷地でありながら、自然の地形を半ば利用し、半ば人工を加えて高所に堂塔を建て、低地に池を湛え、その池に臨んで御所又は住房ができています」と指摘する（森1959）。これは清衡期の大池跡や、基衡期の花館廃寺付近にも同じことがいえる¹³。

浄瑠璃寺庭園や円成寺と平泉の庭園を比較してきたが、興福寺末寺の庭園との類似性が見いだせるのである。

(4) 『作庭記』の通伝者と平泉

『作庭記』の著者は藤原頼通の息子である橘俊綱といわれている。法金剛院を造庭した静意、浄瑠璃寺の庭を造った恵信、いずれも撰閤家の出身である。撰閤家関係者による造庭技術が「浄土庭園」を主導していったようだ。奥州藤原氏は撰閤家に接触することで、造庭技術を請来し、庭園を造ったと推測される。

平安時代末期の造園書として著名な『作庭記』の通伝系統について、田村剛氏は、延円阿闍梨—俊綱—静意—慈円—良経—慈信（系図の斜文字で示した人物）と推定した（田村1964）。

森蘊氏は、興福寺大乘院の庭園造営者と『作庭記』通伝者の推定に、浄瑠璃寺の庭を造営した一乗院恵信（太字）が忠通の息子であることに注目している（森1959）。そこで興福寺関係者は下線を引いた（図8）。

橘俊綱の弟にあたる覚円（太字）は、若き日に当代随一と評された別業・石田殿に居住した経験をもち、洛東の白河泉殿が院御所になる前の住者で、宇治にも泉房という住処があった。白河泉殿は「水石風流」な地であったという¹⁴。

寛子（太字）は撰閤家の宇治泉殿を、「立池辺見之、本宮種、造物被立池辺、大略摸極楽歎、事鉢実神妙也¹⁵」と極楽のごとき情景を造り出した人物である。

静意は法金剛院の庭を造営した人物で、『作庭記』の通伝者と推測されている。山を背後に前面に池が広がり滝があるのはこの法金剛院で、平泉ではこれに似た滝は確認されないが、平泉の浄土庭園の立地と通底

かつて県道が通過しバスなども通っていた。昭和36年（1961）、県道は庭園の南山麓に移され、昭和51年（1976）に庭園の環境整備が完成し、今日に至っている。

花館廃寺と花立溜池にも高低差があり、廃寺があるテラス部分と溜池との間に道路が通っている。溜池西南部の道路脇の調査では通路らしき礫混じりの遺構が検出され、12世紀代にも廃寺と溜池の間に道が存在したことが明らかとなっている¹²。

円成寺は、本堂と楼門、下段の池の中島が南北軸を形成するため、これらの造作が一体のものと想定されるが、花館廃寺と花立溜池には時間差があると考えた（2-(4)参照）。

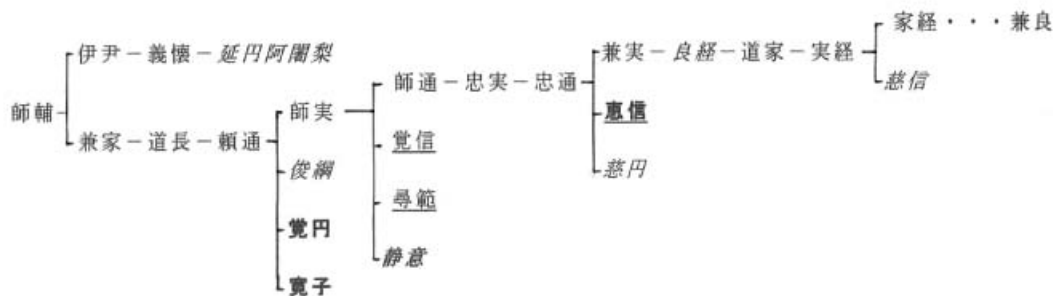


図8 摂関家藤原氏系図上の『作庭記』通伝者と平泉関係者

するものがある。

一乗院恵信は、森氏も注目されているが、藤原忠通の息子であり、浄瑠璃寺の池庭造営者である。平泉観自在王院の舞鶴が池と浄瑠璃寺のそれとが似ていることは前に述べた(3-(1))。父・忠通以外に平泉との関係を探ると、恵信の母は陸奥守藤原基信の女で、基信は永久四年～保安二年(1116～1121?)頃、清衡治世代の陸奥守であった。基信は、父師信・兄経忠が白河院の近臣という家柄の出身である(遠藤2005)。

さらに平泉と興福寺とのつながりもないわけではない。康治元年(1142)八月に興福寺の悪僧15名が陸奥へ配流された¹⁶。翌康治二年頃、歌人西行は初度の陸奥行きの際に、中尊寺で彼らと出逢っている(目崎1987・218～219頁)。

奈良の僧徒科の事によりて数多みちのくに遣されたりしに、中尊と申す処にてまかり逢ひて、都の物語すれば涙を流す。いと哀れなり。かかることは有りがたきことなり、命あらば物語にもせむと申して遠国述懐と申すことをよみ侍りしに

涙をば衣川にぞ流しけるふるきみやこを思ひいでつつ

この僧達が召還された史料はないので、このまま平泉に留まった可能性がある。

また前出の法金剛院の造営は播磨守藤原基隆、供養の導師は覚法法親王である。造庭者の静意は藤原師実の息子である。藤原基隆は、基衡と近い関係にあった前陸奥守藤原基成の祖父にあたる。覚法法親王は、関白忠通の異父兄に当たる。毛越寺の額は、覚法法親王の依頼で忠通が染筆したもので、毛越寺に納めるためと知った忠通が取り返そうとしたときに、奥州藤原氏との間を仲介したとされる人物である(角田1987)。

以上から、摂関家関係者による平泉の庭園群への関与はもはや疑うべくもないであろう¹⁷。

4. 秀衡の平泉—極楽の苑池

(1) 秀衡期の平泉再編

初代清衡は、平泉を「聖地」とし、仏教の苑とした。次代基衡は中心区全体を「苑池」に仕立てあげ、浄土世界を再現した。これらを継承した秀衡は「極楽浄土」を再現した。無量光院である。

平泉の堂塔の建築と安置仏から、富島義幸氏は次の二点を指摘した(富島2001)。①平泉寺院の特質として密教の仏堂がみられず顕教のものが選択導入されている。②多種の仏に対する信仰があらわれていた清衡の中尊寺から阿弥陀如来のみに集中する基衡妻の観自在王院、秀衡の無量光院と信仰の幅が狭くなっていく。

一点目については、密教の排除は浄土の具現化を理想としたゆえの結果であり、二点目の藤原氏の信仰の面においては、浄土教論者が弥勒浄土より阿弥陀浄土が優れていると論議しているように(速水1971)、阿



図9 秀衡期の三方位（真西方位・無量光院方位・金色堂方位）

弥陀極楽浄土信仰へと集約されていったと理解できないだろうか。その結果が、秀衡による無量光院造営で、平泉は極楽浄土を具現化した「苑池都市」となった。

当時期には、西方浄土認識による視覚的効果をねらった再開発が行われている（図9）。

①真西方位

秀衡期に柳之御所遺跡に園池が造営される。池は3時期に変遷がおえるが、いずれも金鶏山の真東に位置する。池の西側からは瓦片の出土が多く、上原真人氏は方一間の持仏堂を想定す

る（上原2001）。もし持仏堂が存在したならその背景に金鶏山が存在することになる¹⁸。

②無量光院方位

無量光院の伽藍中軸線は真東西でなく、東に8度傾く。伽藍中軸線を後ろに延ばすと金鶏山山頂にあたる。このため、金鶏山が伽藍造営の設計ポイントとなったことは明らかである。その本堂中心に日輪が沈む日が清衡の命日に近いということは、菅野成寛氏が証明されている（菅野1991）。但し、本堂が存在したなら、伽藍内から後ろの山並みはみえない。これは平等院の地形や、平等院鳳凰堂仏後壁面の右上伽藍と同じシチュエーションである。

③金色堂方位

柳之御所遺跡や無量光院を大きく囲う、大区画が造られる時、14度東に方位をとる。これは柳之御所遺跡と金色堂を結ぶラインと想定できる。この大区画は平泉館と考えるが（前川2000）、当ラインは金色堂と平泉館を視覚的に結びつける。平泉館の西には中尊寺・金色堂が存在するという空間認識となる。つまり、「吾妻鏡」の「注文」「一、館事」にみえる「金色堂正方」という認識である。

ところで、金色堂の内陣を三壇にする計画は秀衡が発案したという加島勝氏の研究がある（加島2005）。氏によると、基壇壇、秀衡壇を造ろうとしたのは、基壇が亡くなった直後から秀衡の生前で、秀衡によって考案されたのではないかという。秀衡は金色堂を象徴的に位置づけようとしていることが窺われる。

以上から、これらはすべて西方浄土という認識に基づくものと理解出来る。

（2）無量光院と平等院（図10）

次に無量光院について平等院との比較を行おう。まず無量光院と平等院の類似点と相違点をあげておく。類似点は、本堂が翼廊付臨池式阿弥陀堂であること、本堂内陣の規模、北小島と橋脚の存在、本堂は中島に建つという点である。いっぽう、無量光院は、本堂下陣が若干大きく、廊が一間長い、尾廊がない、屋根は瓦葺でなく檜皮葺と推測されていること、基壇化粧材がない、東に島があり3棟の建物が建つという違いが

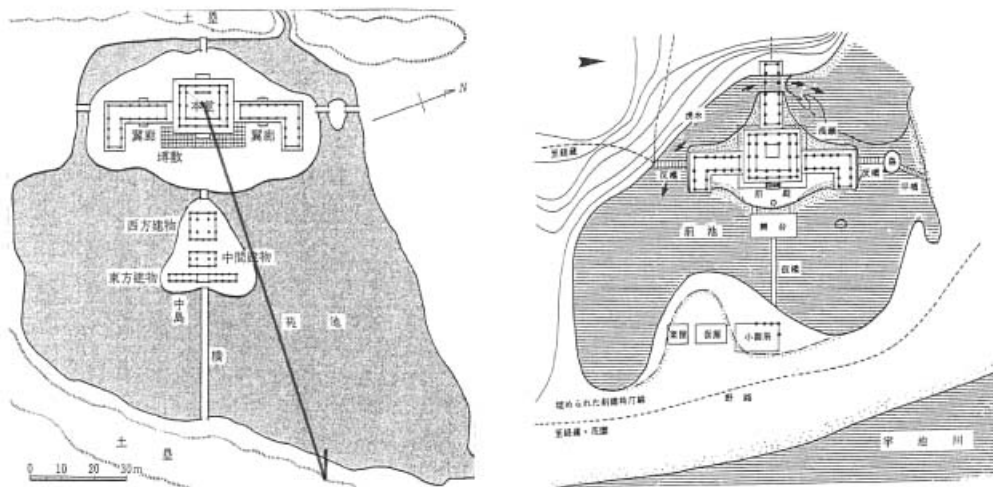


図10 無量光院 (左) と平等院 (右) 平面図

ある。さらに北・西・南を土塁で画され、東門がある（「注文」）。杉本宏氏は、東島の3棟の建物を、平等院前に立つ小御所と儀式の時の仮屋と楽屋に比定し恒常的に儀式を行うための施設ととらえた。屋根材と基壇化粧材の違いについても骨格部分の違いではなく、積極的に平等院を真似ようとした意識を読みとろうとしている（杉本1997）。ただ杉本氏は無量光院には、平等院で有名な経蔵や他の五大堂などの施設がなく、鳳凰堂空間の限られた部分を模倣したことに注意し、大きな違いは無量光院のほうが土塁で画されているので開放性がないと指摘する（杉本2003）¹⁹。いっぽう、建築史の立場から平泉の仏教建築について京都との比較を行っている富島義幸氏は、平等院より一間大きい無量光院の翼廊と、下陣が若干大きいことから発生する軒の出は、平等院より大きな屋根を想像させ、それをもたせる屋根材は、当時普通に使用されていた木瓦ではなかったかと推測し、当時の浄土イメージを考慮するなら、瑠璃色（緑色）に彩色されていた可能性を示唆する（富島2004）。これは創建期平等院も木瓦で、緑色の彩色と推測されたとした上での論である。事実であれば、無量光院は創建期平等院と同じ外観をもつということになる。

平等院の対岸には仏徳山と朝日山があり、無量光院の対岸には東稲山と観音山がみえ、目の前の景観が類似する²⁰。すでに吉永義信氏は無量光院の庭園について「堂の中堂の正面から左斜めに、即ち北東に見透線を作り、その焦点に美しい借景として東稲山を取り入れる意匠のもとになされた、巧みな作庭技術である」とし、平等院が面前の宇治川と朝日山が借景になっていることを紹介したうえで、「吾妻鏡」がいう「摸す」という行為は「寺院のこうした自然環境の相似をいうのであろう。猫間ヶ淵を宇治川に象り、東稲山を朝日山に摸して作庭した、その設計意図を意味する」としている（吉永1954、99頁）。平等院も、小御所は鳳凰堂の真正面ではなく、やや南よりに設置され、視線を遮っていない（杉本1997）。無量光院は東島に建物を配置するが、真東の視線だけは確保したのだろうか（図10左の矢印ライン）²¹。

平泉と宇治の類似点と相違点もあげておく。類似点は、無量光院と平等院、池が多いこと、空間仮託の方法である。杉本氏は、康平四年（1061）の四条宮寛子による多宝塔供養願文を読み解く中で、宇治川東を此岸、西を彼岸という空間仮託があったと主張する（杉本2005）²²が、私は平泉中心区を彼岸、周辺地域を此岸とみる（前川2001）。相違点は、平泉中心区には庶民の存在が確認されないに対し宇治では若干ながらも想定され、平泉中心区には手工業者の存在が認められるが、宇治ではその痕跡は認められていない（杉本2005）

(3) 無量光院の造営—極楽浄土の再現—

無量光院造営における、平等院阿弥陀堂の忠実な模倣、そして対岸の景色までもなぞらえた忠実性は何を表現しているのか。「注文」によると、無量光院の扉絵は「観経」の大意を描いたものであるという。これは観相による浄土世界の具現化であり、「極楽をいぶかしめば宇治の御堂を礼へ」（『後拾遺往生伝』）という思想が反映されていた。

無量光院は平等院の忠実な模倣と書いたが、平等院では春秋の彼岸に本堂真上を太陽が通り、日没するが、無量光院の背後には金鷄山があって、清衡の命日に日没を観測できるという（菅野1991）。『中尊寺供養願文』には「高きをもって山を築き、窪みにつきて池を穿つ」という、四神思想が反映されているが、金鷄山をバックに無量光院を造営したのは、同じ思想があったと思う。秀衡の平泉館は「金色堂正方」にあったとされる「注文」の記述からも先代の視線を意識したといわれるが、秀衡は清衡を強く意識した。

清衡が平泉に創造しようとした仏土の最終仕上げとして、秀衡は平等院を選択したと想像されるのである。前述のように富島義幸氏は、無量光院の屋根が、当時の仏後壁画をイメージするなら、瑠璃色に彩色された木瓦との試案を提示する（2004）。もしそうであるなら無量光院は、創建期平等院と同じ外観を持ち、それは当時在京していた（佐々木1994）²⁵清衡が見た可能性がある平等院の姿なのである。

清衡は平等院と同形態の阿弥陀堂の造営は行わなかったが、代わりに金色堂を発案した。秀衡は、清衡「供養願文」の主旨を慮り、平等院を、「新御堂」として無量光院の名のもとに平泉に再現した。鳥羽の勝光明院や法住寺殿の最勝光院が平等院を計測し実見して造営されたにもかかわらず、実際の構造や外観は異なる形で建築されたに対し（清水1988）²⁶、無量光院は、平等院、しかも頼通が造営した創建期の平等院を再現したことに意義があろう。秀衡は、「極楽の苑池」を創造しようとした。

(4) 平泉の都市化と「苑池都市」の挫折—理想と現実

平泉の都市化と権力獲得は、浄土の苑池から逸脱し、此岸の都市へと化してしまった。

果たして浄土と都市は並立するのだろうか？最初に都市構造を持った基衡期から、その矛盾を抱え込むことになる。

基衡期には、柳之御所遺跡に堀が廻らされる。その形態は、出羽の清原氏の城館の系統をひくという（室野2006）。私は基衡期に堀を構築した理由を次のように考えている。『尊卑分脈』の基衡の項には「六郡押領使・出羽押領使」と記されている。基衡の代に出羽押領使に任命されたことで、藤原氏は清原氏の後継者を誇示する必要が生じたのではないか。父・清衡の経歴からして清原氏を継いで当然ではあるが、出羽の在地勢力をまとめるのは、そのアイデンティティーが必要とされた。柳之御所遺跡に堀を築き、清原氏の城館にならったのは、上記の出羽対策という政治ゆえではないかと推測する。しかし、堀を構築することこそ、清衡の理念とは袂を分かたず。だからこそ、平泉を清浄に保つ構造にこだわったのかもしれない。

次の秀衡は西方への認識を再開発に利用し、極楽世界を意識してはいるものの、鎮守府將軍ならびに陸奥守といった権力の獲得は、よりいっそうの都市化を促進し、平泉を彼岸たる浄土世界から此岸へと導いていった。

初代清衡は「界内の仏土」と平泉を位置付けることにより、誰からも侵されがたい恒久の平和を平泉にもたらした。しかし「仏土」でなくなった平泉は、武力攻撃を容認させたのである。それを指揮したのは、皮肉にも先祖一族を滅ぼした源氏の嫡流・源頼朝であった。

頼朝が造営した鎌倉では、池の検出が極めて少ない²⁶。奥州合戦後、頼朝は大倉幕府の東北に平泉藤原氏や源義経の供養のため、永福寺を建立した²⁷。これは中尊寺の二階大堂を模したといわれている²⁸。頼朝が驚愕した平泉文化に、「苑池」は含まれなかったようである。それはとりもなおさず、文治五年（1189）の段

階で、平泉は浄土世界の「苑池都市」ではなくなっていたことの証といえよう。

おわりに

浄土・神仙思想のもとに苑池空間を現出した平泉中心区は彼岸である。これに対し此岸は、その周辺地域といえるだろう。前稿では、北上川対岸を此岸と考えていたが、中心区の特異性は他地区に勝るため、このように改める。藤原氏は現世浄土を実現しようとした。そのためには此岸が必要なのである。中心区から一般庶民の住居が見あたらないのも合点がいく。ここは藤原氏の理想郷なのだ。藤原氏は周囲の山河に風水・神仙・仏教的要素を仮託し、中心区を浄土世界に創りあげた。当時の仏教的世界観を中心区と周辺地区で創りあげたのである。あるいは、『俱舍論』という仏典にいう、須弥山を中心とする仏教的世界観により、平泉中心区は須弥山で周辺地区は、大海にある我々人間が住む南瞻部洲（なんせんぶしゅう）ととれようか。平泉周囲の山は鉄冨山ともみえる。浄土世界を現出した中心区と此の世がある周辺地区を合わせて当時の世界観を表現しているとすれば、周囲の山河や周辺地区もまた世界遺産たる要素を持ち、保全に努力すべきである。

「苑池都市」をキーワードに藤原氏三代それぞれの理念をみた。園池を多く造り、本格的な「苑池都市」を造り上げたのは、二代基衡であったが、清衡期は「苑池都市」ではなかったのだろうか。清衡期の平泉には「僧園」があったと想定でき、日本の古代の苑池で写経が行われたり仏教関連の遺物が出土していることから苑池が宗教に関する場であったことも示唆されていることや、また宗教都市という言い方もできるため、清衡期から「苑池都市」と呼称しても差し支えないと考えている。清衡期の旧地形の沢などは浴池とも想定できるからである。

初代清衡は、中尊寺造営にみる釈迦信仰、金鶏山における弥勒信仰、二階大堂や金色堂にみる阿彌陀信仰が見いだせ、それぞれ霊鷲山浄土、兜率天浄土、極楽浄土が存在する。二代基衡期には、毛越寺本尊にみる薬師信仰、千手院にみる観音信仰、金鶏山の弥勒信仰があり、瑠璃光浄土、補陀洛浄土と兜率天浄土がみてとれる。三代秀衡は無量光院や西方を意識する計画ラインが抽出でき阿彌陀信仰に集約された浄土信仰が存在した。平泉を「苑池都市」に造形した三代共通のコンセプトは、浄土世界の具現化と想定した。「中尊寺供養願文」にいうところの「界内の仏土」である。平泉は浄土世界の「苑池都市」を目指したと想定できるのである。

注

- 1 庭園を指す史料用語には、「園林」、「林泉」、「嶋」があり、「苑池」という用語はないので、このように規定した。なお、飛鳥資料館編『東アジアの古代苑池』では、皇帝や王によって宮城や離宮に設けられたインペリアルガーデンを「苑」と呼び、苑を構成する池を「苑池」としている（飛鳥資料館2005）。本論では、個々の寺院や邸宅（個別施設）に付属する庭園を「園池」、広大な領域に個別施設や山や池などで構成された空間を「苑池」と使い分ける。
- 2 ここでいう「苑池」とは東野氏のいう一つの大規模な庭園としての性格を持つ「離宮・別荘型庭園」に近い。
- 3 森氏はこれらを、自然風景地利用型と分類する（森1962）。さらに森氏は福原と巖島について、次のように指摘する（森1945、117～118頁）。

（前略）海洋を泉水とせんとする一大構想を練り、平相国清盛は福原遷都計画並に巖島神社御造営といふ二大事業により之を実現したものあることを忘却してはならない。平相国清盛は、延喜以来の鎖国同然の外交方針を一抛し、宜しく海外に発展すべきを主張したのであった。その方法としては先づ因襲を打破すべく遷都を決行し、宋人を福原京に迎へるなど、即ち福原新都は狭隘にして一條から五條迄しか設け得なかつたが、都市全域に亙って風致計画を樹立し松陰御所、月見の浜の御所なるものが海浜近くに設置され、附近の寺江、住江には海水に釣殿を構へて船着とし、又遠く巖島社殿は之を泉水中の庭園建築と

見なしたのであった。そこで巖島に就ては仁安の造営に際しては、釣殿をはじめ各殿屋廊廡等何れも海中に構築されたものであって、内海そのものを一つの泉水に見立てたるは庭園形態の大飛躍であり、その構想は偉とすべく、気宇の大なる事日本庭園史上随一であって、実に画期的の試みと賞して差支へないであろう。

- 4 「今鏡」 藤波の上 第四 伏見の雪のあした
- 5 「扶桑略記」 応徳三年十月二十条
- 6 白山社1次調査で花立溜池方面からの流路が確認されている。
- 7 現在、毛越寺や花立溜池は、近世に掘削された達谷窟方面から櫻川まで流れる照井堰から取水している。本澤氏は、照井堰の前進が12世紀にも存在したと考えている（「照井堰」について『平泉こども歴史くらぶ資料』1994）。12世紀のある段階からそのような大溝ができて、そこから取水したかもしれないが、今は想定できる流水経路を提示する。
- 8 「長秋記」 大治五年五月十七日条
- 9 「長秋記」 長承二年九月十四日条
- 10 北照井堰や花立溜池については、千葉信胤氏のご教示を得た。花立溜池に関しては次の史料をご紹介いただいた。
相原友直が記した「平泉旧跡志」（宝暦十年（1760））の「一、今熊野跡」に次の記述がある。
金鶏山の下にあり、近世まで礎残り有しを、用水堤を鑿（さく）し傾土手の内に築籠めたりと云ふ、用水堤とは田畑に用る水を貯る池を云ふ、
また同じく相原が書いた「平泉雜記」（安永二年（1773））「農民得金玉」という章に、
（略）其所ハ金鶏山ノ東南ニシテ往昔ノ新熊野社ノ跡ナリ、七八十年前マテハ社ノ礎石残りテアリシヲ堤ヲ造ル時土手ニ築籠タリト云リ、堤ハ郷俗耕種ニ用ル水ヲ貯ル池ヲ云、土手トハ乃（チ）池ノ四辺ノ堤ノコトヲ云ル方言ナリ
新熊野社跡と伝える場所の近くに農用水の溜池を造った際、礎石を堤に埋めたことが記され、金鶏山の下にあるということから、この堤が花立溜池の堤であることが予想される。さらに、安永四年（1775）に書き出された『安永風土記』平泉村分に、「一、堤四拾七ヶ所（四十六箇）」の一つに「一、花立 壱ヶ所」とあり、これが今日の花立溜池であることがわかる。
- 11 花立Ⅱ遺跡第17次調査では、礎を伴う小規模な通路が検出されている。
- 12 同上
- 13 森氏は、この文章に続けて、「平安京又はその近郊或は平泉の平地式伽藍と異なり、当時の浄土形式伽藍として共通の特色ある配置を示しているからであろう」と述べる。確かに毛越寺や観自在王院は平地式ではあるが、毛越寺の背後の山稜や平泉寺院の特色とあける山の存在は、興福寺末寺の庭園と似ている（森1959、88頁）。
- 14 「中右記」 嘉保二年（1095）五月二十一日条
- 15 「殿暦」 元永元年閏九月二十二日条
- 16 「台記」 康治元年八月三日条
- 17 忍辱山円成寺を再興した寛暹は、仁和寺で得度し、広沢六流の一つ忍辱山流の祖とされた東密僧で、仁和・円教両寺別当に補された人物である。司東真雄氏は、清衡の時代に、東密僧でしかも仁和寺流の僧が初期中尊寺の指導的役割を果たしていた可能性を、清衡館に取められた梵字を書いた平絹や中尊寺山王社境内の石塔に記された梵字から導き出している（司東 1954）。寛暹と平泉の直接的な関係を史料から見いだすことはできないが、司東氏の推論が正鵠を射ているならば、そこに関係性は見いだせよう。また法金剛院を造庭した静意は、醍醐寺で出家し、仁和寺にほど近い徳大寺に住した東密僧である。
- 18 岩手県教育委員会により、池は3時期あることが明らかとなっている。Ⅰ期は中島がなく、橋脚がかかる。Ⅱ期は中島がある池である。Ⅲ期は溝状になった状態である。総瓦葺きの持仏堂は、Ⅰ期の池に伴うとみられている。私も同意見である。
- 19 私は無量光院本堂と土塁構築には時期差を認めるため、造営当初は開放的であったと考える。土塁直下に旧表土が認められるからである。
- 20 平等院前面にみえる仏徳山と朝日山の光景を、鞍馬寺草創の説話という蓬萊山（双山から水が流れる状況を蓬萊山にたとえる）にあてる考えがある（金子2005）。
- 21 庭園と自然とを景観として視覚的に結合する手法について「眺望」という名称を用い、「眺望」の歴史的發展過程を追求する本中眞氏は、吉永氏の論を引用するが、法会時の視座が中島に集中しているため阿弥陀堂前面の視座は予定されていないとし、東稲山は何ほどの景観の意味を持たなかったとその意味を否定している。むしろ背景としての金鶏山を重視する（本中1994、270～272頁参照）。
- 22 本中眞氏は、寛子の願文を、平等院と対岸の朝日・仏徳両山を含めた地域全体を極楽浄土の空間とみなし、宇治川を浄土に通じる大河と見る。従って此岸は「政治・経済の中心地である京洛を意味するかも知れない」とし、杉本氏の見解とは異なる（本中 1994、250頁）。私は、平泉との類似性を考えると、杉本氏の見解に従いたい。
- 23 すでに角田文衛氏は、『中右記』の記載に着目し、清衡は都の憧憬者であり、中尊寺の堂塔社を建立できたのは都を実地検分した結果であると指摘し、仲介役として、源義家を想定している（角田1987）

- 24 清水擴氏は、勝光明院は供養願文に「二階一間四面堂」とあり、上層にも多くの仏像を安置していたことが平等院の形式とは異なるとし、最勝光院は寝殿造的な色彩が強く、二階廊の下層は吹きはなしでなく板敷で渡廊であったことを挙げている（清水1988）。
- 25 藤島亥治郎氏は無量光院造営の意義を次のように語る（藤島1995、169頁）。
- （前略）この御堂を通じての金鶏山の空に弥陀極楽浄土を、また、その山の連なりに、左手には関山中尊寺に釈迦の浄土を、そして左手の塔山下の毛越寺に薬師浄土を、と心憎くも四仏浄土の三浄土を欣求するこの秀衡の館の丘からの一切は、仏説にいう、「山谷皆浄土」であり、その扇の要としての平泉館であるから、ここに奇しくも初代清衡の願望した国土の浄土化が具現され、億民はもとより、一族郎党の魂の拠り所となったのであった。
- 26 馬淵和雄氏のご教示によると、数例とのことである。
- 27 『吾妻鏡』文治五年十二月九日条
- 28 『吾妻鏡』建久三年十一月二十日条

参考文献

- 飛鳥資料館編2005『東アジアの古代苑池』
- 上原真人 2001「秀衡の持仏堂—平泉柳の御所遺跡出土瓦の一解釈」『京都大学文学部研究紀要』40
- 上村和直 2007「平安京の変容と「京都」の成立」吉村武彦、山路直充編『都城—古代日本のシンボリズム』青木書店
- 遠藤基郎 2005「平泉藤原氏と陸奥国司」入間田宜夫『東北中世史の研究』上巻、高志書院
- 大村拓生 2006「鳥羽殿と交通」高橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』文理閣
- 2006『中世京都首都論』吉川弘文館
- 加島 勝 2005「金色堂の荘嚴と中尊寺経の軸端金具」『最澄と天台の国宝』京都国立博物館
- 金子裕之 2002『古代庭園の思想』角川書店
- 2005「古代都市と条坊制」『東アジアにおける古代都市と宮殿』奈良女子大学21世紀COEプログラム
- 河原武敏 1992「宋代の良岳に関する二三の考察」『日本造園学会関東支部大会研究・報告発表要旨』10
- 1994「海を渡った園林—園・苑・圃から日本の庭園へ」『月刊しにか』5-2
- 菅野成寛 1991「平泉無量光院考—思想と方位に関する試論—」『岩手史学研究』74
- 小松武彦 1998「法金剛院庭園遺跡」『日本庭園学会誌』6
- 小南一郎 2000「桃の伝説」『東方学報 第72冊』
- 佐々木博康1994「藤原清衡の在京について」『ぐんしょ』24
- 司東真雄 1954「中尊寺初期経営の宗派観」『岩手史学研究』17
- 清水 擴 1988「平等院伽藍の構成と性格」大田博太郎、福山敏男、鈴木嘉吉編『平等院大観』岩波書店
- 杉本 宏 1997「宇治平等院と平泉無量光院—その類似点と相違点—」『堅田直先生古希記念論文集』
- 2003「浄土への憧憬—無量光院と宇治平等院—」『平泉文化研究年報』3
- 2005「権門都市宇治の成立」『仏教芸術』279
- 中島和歌子2006「陰陽道と七瀬祓と「源氏物語」漣標巻の難波の海の祓」日向一雅編『源氏物語 重層する歴史の諸相』竹林舎
- 田村 剛 1964『作庭記』相模書房
- 角田文衛 1987「平泉と平安京—藤原三代の外交政策—」『奥州平泉黄金の世紀』新潮社
- ディーター・クーン2007「造園マニアのもたらした宋代の悲劇—短命に終わった良嶽」国際シンポジウム『伝統中国の庭園と生活空間』京都大学人文科学研究所
- 東野治之 2002「随唐の離宮と古代日本」金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店
- 富島義幸 2001「平泉の都市空間と仏教建築—白河・鳥羽院政期の京都との比較から—」『都市・平泉—成立とその構成—』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
- 富島義幸 2004「平安時代後期における浄土のイメージと建築造形—平泉無量光院・毛越寺を中心に—」『平泉文化研究年報』4
- 速水 侑 1971「弥勒信仰」日本人の行動と思想12 評論社
- 藤島亥治郎1995『平泉建築文化研究』吉川弘文館
- 前川佳代 2001「平泉の苑池」『平泉文化研究年報』1
- 2005「平泉と宇治—苑池都市の淵源」奈良女子大学21世紀COEプログラム『古代日本形成の特質解明の研究教育拠点』報告集6
- 2007「「聖地」平泉—清衡の平泉創造—」『平泉文化研究年報』7
- 丸山 仁 2005「奥州平泉と京—摂関家を中心に」入間田宜夫編『東北中世史の研究』上 高志書院

- 三浦 誠雄 2007 「造園マニアのもたらした宋代の悲劇—短命に終わった良嶽」へのコメント」
国際シンポジウム『伝統中国の庭園と生活空間』京都大学人文科学研究所
- 美川 圭 2001 「鳥羽殿の成立」上橋手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館
- 室野秀文 2006 「城館の発生とその機能—安倍氏、清原氏、奥州藤原氏の城館とその系譜—」
『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 目崎徳衛 1978 「西行の思想史的研究」吉川弘文館
- 本中 眞 1994 「日本古代の庭園と景観」吉川弘文館
- 森 蘊 1945 「平安時代庭園の研究」桑名文屋堂
- 森 蘊 1959 「中世庭園文化史」奈良国立文化財研究所学報第六冊
1962 「寝殿造系庭園の立地的考察」奈良国リス文化財研究所十周年記念学報（学報第13）
1986 「作庭記の世界」NHKブックス 日本放送協会
- 柳之御所遺跡調査事務所 2006 「柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷（中間報告 その2）～史跡整備計画との関わりを中心に～」
『平泉文化研究年報』6
- 吉永義信 1954 「第六章 庭園」『無量光院跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第3 文化財保護委員会

報告書

- 平泉町教育委員会 1991 「泉屋遺跡第3次・白山社遺跡第1次発掘調査報告書」岩手県平泉町文化財調査報告書第27集
- 平泉町教育委員会 1999 「平泉遺跡群発掘調査報告書」岩手県平泉町文化財調査報告書第73集
- 平泉町教育委員会 2003 「花立Ⅱ遺跡第17次発掘調査」『平泉遺跡群発掘調査略報』岩手県平泉町文化財調査報告書第81集

出典図版一覧

- 図1：前川2001、図2：上村2007、図3：前川2001、図4：森1962、図5：作図、図6：（左）藤島1995、（右）森1986を一部改変、
図7：森1959、図8・9：作図、図10：（左）藤島1995、（右）杉本1997

付 記

本稿を校正中に、奈良女子大学特任教授金子裕先生の訃報に接しました。私が奈良女子大学博士後期課程に在学中に、奈良文化財研究所において先生のゼミを受けたことが、「平泉の苑池」の着想となりました。先生からは、ご専門の古代都城や律令祭祀だけでなく、北宋の良嶽についてや西から東へ流れる水のエネルギー、蓬萊山など本稿の内容に関わる面で多大な学恩をいただきましたこと、感謝の意に絶えません。3月17日のお彼岸の入り日に亡くなられたとのことです。藤原氏三代が平泉に仮託したような浄土世界の蓮花の上で、酒宴をされていることを心よりお祈りする次第です。

平泉の市街地形成

－建物軸方向の特徴について－

磯野 綾

1. 研究の背景と目的

中世平泉の道路には平安京の様な東西南北軸（以下「正方位軸」と呼ぶ）がある。例えば平泉南辺の毛越寺はその建物配置と道路軸方向がいずれも正方位軸であることから、平泉は平安京との関連性が強く示唆されている¹⁾。一方、平泉北東よりの柳之御所周辺では近年の発掘調査により、正方位と異なる軸が抽出されている。ただし、発掘調査のほとんどは道路工事及び建設工事の際に行われる緊急発掘調査であり、その発掘箇所も断片的なものに止まることから、建物の配置等についてはまだ不明な点が多い。

本稿は昨年度からの継続研究として発掘調査報告書を素に、建物軸方向の特徴を5箇所のゾーンに分けて把握する。さらに平安京の寝殿造りとは異なる在地館の系譜の継承を唱える先行研究が存在する中で、発掘された柳之御所の建造物等の配置に着目し、他地域・中世居館との比較を通して、その空間構成についての地方性もしくは中央性（平安京）についてフラクタル幾何学的手法を援用して考察を加えることを目的としている。

2. 建物の立地と建物軸方向について

I) 研究対象：関山、金鶏山、太田川、北上川に囲まれた平泉市街地内で、発掘調査にて検出された礎石造建物および据立柱建物のうち、発掘調査報告書にて12世紀に属する可能性が示唆された建物遺構（204棟）を対象とした。（図5参照）

II) 建物軸に関する指標の設定

発掘調査報告書では建物の桁行きあるいは梁間柱列がなす直線を「建物軸」としているが、本稿では建物軸方向の特徴を示す指標として、以下の四指標を設定した。

①等高線偏角（図1）

国土地理院作成の現代の地形図（縮尺1/2500）をもとに、建物の立地場所に直近する等高線に基づき建物梁間軸方向線と最大傾斜線との偏角を用いて、地形との関連性を表す。ここで述べる最大傾斜線と偏角は等高線方向と建物梁間方向との差を指し、以下の手順で求められる。1) 建物跡の外接円を引く。2) 等高線と外接円が交差する二点間を直線で結び、その直線に垂線を引く。3) 垂線と建物軸方向との角度を『等高線偏角』とする。

②視線偏角（図2）

日本の古代集落・都市において、重要施設の配置と周辺地形の位置との関連性が先行研究で示されている^{2) 3) 4)}ことから、本稿では対象物を山岳地に限定し、建物の立地点から目視可能で周辺景観を特徴づける日印となる対象物への視線と建物梁間軸方向線との差を「視線偏角」とし、以下の手法で求める。

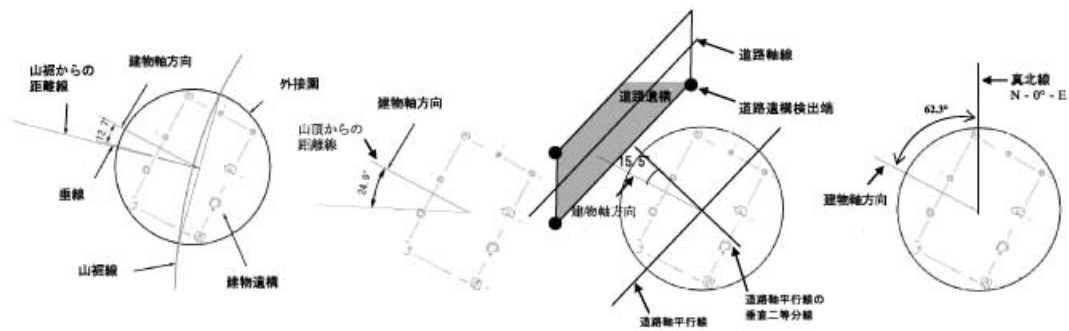


図1 等高線の測定法 図2 視線偏角の測定法 図3 道路偏角の測定法 図4 正方位偏角の測定法

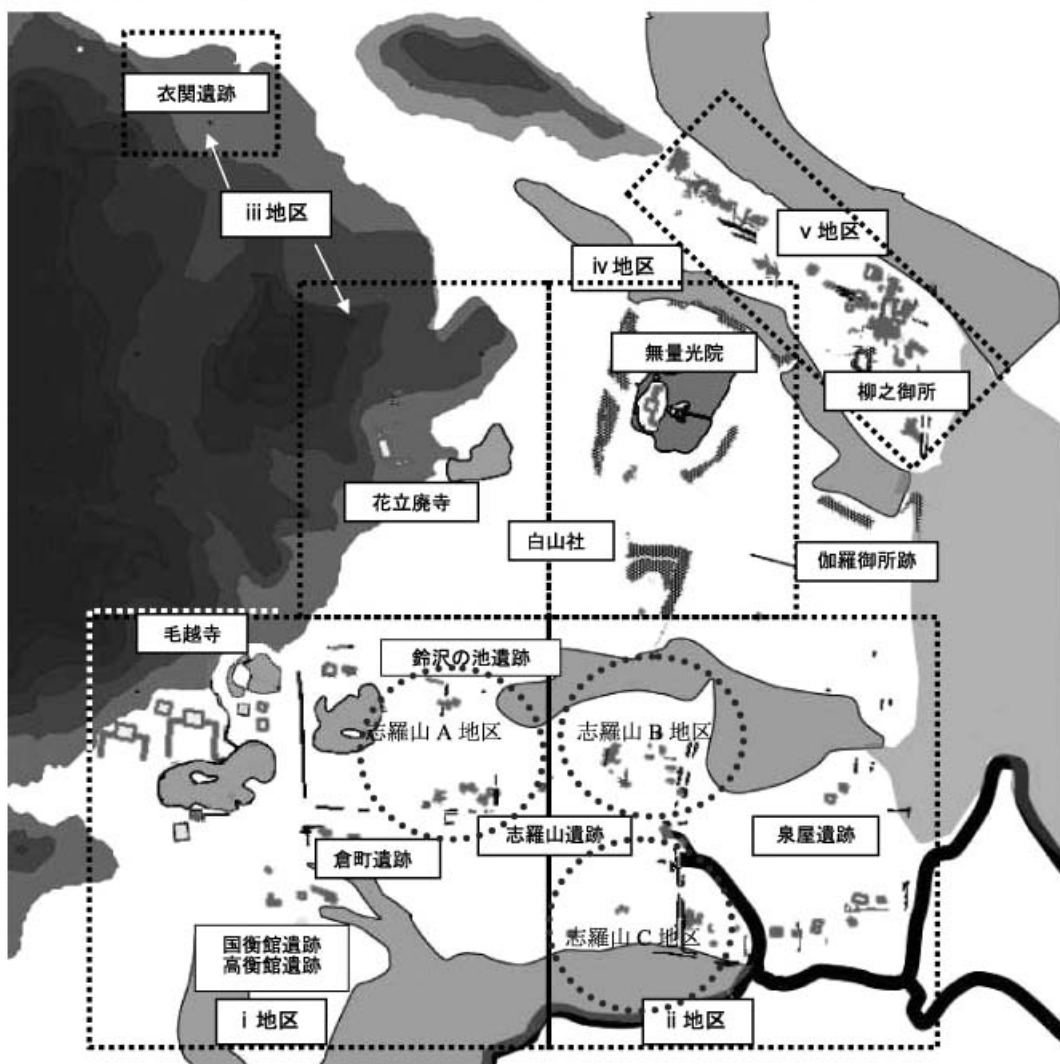


図5 平泉遺跡分布図

1) 建物立地点から目視可能な山頂と建物中心点を結び山頂－建物距離線とする。2) 1) の線と建物軸方向が成す角を視線偏角とする。なお対象となる山頂は建物地点より目視可能で、建物から最も近い山頂とする。

③道路偏角 (図3)

発掘調査報告書によれば平泉の区画割りは約400尺を基準としていたことから、検出された建物遺構から400尺(約120m)以内にある直近の道路遺構に着目し、建物梁間軸方向線と道路軸方向線との差を「道路偏角」とし、以下の手順で求める。1) 道路遺構の検出端3点を元に平行四辺形を作成し、その中心線の長辺を道路軸線とする。2) 建物跡の外接円を引く。3) 外接円の中心を通る道路軸平行線の中点から垂線を引く。垂線と建物軸方向との角度を『道路偏角』とする。道路軸偏角が0度に近いほど建物は道路に対し平行に、また90度に近いほど直行して配置されたことを示す。

条坊制都市などでは、建物は道路に対し平行あるいは直行して配置されたことから、この指標は道路・建物軸方向について、平安京との関連性(中央性)を示唆するものである。

④正方位偏角 (図4)

建物軸方向が北から東西に振れる角度を「正方位偏角」とする。建物軸方向は、礎石が地上に露出しているものはGPS測量⁵⁾により、掘立柱建物など地上に柱跡が露出していないものは発掘調査報告書を基礎資料とした。また、発掘調査報告書にも建物方向の記載がないものについては、都市計画図(1:2500)上にプロットされた建物遺構図を用いて建物軸方向を抽出した。

条坊制都市では南北正方位に道路が区画され建物が配置されたことから、正方位と建物軸方向との関連性について考察を行う。

Ⅲ) 研究の手順

発掘調査にて検出された礎石及び掘立柱建物を対象とし、1/2500地図にプロットしたうえで、①等高線偏角②視線偏角③道路偏角④正方位偏角を抽出。①②③④の比較・考察を行い、建物が立地している地形の斜度、周辺山頂の位置及び道路軸の方向の何れに影響を受けているかを明らかにする。偏角のうち①②は建物近景の地形土地と建物軸方位との関係性(以下、本稿では「属地性」と呼ぶ)を示すものであり、③④条坊制都市における建物配置との共通性(以下、本稿では「中央性」と呼ぶ)を示すことから、本稿はこの2つの視点から平泉市街地形成を考察する。

検討にあたり、本稿では5つの地区を設定し、うち志羅山遺跡はその範囲が広いことから更に3地区(A～C地区)に分割した。(以下、項目i～vは図5参照)結果を以下i～vに示す。(表1)

Ⅳ) 結果

i) 毛越寺周辺(毛越寺・倉町遺跡・国衡／高衡館遺跡・鈴沢の池遺跡・志羅山遺跡)(図6、図7)

分析対象の建物遺構は計42棟(国衡館5棟、倉町遺跡5棟、毛越寺6棟、観自在王院2棟、鈴沢の池遺跡3棟、志羅山遺跡21棟)である。(表1)

この地区の視線偏角は分散が大きい(建物方向と周辺山頂の位置の一致が少ない)一方、中央性の条件を満たす建物のうち道路偏角・正方位偏角がいずれも0°以上10°未満のものは21棟、うち両偏角とも5°未満のものは8棟であった。この地区で検出された道路軸はほぼ正方位であることから、建物の半数が道路に沿って正方位軸で建設された、中央性の強い地区である。

また、この地区の建物遺構のうち次の建物は特徴的な建物軸方向を有する。まず鈴沢の池遺跡(昭和49年度調査A-5地区)及び志羅山遺跡第90次発掘調査から検出された建物遺構(計5棟)の道路偏角が10°以下であり、観自在王院東側の道路軸方向との平行性が認められた。但し、この5棟の建物軸方向は

表1 建物の立地と建物軸方向 結果

偏角番号 ①等高線偏角 ②視線偏角 ③道路偏角 ④正方位偏角

地区名	対象建物棟数 (棟) A	指標番号	5°未満		5°以上10°未満		10°以上		属性性/中央性の有無	両偏角10°未満		両偏角5°未満	
			該当数 (棟) B	割合 (%) A/B*100	該当数 (棟) C	割合 (%) C/A*100	該当数 (棟) D	割合 (%) D/A*100		該当数 (棟) E	割合 (%) E/A*100	該当数 (棟) F	割合 (%) F/A*100
i地区	42	①	8	19.0	7	16.7	27	64.3	属性性×	0	0.0	0	0.0
		②	0	0.0	0	0.0	42	100.0					
		③	19	45.2	12	28.6	11	26.2					
		④	18	42.9	12	28.6	12	28.6					
ii地区	67	①	12	17.9	11	16.4	44	65.7	属性性×	0	0.0	0	0.0
		②	0	0.0	0	0.0	67	100.0					
		③	18	26.9	8	11.9	41	61.2					
		④	11	16.4	14	20.9	42	62.7					
iii地区	8	①	1	12.5	0	0.0	7	87.5	属性性×	0	0.0	0	0.0
		②	0	0.0	0	0.0	8	100.0					
		③	-	-	-	-	-	-					
		④	1	12.5	0	0.0	7	87.5					
iv地区	11	①	3	27.3	7	63.6	1	9.1	属性性×	6	54.5	1	9.1
		②	7	63.6	1	9.1	3	27.3					
		③	3	100.0	0	0.0	0	0.0					
		④	0	0.0	4	36.4	7	63.6					
v地区	76	①	11	14.5	10	13.2	55	72.4	属性性×	9	11.8	0	0.0
		②	0	0.0	2	2.6	74	97.4					
		③	30	39.5	28	36.8	18	23.7					
		④	17	22.4	22	28.9	37	48.7					

※該当数は延棟数を、割合は各地区で対象とした建物棟数に対する建物該当数の割合を表している。

※IV地区の③道路偏角は割合は伽羅御所で検出された3棟に対する該当建物の割合を表す。詳細はIV項参照

鈴沢の池遺跡内から検出された溝との平行性がより強く検出された(4棟は溝との偏角5度以内、最小値0.13°)。(図7 一点鎖線円)

つまりこの溝は排水路というより道路又はこの区域を区画する構造物の可能性があり、現在溝は一条しか検出されていないものの、これに平行する溝(道路側溝)が今後検出される可能性がある⁶⁾。また倉町、国衡館遺跡から①~④の偏角いずれも大きな建物が検出されたが(図6、図7参照 実線円内)、現段階では明確な要因は見当たらなかった。太田川に近接して建っていることから、川の流形が少なからず影響していたことが考えられる。他に建替えが反復する場合には等高線の方向、山頂の位置、道路軸方向および真北方向と建物軸方位に関連性が認められなかったケースが4棟検出された(図6、図7 破線円)。これらの建物の面積は小さく、隣接して面積の大きな建物が検出されていることから、当該建物は大きな建物の付属屋など居住性が低い建物の可能性があり、指標①~④以外の建物軸方向設定要因があり得る。

ii) 志羅山遺跡・泉屋遺跡(図8、図9)

平泉の南地区で建物遺構は計67棟(志羅山遺跡B地区22棟、志羅山遺跡28棟、泉屋遺跡17棟)。正方位軸及び東偏する2種類の道路軸が存在し、毛越寺から続く東西路の幅員が狭まる地域である。

偏角(等高線・道路・正方位)が0~10°の検出割合はそれぞれ約34~38%で大差はなかった。(表1)中央性を示す道路・正方位偏角共に0°以上10未満の条件を満たす建物は25棟(37.3%)で、うち両偏角5°未満のものは6棟(9.0%)であった。つまりii地区はi地区と比較して、属性性に差はないものの中央性は低い地区である。またi地区同様、建替えが反復する場合には等高線の方向、山頂の位置、道路軸方向および真北方向と建物軸方位に関連性が認められなかったケースが10棟検出された。(図8、9 実線円)

ただしこれはii地区全体の結果であり、各遺跡ごとの特徴を下記に示す。

まず、志羅山B地区の特徴は道路軸からの距離が5mを超えると道路軸と平行性より、正方位軸または立地点の地形に沿った建物が検出され(図8、9 破線円)、平泉の中でも建物軸への影響要因が一定でないラフな建物配置をしていたことである。

次の志羅山C地区は、ii地区内の中でも他の遺跡と比べ中央性が高かった。また志羅山C地区第24次発

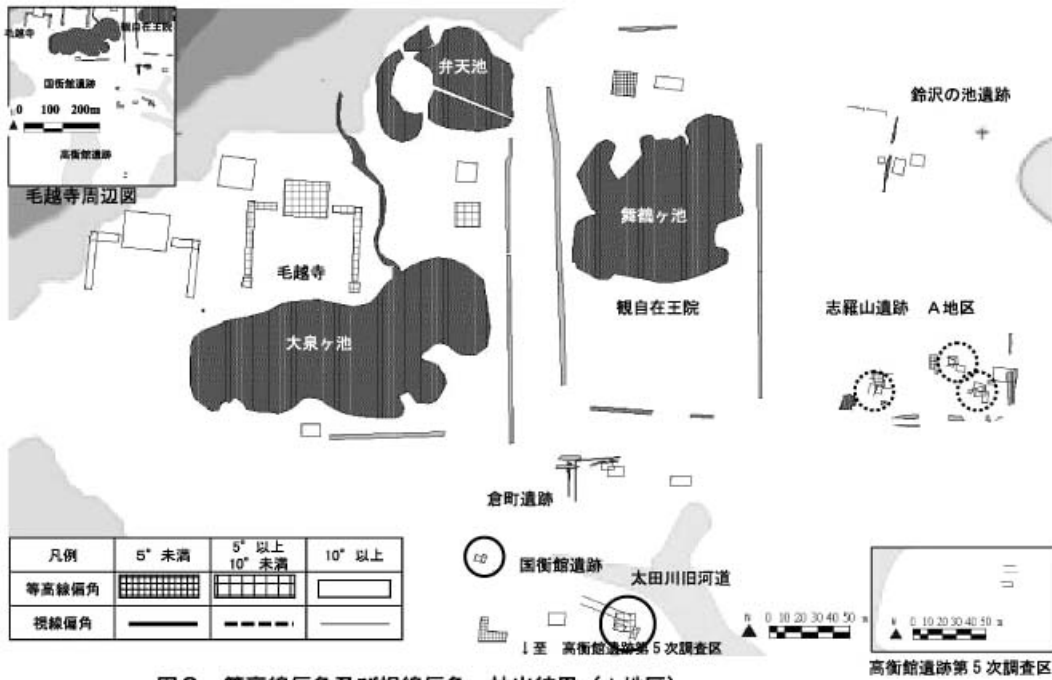


図6 等高線偏角及び視線偏角 抽出結果 (i地区)

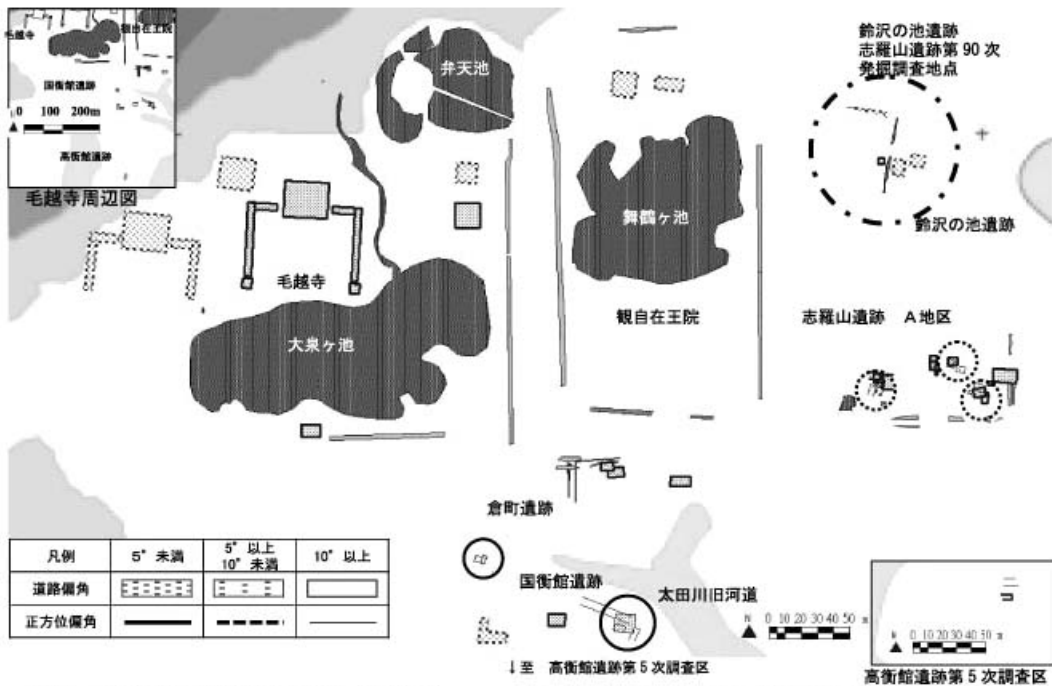


図7 道路偏角及び正方位偏角 (i地区)

※ 高衛館遺跡第5次調査区は図6、図7南端から南に約170mに位置し、図内に収まらない為、別図とした

掘調査地区（図9）で検出された2棟の建物軸方向N-16°-Eは志羅山B地区で検出された道路遺構との偏角はいずれも1°度以下と極めて小さい。

つまりB地区内の道路と同値の道路軸方向を持つ道路が近くに検出される可能性がある。この2棟の建物については志羅山24次発掘調査報告書⁷¹にも道路軸との一致性を示しており、今後の発掘調査の結果によって、考察を加えたい。

最後に、泉屋遺跡は道路、正方位偏角5°未満の建物はないが、両偏角が0°以上10°未満の建物は11棟であり、泉屋遺跡の対象建物遺構17棟の65%を占めた。また、他の地区と比べると東西棟の建物（6棟）が多い。（図9 一点鎖線円）

精度は高くないが中央性のある建物配置や東西棟の建物が多い要因は現段階では見当たらなかった。ただし、太田川旧河道が近接することから、東流する太田川が建物配置に少なからず影響を与えていたと考えられる⁸¹。

iii) 花立廃寺・衣関遺跡（図10、図11、図12、図13）

平泉西側に連なる山稜の麓に位置する。分析対象の建物遺構は計8棟である（花立廃寺2棟、衣関遺跡6棟）（表1）。なお、花立廃寺、衣関遺跡ともに建物遺構検出地点より400尺（約120m）以内で道路遺構は検出されていない為、iii地区での道路偏角の抽出は行わない。

等高線偏角5°未満（1.8°）の建物が花立廃寺で、正方位偏角3°未満（1.5°）の建物が衣関遺跡でそれぞれ1棟検出されるに留まった。

花立廃寺で検出された大型建物及び小規模建物の等高線偏角はそれぞれ1.8°、10.29°であった。大型建物の等高線偏角が小さい理由は、花立廃寺のすぐ西側には金鶏山があり、山腹の斜度によって立地点の地形に沿って配置されたためであり、花立廃寺は属地性の高い建物であると言える。小規模建物も10°を超えるものの、その建物軸方向は立地点の地形を意識して配置されていたと考察できる。

一方、衣関遺跡は1棟（図12 破線円）を除き建物配置の要素が現時点では見当たらない。ただし検出された道路遺構の建物軸方向はほぼ一定である。これは平泉の他地区を参考にすると、現在検出されていないものの建物の近くに道路が通っていた可能性を示唆するものと考えられる。

iv) 無量光院周辺（図14、図15、図16、図17）

分析対象の建物遺構は計11棟である（無量光院8棟、伽羅御所跡3棟）（表1）。なお、無量光院の建物遺構検出地点より400尺（約120m）以内で道路遺構が検出していない為、道路偏角抽出を行うのは伽羅御所跡のみとし、無量光院の建物を対象とした道路偏角の抽出は行わない。よって道路偏角のみ伽羅御所で検出された3棟に対する該当建物の割合を求めた。

この地区は他の地区と比べ、等高線偏角及び視線偏角の小さい建物が多い。特に視線偏角5°未満は60%を超え、等高線偏角、視線偏角共に0°以上10°未満の条件を満たす建物は6棟（54.5%）あり、うち1棟は両偏角とも5°未満であったことより、無量光院周辺は属地性の高い建物である。特に無量光院は属地性が高く、検出された全ての建物の等高線偏角、視線偏角共に0°以上10°未満の条件を満たした（図14）。

その理由として、多くの先行研究で指摘され、昨年度の筆者自身の成果報告と重複するが、浄土空間を具現化した寺院である為、東向き建てられたという前提のもと建物を配置し、更に中島からの視線が無量光院本堂—金鶏山山頂を一直線上になるよう配置されていたためである。

また伽羅御所の全ての建物が道路偏角5°未満であることから（図17）、現在検出されていないものの、道路偏角抽出の対象とした道路と同様の東偏した道路が建物近くに通っていた可能性がある。

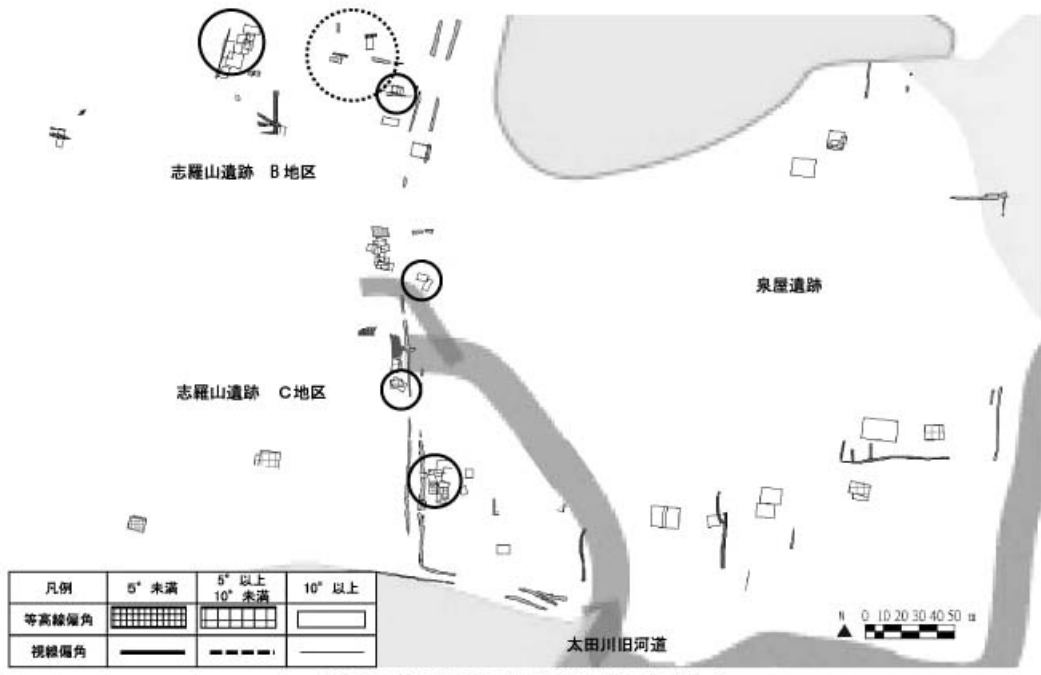


図8 等高線偏角及び視線偏角 (ii地区)

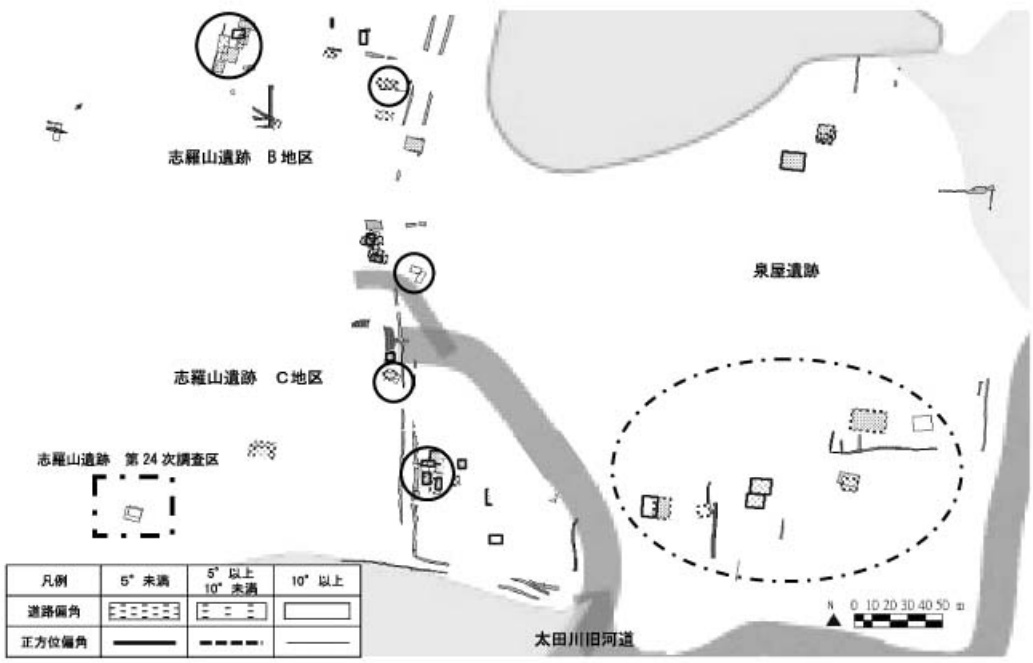


図9 道路偏角及び正方位偏角 (ii地区)

v) 柳之御所 (図14、図15)

分析対象の建物遺構は計76棟である (二重堀内41棟、二重堀外35棟)。(表1)

偏角 10° 未満の該当数が最も多いのは道路偏角であり、続いて正方位偏角、視線偏角、等高線偏角と続き、柳之御所内の建物の80%近くが道路に沿って建てられていた。

中央性の条件を満たす建物のうち両偏角が 0° 以上 10° 未満のものは21棟、うち両偏角とも 5° 未満のものは8棟であった。この地区で検出された道路軸はほぼ正方位であることから、建物の半数が道路に沿って正方位軸で建設された、中央性の強い地区である。

道路・正方位偏角共に 0° 以上 10° 未満の条件を満たす建物は30棟(39.5%)で、両偏角とも 5° 未満のものは6棟(7.9%)に止まる。柳之御所は全体的に中央性のある建物配置だが、両偏角 5° 未満の割合がi、ii地区より少ないことから、建物向き精度は他の地区よりラフであった。ただし、これは柳之御所全体の結果であり、二重堀内外のそれぞれの特徴を以下に示す。

まず、柳之御所堀外の特徴は道路偏角、等高線偏角が共に小さい建物が9棟(11.8%)検出され、建物位置が高館に近いほどその傾向が強くなることである(図15、図16 一点鎖線円)。

つまり堀外では建物のみならず、道路も地形に沿って建設された可能性がある。なお、この仮説については藤島亥治郎氏も同様の説を述べている⁹⁾。

次に堀内の建物は道路偏角、正方位偏角共に 0° 以上 10° 未満の条件を満たす建物は19棟であり堀内建物検出数41棟のうち39.5%を占め、 5° 以上 10° 未満の建物は6棟(14.6%)であった。中央性が高い建物は堀内道路(図16 破線)の以南に多く(図16 破線円)、中央性がそれほど高くない建物は道路の以北に配置されていた。特に柳之御所中心部とされる大型建物は南北棟であることから、柳之御所堀内中心部は道路に直行して建物が配置されていた。

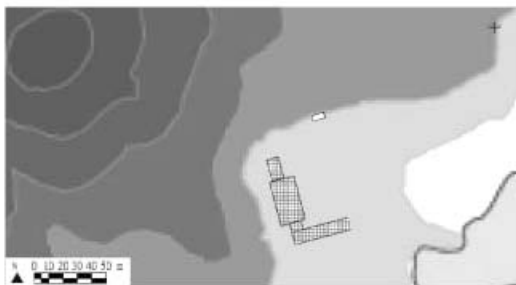


図10 等高線偏角及び視線偏角 (花立廃寺)

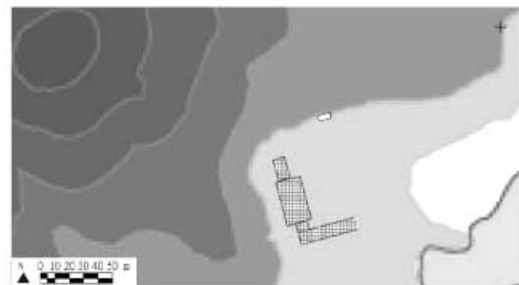


図11 道路偏角及び正方位偏角 (花立廃寺)

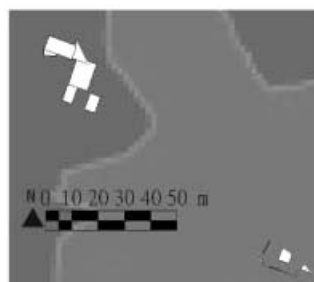


図12 等高線偏角及び視線偏角 (衣関遺跡)

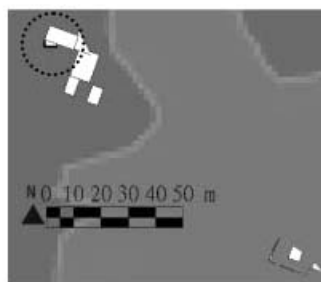


図13 道路偏角及び正方位偏角 (衣関遺跡)

凡例	5° 未満	5° 以上 10° 未満	10° 以上
道路偏角	□□□□□□□□	□□□□□□	□□□□□□
正方位偏角	—————	—————	—————

凡例	5° 未満	5° 以上 10° 未満	10° 以上
等高線偏角	□□□□□□□□	□□□□□□	□□□□□□
視線偏角	—————	—————	—————

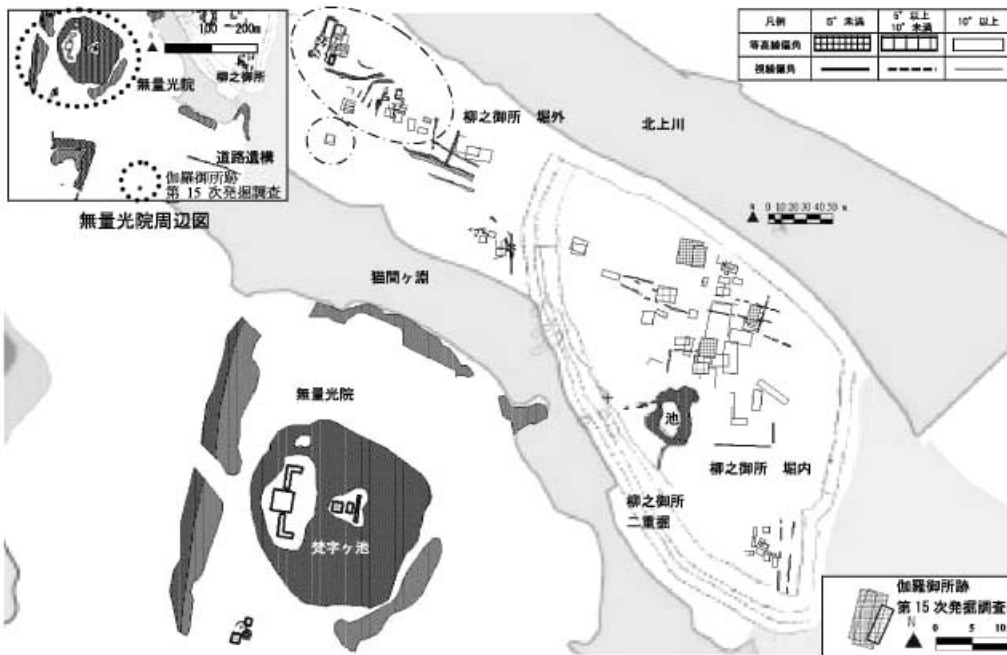


図14 等高線偏角及び視線偏角 抽出結果 (iv地区、v地区)

図15 (左上囲み) 等高線偏角及び視線偏角抽出結果 (加羅御所跡)



図16 等高線偏角及び視線偏角 抽出結果 (無量光院)

図17 (左上囲み) 道路偏角及び正方位偏角抽出結果 (加羅御所跡)

※加羅御所跡第15次発掘調査区は無量光院 (図14、15) から離れており図内に収まらない為、別図とした。位置関係は無量光院周辺図参照

上記の結果並びに東西棟の面積が大きいものでも道路・正方位両偏角とも 10° 未満になるものは1棟しかないことは、柳之御所の配置は南北棟を主とした施設であることを示唆している。そして、柳之御所堀内南から中心部では中央性が高く、北側では2棟(図16 実線円)を除き中央性が高くないことは、3代秀衡の居館・伽羅御所の位置と関係すると推測できる。伽羅御所から柳之御所に入る際、南の道路遺構は柳之御所の表玄関であり、そこから臨める道路沿いは中央性の高い建物を配置したと考える。実際に柳之御所南では中央性の高い建物が東偏する建物を囲むように建設されている(図16 破線円)。

ただし、中央の寝殿造りが東西棟を主とするといわれていることに対し、南北棟を主としていることは特徴的である。平泉の他の地域を参考にすると、柳之御所は東に北上川、西に猫間が淵で挟まれていることから、国衙館や泉屋遺跡と同様に水域の位置が建物軸方向との関連性が推測できるが、北上川流形が現在明らかになっていないため、水域と建物軸方向との検証は今後の課題である。

3. 柳之御所の空間構成

柳之御所は堀内部に中島を有する池や中心建物群南前面に広い空間があることから中央的(平安京の貴族風)な建物様式であることを示唆する研究¹⁰⁾がある一方、不揃いな柱列や掘立柱のみで建物が構成されていることなどから非中央的な城館であるとの研究¹¹⁾もある。

第2項にて柳之御所堀内の建物軸方向には中央性が強い場所と強くない場所に大別されるとの結果が得られたが、本項はその空間構成の規則性についてフラクタル次元を用いて検証を行い、柳之御所の建物配置について特徴を把握し、鎮守府及び東日本の地方豪族の居館との比較を通して、柳之御所における中央性・地方性について考察を加える。

I) 研究対象

柳之御所の他に対象とした施設は、下記の8施設である(図18、表1)。

地方城館：宮久保遺跡、今小路遺跡、岩川遺跡、伊平遺跡

平安京内の施設及び朝廷が建設した施設：多賀城、内裏、東三条殿、鳥羽離宮(金剛院)

II) フラクタル次元

フラクタル次元は形態の自己相似性や複雑さを表す指標として用いられ¹²⁾、0から2の間の値をとる。空間構成の把握に援用する場合、諸施設が規則的に(自己相似性が強く)配置されていると、その値は2に近くなる。但し2次元画像のフラクタル次元を計るための明示的な方法は一般に存在しないので、本稿ではボックスカウンティング法を用いて、フラクタル次元を次の手順で設定した。

- ①対象施設の区画を形成する工作物(塀又は堀等)を抽出する。
 - ②①の工作物が直線の場合、工作物の最長の距離を正方形の1辺の長さとし、敷地内の工作物面に2辺以上接する正方形を設定する。①の工作物が曲線の場合、対象となる領域に外接する正方形を設定する。
 - ③正方形の一辺をそれぞれ、16.15.14.⋯1に等分割し、正方形にグリッドを入れる。
 - ④それぞれのメッシュに対して、該当するマス目の個数を数える。該当するマス目とはカウント対象の人工物の一部または全部を含むマス目である。
 - ⑤グリッドの分割数を16.15.14.⋯1と変化させていき、それぞれに対しての④の数(n)を集計したものが表2である。また、 $\log(r)$ と $\log(n)$ をそれぞれ算出したものを合わせて示す。
 - ⑥その回帰直線の傾きの絶対値をフラクタル次元とする。
- たとえば、分割数10(分割の段階 $r = 7$)の時、柳之御所で建物のみを分析対象とした時の直線の傾きは

-0.989であるから、フラクタル次元：0.989となる（図19、図20、表2）

Ⅲ）結果

本稿は空間構成要素を以下の3種類に分類し（図21）、段階的に分析を行い、他地域の中世城館及び平安京内の施設と比較をした。（表3、図22）

① 建物のみを対象とした分析

分析結果は大きく分けて、フラクタル次元1以上の施設と1以下の施設の2つグループに分けられる。フラクタル次元1以上の施設間では地方城館と平安京の施設間に大きな差はなかった。フラクタル次元1以下の2施設のうち柳之御所のフラクタル次元は0.989（<1.0）で自己相似性はないことから、建物配置に規則性は無いとの結果が得られた。分析対象の施設の中では宮久保遺跡に次いで8施設中2番目に低い値であり、地方にある他の中世城館が1.1以上のフラクタル次元を持ち、鳥羽離宮など平安京内の施設より高い値を示しているのに比べると、同時期の施設よりランダムな建物配置である。

② 建物及び土地に接着して設置されたもので且つ高さがある工作物（門・塀・橋など）を含んだ分析

分析結果は、「フラクタル次元≧1」「フラクタル次元=1.1±0.03」「フラクタル次元=1.2±0.02」「フラクタル次元≧1.3」の4つのグループに分けられる。地方城館の伊平遺跡のフラクタル次元が最も高い1.288であり、次に今小路遺跡、東三条殿…と続く。

柳之御所のフラクタル次元は比較施設間で最も低い1.022であり、1以上あるもののその値は低く、工作物を含めた建物配置に高い規則性があったとは言い難い。

③ ②に加えて地表面及び地表面下にある構造物（道路、溝、井戸など）を含んだ分析

分析結果は「フラクタル次元1.3以上」「フラクタル次元1.2以上1.3未満」「フラクタル次元1.1以上1.2未満」の3つのグループに分けられ、伊平遺跡を除き平安京内の施設及び朝廷が建設した施設はフラクタル次元が高く、地方城館は低いとの結果が得られた。

柳之御所のフラクタル次元は1.121であり、その値は宮久保遺跡の1.105より若干高いものの他の施設と比べると0.1近くの差があり、柳之御所内堀内の建物などの配置は規則性が低いとの結果が得られた。

また、多賀城、鳥羽離宮のフラクタル次元が分析段階①②は低く③は高い要因は、③の分析対象に苑池や道路（通路）などの地表面の構造物が含まれたことである。分析段階②までは中央的な施設も地方城館の分析結果に差はないが、③では明確な差が出たことは、中央性の高い施設の空間構成は建物配置のみだけでなく、全ての人工物の配置に配慮して構成されて事を示唆している。

以上より、全ての分析段階を通し柳之御所のフラクタル次元は他遺跡と比較して低い値を示し、その空間構成が規則でないとの結果が得られた。同時代の施設のうち未完掘である今小路遺跡や鳥羽離宮（金剛院）と比較し、ほぼ完掘された柳之御所のフラクタル次元が低いことは規則性の乏しい、つまり柳之御所の建物配置は条坊制の都市形態からは成り立ち得ないことを示している。

今回の比較対象8施設のうち、柳之御所の空間構成に最も近かった施設は中世在地領主の屋敷跡とされる宮久保遺跡であった（図15-3）。宮久保遺跡の分析対象時期は奥州藤原氏の平泉統治期間とほぼ重なる12世紀後半から13世紀前半であることから、柳之御所は中央の寝殿造りの様に規則的なものではなく、「中世在地領主の屋敷」の性格が強い施設と考えられる。また、柳之御所における空間構成は中央性の低い建物であり、京都の空間構成（建物配置）の形態は継承していない。しかし、平泉研究でしばしば比較対象となる鎌倉内の対象遺跡である今小路は、廊で短く建物間を結んだ東西棟を中心とした建物配置であることから中央からの系譜をひくと先行研究¹³⁾で指摘されている。

その一方で、白河法勝寺と毛越寺、平等院鳳凰堂と無量光院、中尊寺二階大堂と鎌倉の二階堂など仏教建

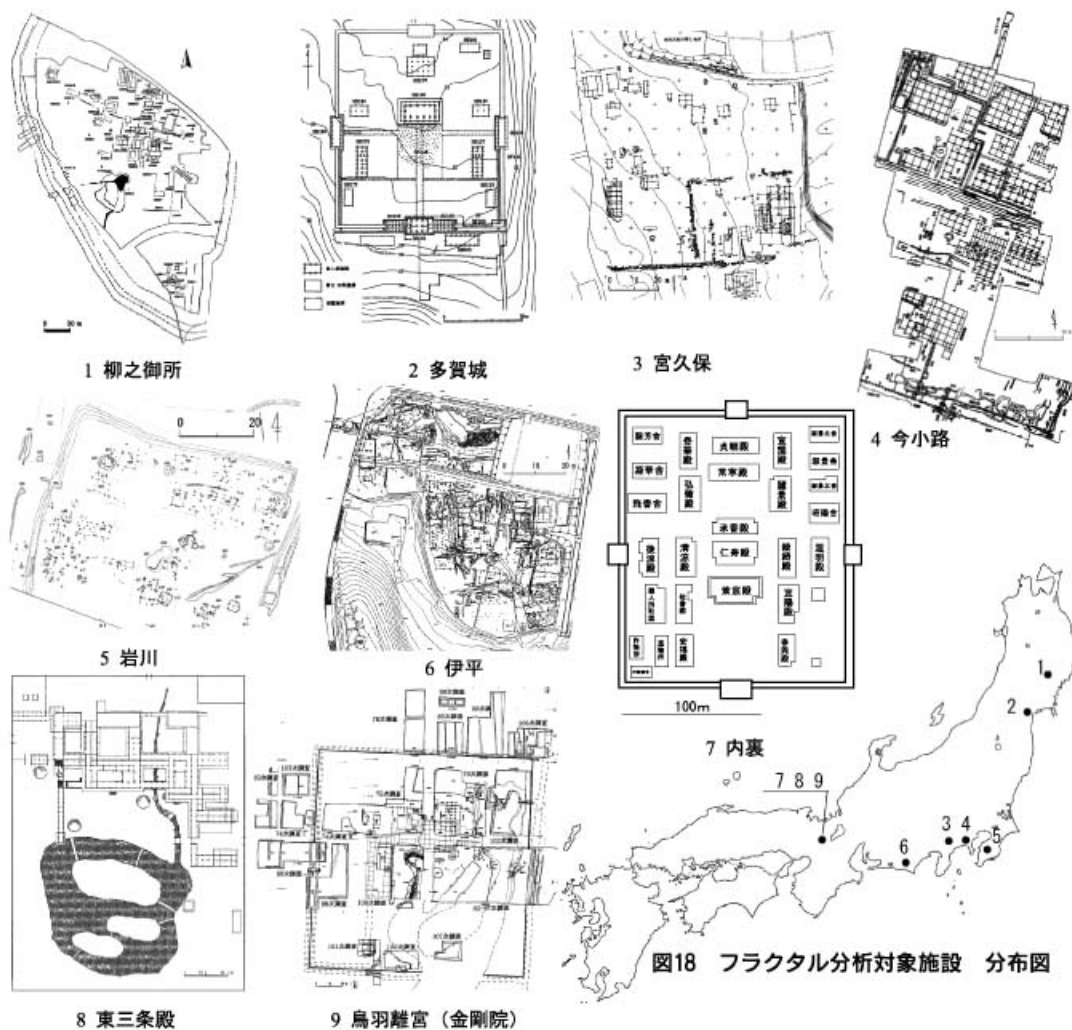


図18 フラクタル分析対象施設 分布図

表1 フラクタル分析対象施設

		分析対象年代 × 廃絶								
世紀	時代	柳之御所	多賀城	今小路遺跡	岩川	伊平	宮久保	内裏	東三条殿	鳥羽離宮
9	平安		×							
10										
11										
12	奥州藤原氏					初期				
13	鎌倉	×				↓ 活動的	I期		×	
14	室町					↓ 大規模な整地	II期			×
15							×			
所在都道府県		岩手	宮城	神奈川	千葉	静岡	神奈川			
施設用途		政庁	鎮守府	武家邸宅	中世城館	中世城館	在地領主の	天皇の私的空間	藤原氏の邸宅 里内裏	院御所

表2 メッシュの数と該当するマス目の個数集計表 (建物のみ対象)

分割の段階 r	該当するマス目の数 n	log(r)	log(n)
1	41	0.000	1.613
2	36	0.301	1.556
3	31	0.477	1.491
4	30	0.602	1.477
5	26	0.699	1.415
6	22	0.778	1.342
7	20	0.845	1.301
8	21	0.903	1.322
9	16	0.954	1.204
10	14	1.000	1.146
11	11	1.041	1.041
12	11	1.079	1.041
13	8	1.114	0.903
14	5	1.146	0.699
15	3	1.176	0.477
16	1	1.204	0.000

フラクタル次元 0.989

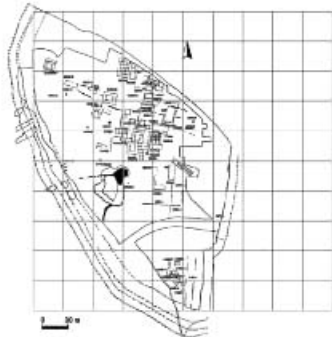


図19 柳之御所での例 (1辺10等分、r=7のとき)

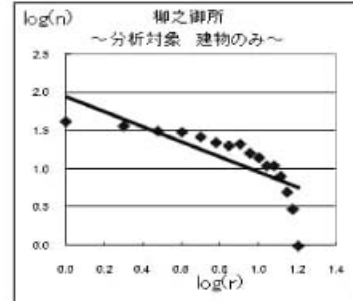


図20 log(r)とlog(n)の相関 (柳之御所)

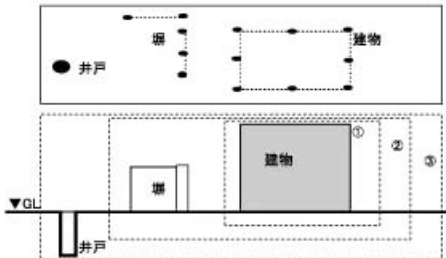


図21 フラクタル分析段階 概念図

- ①建物のみを対象とした分析 : 柱筋をつなげると、四角形の平面となる遺構。発掘調査 遺構分類記号 建物 SB
- ②工作物含んだ分析 : 建物・塀・橋などのように土地に接着して設置されたもので、且つ高さがあるもの。発掘調査 遺構分類記号 建物 SB、塀 SA、SX 堅穴遺構
- ③地表面の構造物を含んだ分析 : ②の分析項目に道路、溝、井戸など地表面及び地表面下にある構造物含んだ分析 発掘調査 遺構分類記号 道路 SC、溝 SE、井戸 SE、池 SG

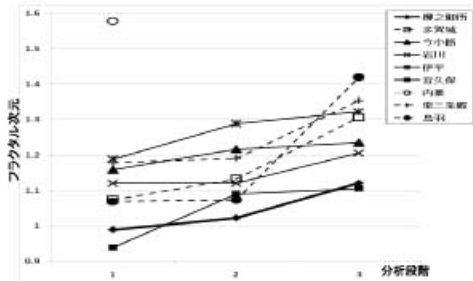


図22 フラクタル分析結果

表3 フラクタル分析結果

対象施設名	分析段階 1. 分析対象 建物のみ	2. 工作物含んだ分析	3. 地表面の構造物を含んだ分析
柳之御所	0.989	1.022	1.121
多賀城	1.073	1.132	1.306
今小路	1.158	1.216	1.235
岩川	1.121	1.121	1.206
伊平	1.188	1.288	1.323
宮久保	0.938	1.09	1.105
内裏	1.578		
東三条殿	1.179	1.19	1.353
鳥羽	1.069	1.073	1.419

築に関する他地域との関連性を示唆する研究は多くある^{1) 2) 34)}。

以上より、寺院の建物配置については、平安京ー平泉間、平泉ー鎌倉間といった他地域との繋がりがああるものの、住居系の施設内の建物配置については必ずしも他地域との繋がりがああったとは言えない。

なお、これらの結果は施設内の空間構成を論じた場合に限るもので、建築様式の観点からは別の指摘がありえる。ただし建物様式に京都性の継承がああったとしても、それは柳之御所の中心となる建物数棟に限ると思われる。

柳之御所堀内の建物には規則性がなく、第2節v項より中央性の強い場所と弱い場所に別れる建物配置でああったことから、柳之御所は条坊制の都市形態ではなかつたと考えられる。

4. まとめ

本稿では中世平泉諸施設の発掘調査結果に基づき、建物立地と建物軸の特徴、および奥州の一政庁としての柳之御所の空間構成の地方性および中央性について以下の知見が得られた。

1) 中世平泉の市街地内の建物軸方向は画一的なものではない。

中世平泉の建物軸の方向は道路及び地形に沿って建設され、特に道路と建物軸との平行性が最も大きい。但し、検出場所や検出状況(建物遺構の重複)などによって差異があり、条坊制都市のように必ずしも全ての建物が道路に沿って配置されているのではなく、画一的な平行性ではない。

2) 周辺山頂が建物軸線上にあるものは無量光院と高館山麓の一部の建物に留まることから、山頂が建物軸方向の要因であった可能性は低い。但し例外的に無量光院の軸線が一致することの理由として、浄土思想に基づく建物であったことが考えられる。

3) 中世平泉の市街地が正方位軸と真北から約11~15° 振れている2種類の道路軸方向で形成される中で、毛越寺周辺では平安京に類似する正方位の道路区画および建物配置が検出されている一方で、毛越寺付近で約30mあった東西路の幅員は一定でなく、道路配置及び建物配置では無量光院、花立廃寺、志羅山・泉屋・柳之御所の一部は属地性が強い。つまり市街地の大半で中央性を認めることが出来ない中で、毛越寺周辺での中央性傾向の都市基盤整備が想定できる。

4) 柳之御所は堀内道路南部に中央性の強い地域が認められたものの、御所周辺を含めて堀内全体の建物軸や空間構成の観点からみると、条坊制のような都市構造は認められない。

5) 建物が水域に近接する場合や建替えが反復する場合には、等高線の方角、山頂の位置、道路軸方向および真北方向と建物軸方位に関連性が認められないケースがある。

以上の諸事実に基づけば、奥州藤原氏が中世都市平泉を形成する際に手を加えたのは、区画割といった土木工事に關するものに留まり、建物配置については建主の自由度が高かったことが想定できる。その背景として奥州藤原氏入府以前からある程度の建築物が存在した建物先行型の都市であった可能性が考えられる。これは当時の日本の三大勢力(朝廷、鎌倉、平泉)の一つであった平泉といえども、平安京における天皇家の公権力に基づく計画的な都市形成とは異なり、地方豪族(土着権力)による市街地形成における、地形・山稜及び仏教観などに基づく中世平泉独自の方位感と都市形成を求める上で権力の限界があったことを示唆するものである。但し奥州藤原氏入府以前の施設の実態についての検証や、水域の位置と建物軸方向との関連性は、文献および発掘資料の制約から必ずしも十分ではなく、今後の研究課題である。

謝 辞

本稿の執筆に際し、発掘調査報告ほか多くの資料のご協力および助言、ご指摘など、ご多忙の中多くの方々のご指導ご鞭撻を賜りました。山本明教授、千葉信胤主事をはじめ平泉郷土館の皆様、佐藤嘉広氏をはじめ岩手県教育委員会の皆様。記して謝意を表します。

注釈・参考文献

- 1) 富島義幸「平泉の都市空間と仏教建築」(日本考古学協会2001年盛岡大会研究発表資料集「都市・平泉—成立とその構成—」) p.40
110~20 日本考古学協会 2001.10.6
- 2) 藤島亥治郎編著「平泉建築文化研究」吉川弘文館 1995.10.20

- 3) 高橋康夫ら「図集日本都市史」東京大学出版会 1993. 9. 10
- 4) 山本 明「中世都市・鎌倉の都市構造に関する一考察」日本建築学会大会論文集 2001年
- 5) 使用したGPS機器はeTrex Vista (磁気コンパス機能 (進行方向機能) の許容誤差範囲・ $\pm 4 \sim \pm 6^\circ$)、撮影機器はCASIO QV-4000である。GPS測量に用いたGPS付属デジタルカメラの精度実験 (2005年6～8月) を目的に合わせ4度にわたり行った結果、撮影方位角の誤差として得られた $1 \sim 3^\circ$ は中世測量技術水準を考慮して、方位測定上の許容範囲内と見なした。
- 6) 羽柴直人「平泉の道路と都市構造の変遷」(入間田宣夫著 「平泉の世界」第Ⅲ部) 高志書院 2002. 6. 10
- 7) 岩手県平泉町文化財調査報告書 第40集, 平泉町教育委員会, 1994. 3
- 8) 鳥山愛子「12世紀柳の御所遺跡における掘立柱建物の研究」(「平泉文化研究年報」第7号) p.48 16～14 岩手県教育委員会 2007. 3. 31
- 9) 藤島玄治郎編著「平泉建築文化研究」吉川弘文館p.284 11～9 1995.10.20
- 10) 川本重雄「梅之御所と寝殿造」(「平泉建築文化にみる中央性と地方性」日本建築学会大会パネルディスカッション資料) 社団法人日本建築学会 p.21～p.26 2006. 9. 9
- 11) 清水 謙「平泉の建築にみる中央性と地方性」(「平泉建築文化にみる中央性と地方性」日本建築学会大会パネルディスカッション資料) 社団法人 日本建築学会 p. 3～p.11 2006. 9. 9
- 12) カール・ボーヴィル「建築とデザインのフラクタル幾何学」鹿島出版社 1997. 12. 20
- 13) 小野正敏「発掘遺構に見る東国武士館の地方性」(「平泉建築文化にみる中央性と地方性」) 日本建築学会大会パネルディスカッション資料) 社団法人 日本建築学会 p.27 18～111 2006. 9. 9 2006. 9. 9
- 14) 入間田宣夫「都市平泉の遺産」山川出版 p.31 1～p.32 1.7, p.39 1.2～p.40 1.8 2003. 7. 25

平泉文化と北方交易2 - 擦文期の銅鏡をめぐって -

関根 達人

はじめに

平泉文化を東アジア世界の中に位置づける際、王朝国家との関係とともに、蝦夷や擦文集団・アイヌとの政治的・経済的関係を理解する必要がある。奥州藤原氏による北方交易や北方民族との交流関係については、実態が不明のままである。安倍氏、清原氏についても北方交易を基盤として台頭したとの指摘（箕島2001、工藤2005）があるが、具体的な内容が判明しているわけではない。

これまで奥州藤原氏による交易で北からもたらされた産物としては、史料上確認できる「羽毛菌革」（中尊寺供養願文）、「水豹皮」・「鷲羽」（『台記』仁平3年9月14日条、『吾妻鏡』文治5年9月17日条）といった、武器・武具の原材料となる動物性資源や、後の蝦夷地交易で大きな比重を占めることになる昆布等の海産物（食料）が想定されてきた。それらはことごとく有機質であり、出土品はもちろん伝世品ですら確認することが限りなく不可能に近い。また、それらは江戸時代の記録をみれば津軽・下北や蝦夷地の産品であり、それらをもって奥州藤原氏による北方交易の相手先を一挙に大陸系北方民族にまで拡大することなどできない。奥州藤原氏による北方交易に関しては、交易品・交易相手ともに極めて不明確であり、大陸との関係に到っては、中尊寺供養願文にある「肅慎挹婁之海蠻類向陽葵」との記述だけで、関係性を示す物的証拠は従来全く示されてこなかった。

上記のような視点に立ち、昨年度は、北奥出土のガラス玉に関して、考古学的手法による資料化を進めるとともに、自然科学的手法により材質分析を行ない、それらが蝦夷・アイヌによる交易で沿海地方南部から北海道島を経由して本州北部にもたらされたと指摘した（関根2007）。今年度は反対に、北海道の擦文文化後期・アイヌ文化成立期の遺跡から出土する本州産の製品を取り上げ、津軽海峡を缺んだ交易について考察することとした。

擦文文化期に本州から北海道島へもたらされた品物としては、文献史料や出土遺物から、麻布・絹布、米穀、須恵器、鉄製品・鉄素材などが挙げられているが、生業活動との関係で、とりわけ鉄製品や鉄素材が重要視されている。（瀬川1997、鈴木信2003・2004、鈴木琢也2004・2005・2006 a・2006 b）。本州から供給される鉄製品・鉄素材が擦文社会の下部構造に関わる重要産品という点に異論はないが、一方で擦文文化とアイヌ文化との連続性を重視するなら、威信財は上部構造を解明する重要な手がかりと考える。擦文文化期の威力財としては、本州産の刀剣類や漆器、貨幣、サハリン経由で大陸からもたらされたと考えられるガラス玉、そして今回とりあげる銅鏡などが考えられる。

本論では、北日本から出土した擦文・平安時代の銅鏡を手がかりとして、10世紀から12世紀の北方交易の具体像を推察したい。

1. 北日本から出土した銅鏡の概要

これまで北海道・東北北部で出土を確認した擦文・平安時代の銅鏡は、北海道5遺跡12点、青森県3遺跡



- 1 高屋敷館遺跡
- 2 野木遺跡
- 3 林ノ前遺跡
- 4 上幌内モイ遺跡
- 5 カリンバ2遺跡
- 6 亜別遺跡
- 7 カンカン2遺跡
- 8 材木町5遺跡
- 9 横枕Ⅱ遺跡

図1 北日本における摂文・平安期の銅鏡出土遺跡

表1 北日本から出土した摂文・平安期の銅鏡一覧

図2 番号	遺跡名	区・遺構・層位	種別	年代	主要金属比率(%)			材質分析法・分析者	文献
					Cu	Pb	Sn		
1	高屋敷館遺跡	第82号住居跡覆土	不明	10C末~11C	78.1	2.4	11.1	ICP-AES法・赤沼英男	青森県教育委員会1998
2	野木遺跡	第335号堅穴住居跡カマド煙道部掘方埋土	A	10C前半	58	1.2	24.4	ICP-AES法・赤沼英男	青森県教育委員会1999-2000
3	林ノ前遺跡	SI07堆積土	不明	10C末~11C前半	77	-	21.1	EDS半定量分析・村上隆	青森県教育委員会2005-2006
4	林ノ前遺跡	SK359堆積土	不明	10C末~11C中葉	76.5	-	21.2		
5	林ノ前遺跡	SK543埋1層	B	10C中葉~11C	73.1	22.8	-		
-	林ノ前遺跡	SI127堆積土	不明	10C中葉~11C	77.2	-	21.5		
6	上幌内モイ遺跡	遺物集中区1	B	10C後葉~11C前葉	78.2	4.6	10.1		
7	上幌内モイ遺跡	遺物集中区2	A		67.9	0.2	26.3		
8	上幌内モイ遺跡	遺物集中区2	A		80.8	1.4	14.3		
9	上幌内モイ遺跡	遺物集中区2	B		78.7	1.1	14.3		
10	上幌内モイ遺跡	遺物集中区18	B	10C中~後葉	76.7	2.9	9.2	ICP-AES法・赤沼英男	厚真町教育委員会2007
11	カリンバ2遺跡	SH-1住居跡炉北側	A	10C中葉~11C	銅に次いで錫を多く含む			蛍光X線・村上隆	恵庭市教育委員会1998
12	亜別遺跡	F-7区	A	10C中葉~11C	未分析				平取町教育委員会2000
13	カンカン2遺跡	X-1周溝盛土遺構	B	10C中葉~11C	81.9	6.5	1.8	ICP-AES法・赤沼英男	平取町教育委員会1996
14	カンカン2遺跡	X-1周溝盛土遺構	B		80.3	15.4	0.1		
15	カンカン2遺跡	X-1周溝盛土遺構	A		78.9	2.8	10.9		
-	カンカン2遺跡	X-1周溝盛土遺構	不明		未分析				
16	材木町5遺跡	第2号住居跡床面付近	B	11C~12C	未分析				釧路市埋蔵文化財調査センター1989
17	横枕Ⅱ遺跡		B	9C後半	未分析				水沢市教育委員会1982

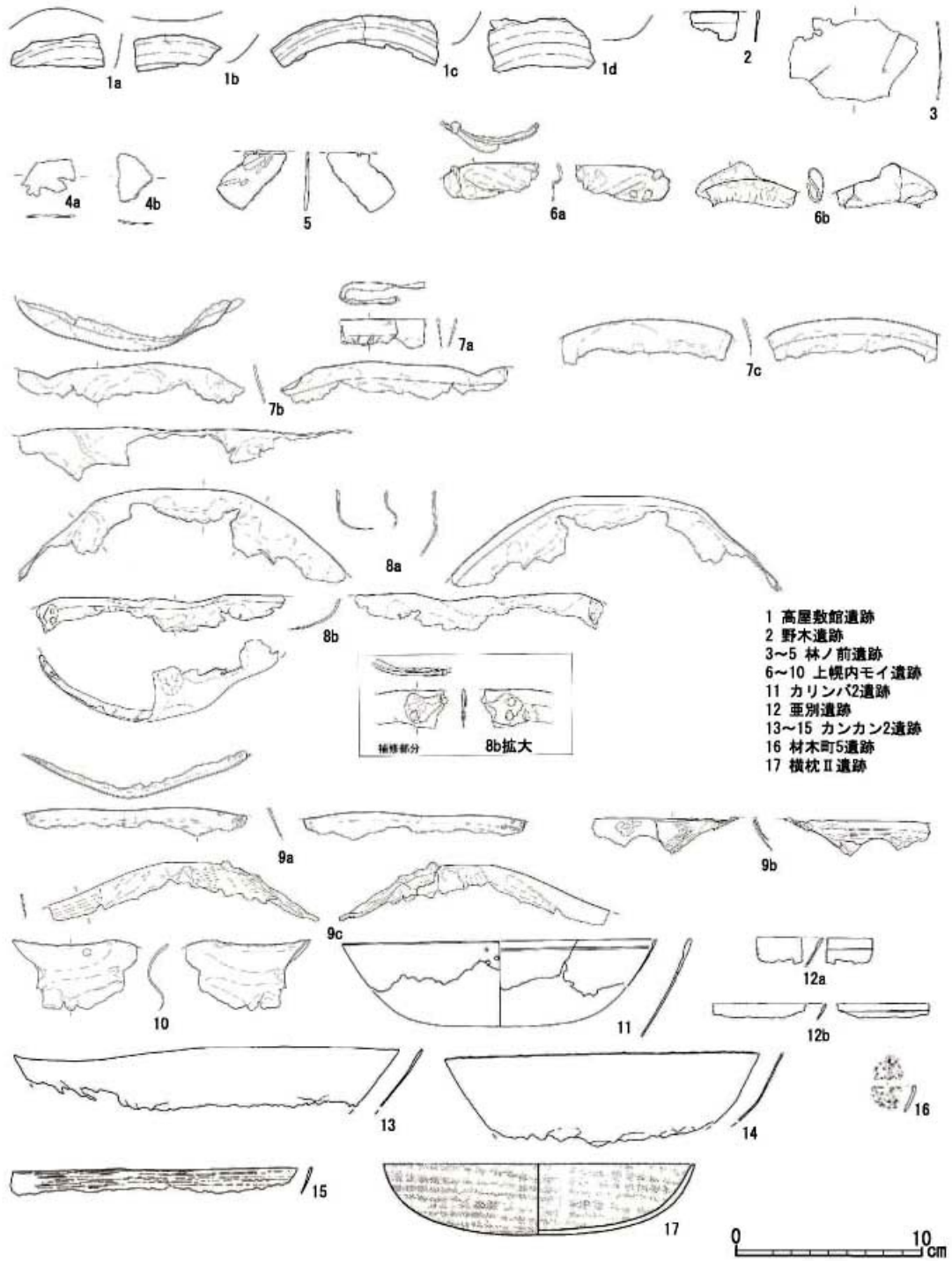


図2 北日本から出土した擦文・平安期の銅鏡

図中の番号は表1に対応する



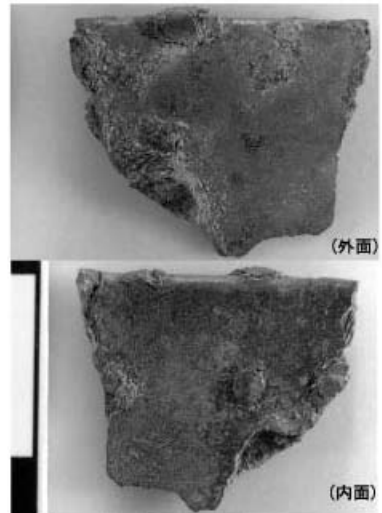
1a 高屋敷遺跡第82号住居跡出土銅鏡



1b 高屋敷遺跡第82号住居跡出土銅鏡外面に見られる轆轤挽き痕 2 林ノ前遺跡出土銅鏡 (1:S107 2:SK543 3・4:SK359 5・6:S1127)



3 カリンバ遺跡SH-1住居跡出土銅鏡 (内面)



4 材木町5遺跡第2号住居跡出土銅鏡

図3 主な銅鏡の写真

6点、岩手県1遺跡1点の合計19点である(表1、図1～3)。北海道七飯町で第6回東日本埋蔵文化財研究会が行われた1997年の段階では、北日本では北海道の2遺跡から出土した5個体が知られていたに過ぎず、ここ10年間でその数は飛躍的に増加している。以下では、遺跡毎にそれらの概要を述べる。

【高屋敷館遺跡】 青森県青森市高屋敷字野尻(図2-1、図3-1、図4)

国史跡高屋敷館遺跡は、堀の内側に土塁をもつ平安時代の環壕集落としてつとに有名である。集落は9世紀後半に始まり、10世紀後半には堀が築かれ、12世紀前半まで存続したと考えられている。銅鏡は壁建ち構造の第82号住居跡南西隅付近の覆土から出土している。第82号住居跡の年代は、重複関係や出土した土師器から10世紀末から11世紀と考えられる。

出土した銅鏡の破片5点のうち1点は接合し、外見上も材質分析結果からも全て同一個体と考えられる。口縁部は失われており底部から体部下半部のみ遺存する。器胎は極めて薄く、内外面には轆轤挽きにより生じたと考えられる横方向の微細な線状痕が看取される。材質分析の結果、銅に次いで錫を多く含む「佐波理」であることが判明している。

【野木遺跡】 青森県青森市合子沢字松森(図2-2、図5)

野木遺跡は、500棟近い竪穴住居跡・鉄生産関連遺構・土器焼成遺構・畑跡などが検出された9・10世紀の大規模集落跡である。10世紀前半と考えられる第335号竪穴住居跡のカマドの煙道部掘り方から銅鏡の口縁部破片が出土している。銅鏡は口縁部が折り返されており、器胎は約0.1mmと極めて薄い。今回集成した銅器のうち、材質分析が行われているもののなかでは上幌内モイ遺物集中区2出土の銅鏡に次いで錫の含有率が高い。

【林ノ前遺跡】 青森県八戸市尻内町字熊ノ沢(図2-3～5、図3-2、図5)

林ノ前遺跡は、10世紀後半から11世紀代に営まれた大規模な環壕集落である。遺跡内では鍛冶炉などの鉄生産関連遺構・遺物とともに銅の地金や銅が付着した埴場が出土しており、銅製品も生産されていたと考えられている。林ノ前遺跡では銅鏡の破片と考えられる遺物が4個体分出土している。このうちのSI07、SK359、SI127出土の3個体は、銅に次いで錫を21%程度含む「佐波理」である。それらは金属板を薄く叩いて伸ばしながら成形しており、なかでも器胎が約0.2mmと薄いSI07出土のものは仕上げに轆轤挽きされている。残るSK543出土の銅鏡は、砒素を含む銅と鉛の合金を鋳型に流し込むことによって作られており、厚みがある。

【上幌内モイ遺跡】 北海道勇払郡厚真町幌内(図2-6～10、図7・8)

石狩低地帯南部の東縁、厚真川上流域に位置する上幌内モイ遺跡では、擦文文化期の円形周溝遺構、竪穴、土壙墓とともに焼土や遺物集中区が多数検出されている。銅鏡は遺物集中区1で1個体、同じく2から3個体、同じく18から1個体、合計5個体が発見されている。材質分析の結果、これらの銅鏡は個体により若干の差はあるものの、全て銅に次いで錫の含有率が高い「佐波理」であることが確認されている。

集中区1のものは口縁部破片で、被熱し大きく変形している。口縁を折り曲げた痕跡は見られない。集中区1から出土した遺物は銅鏡に限らず大半が被熱した上、土器は故意に細かく割られ、炭化したキビの塊など特殊な遺物も見られることから、報告書では儀礼的行為が行われた場所の可能性が高いと指摘されている。

集中区2からは3個体分の銅鏡が出土しているが、全て被熱しており変形が著しい。口縁部を内側に折り返すものは2個体あり、そのうち折り返し幅の狭いものは内外面に銅板をあてて鈺留した痕跡が見られる。また、縁を折り返さないものは、内外両面に轆轤挽きの痕跡が明瞭に残る。集中区2も基本的な在り方は1と似ており、儀礼的行為が行われた場所であろうか。

集中区18から出土した銅鏡は口縁部資料だが、被熱による変形が著しく保存状態も良くない。口唇部は幾

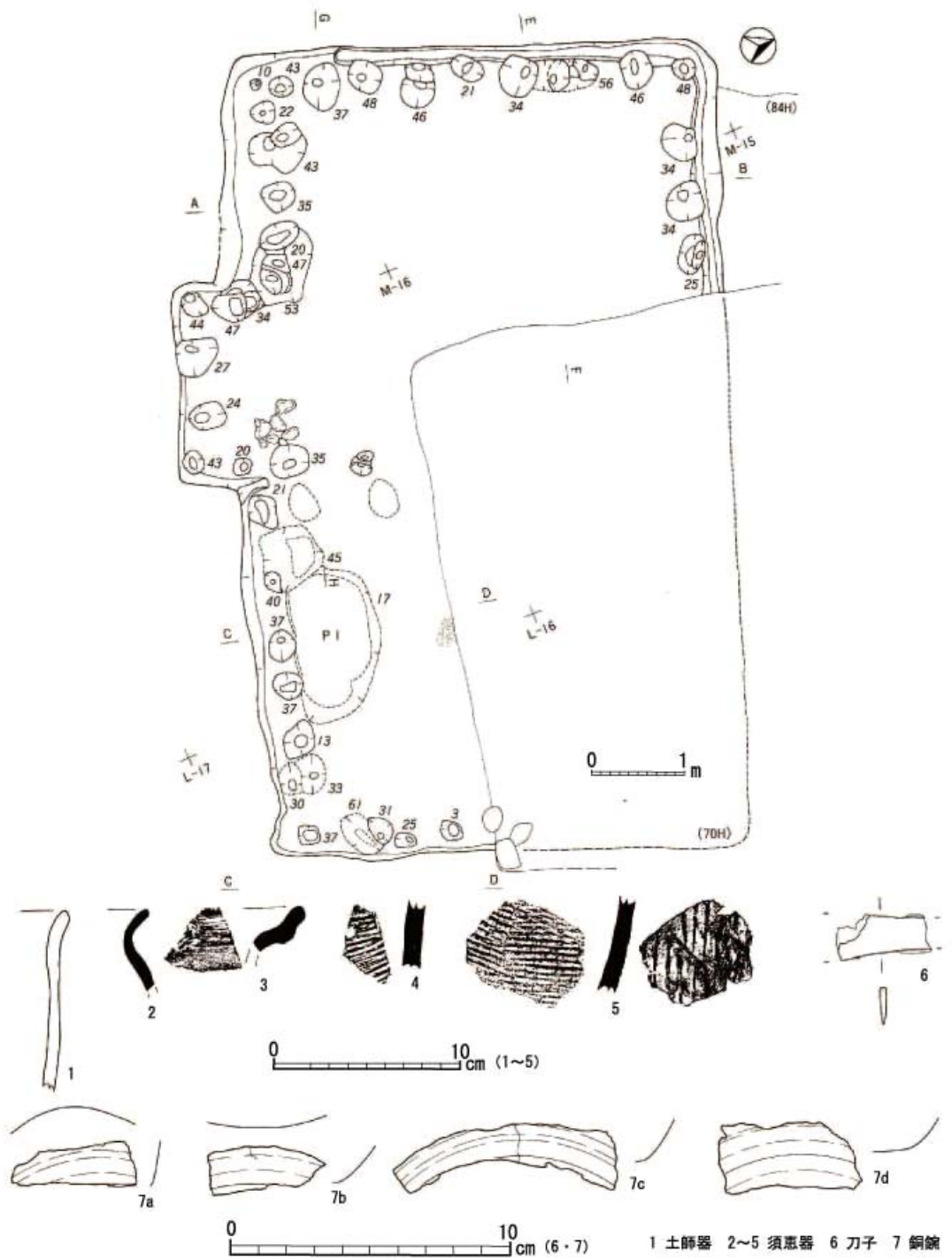


図4 青森市高屋敷館遺跡第82号住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

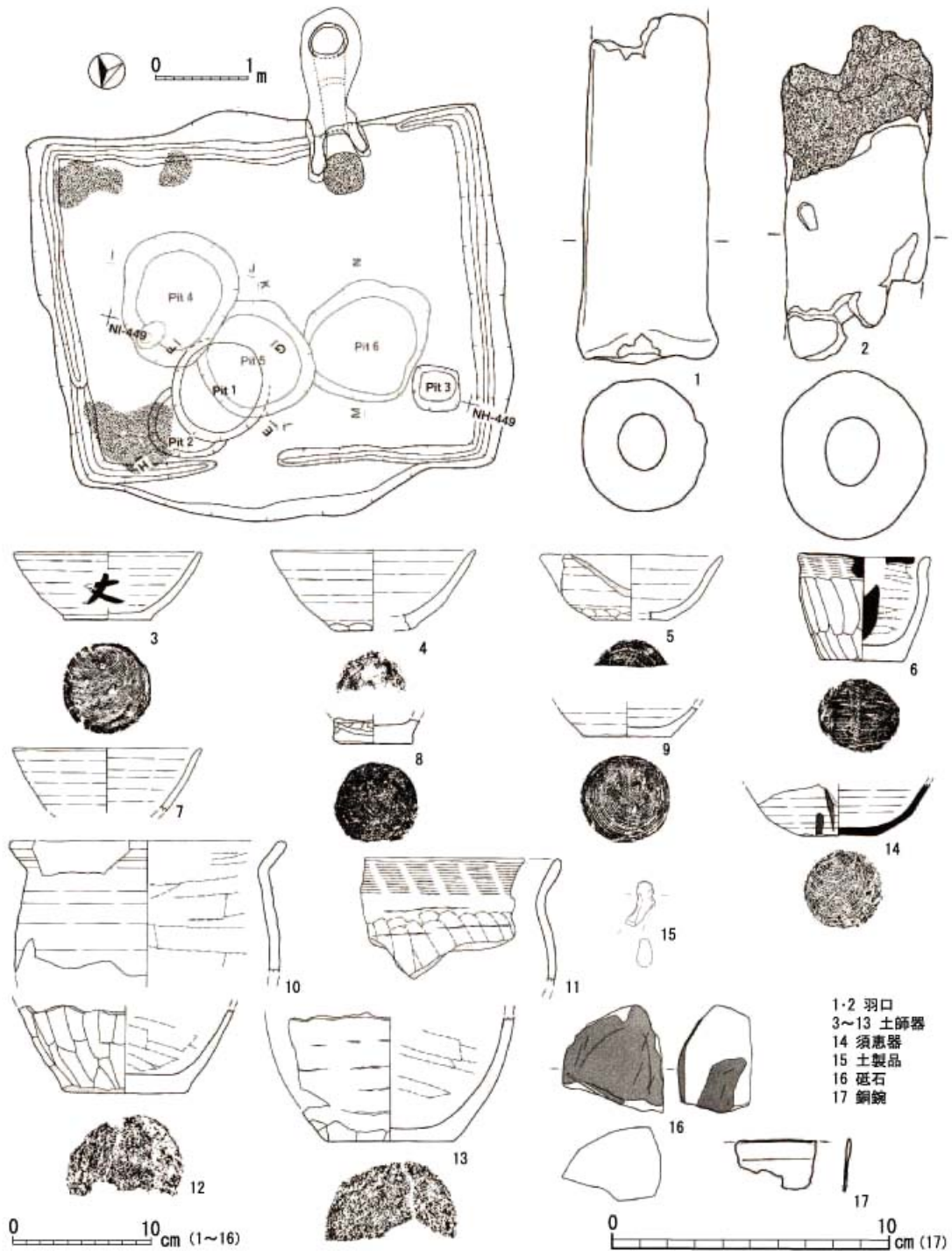


図5 青森市野木遺跡第335号竪穴住居跡と出土遺物

(報告書より転載)



図6 八戸市林ノ前遺跡SI07住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

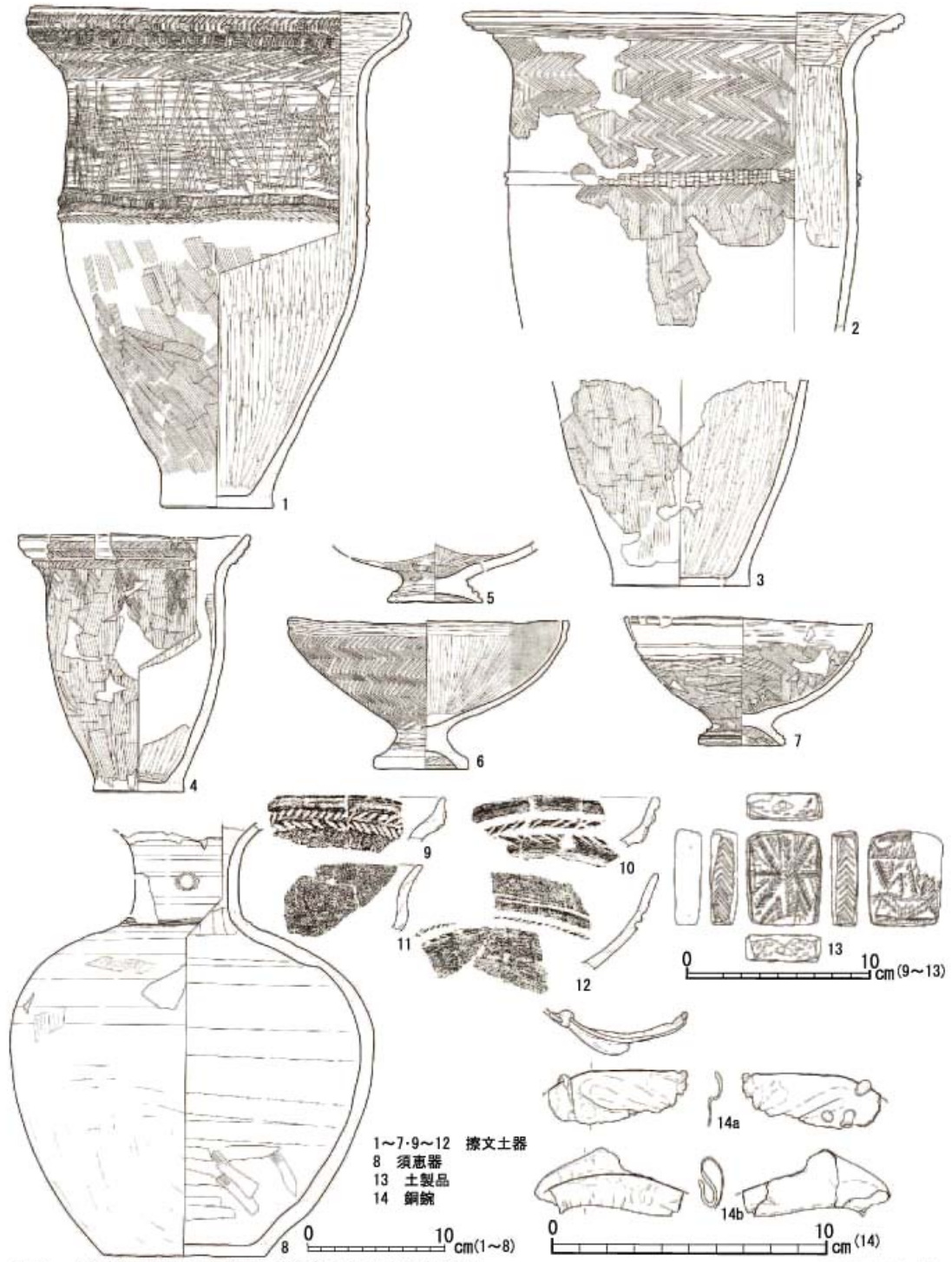


図7 北海道厚真町上幌内モイ遺跡集中区1出土遺物

(報告書より転載)

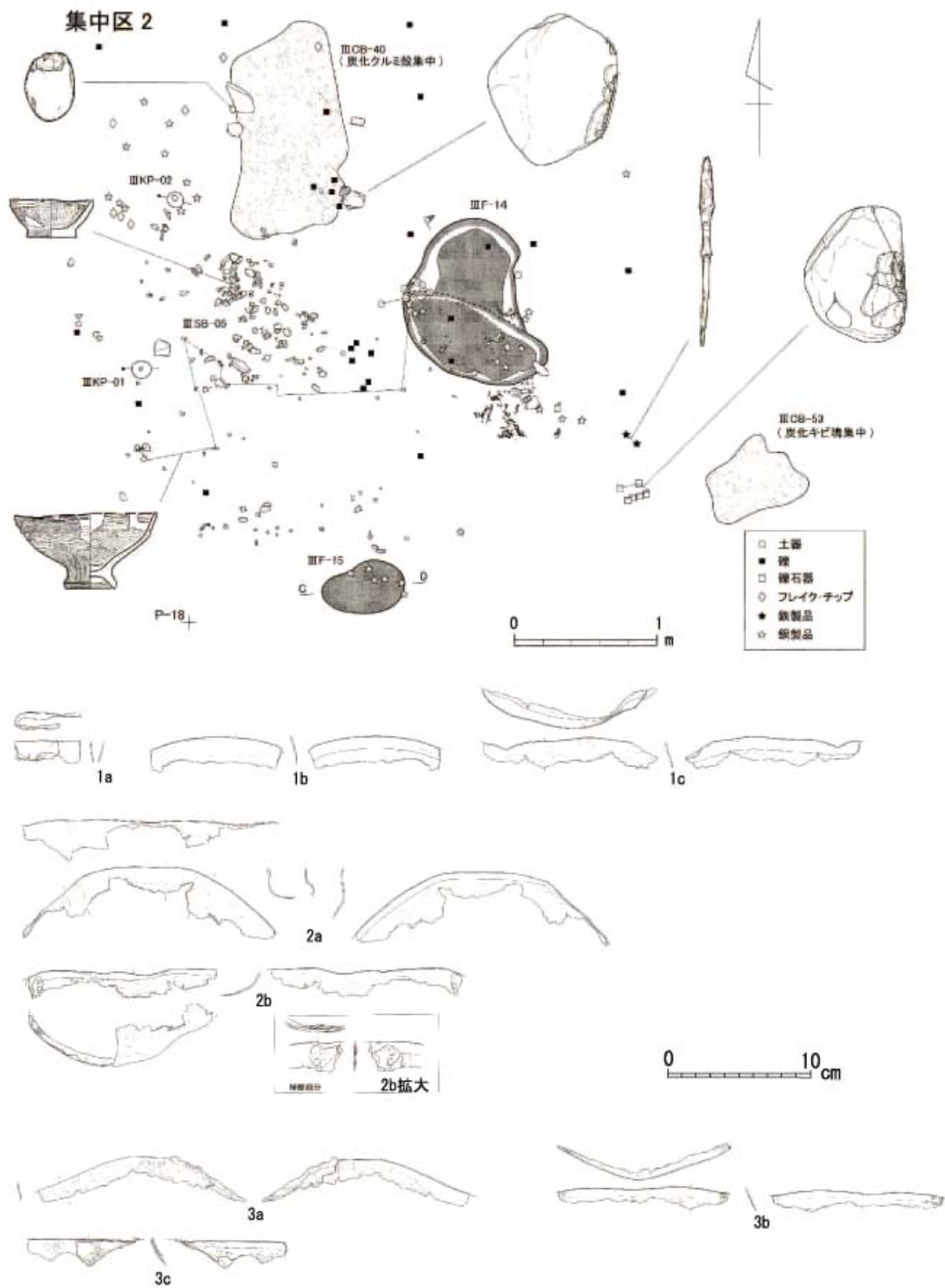


図8 北海道厚真町上幌内モイ遺跡集中区2 遺物出土状況と出土銅鏡

(報告書より転載)

分肥厚し尖る。同一個体と思われる破片が集中区1からも出土している。

銅鏡が出土した遺構の年代は、共伴した土器や焼土中の炭化種子を試料としたAMS法年代測定結果から、集中区1と2が10世紀後葉～11世紀前葉、集中区18は10世紀中葉～後葉と考えられる。

【カリンバ2遺跡】 北海道恵庭市黄金（図2-11、図3-3、図9）

石狩低地帯の南西部、旧カリンバ川右岸に位置するカリンバ2遺跡では、擦文文化期の竪穴住居跡SH-1で炉の北側から銅鏡が1点出土している。銅鏡は口縁部を伏せた状態で発見され、破片の一部は覆土の下層からも発見されている。口径約17cmに対して高さは約4.6cmと浅く、底は平らで大きい。口縁部は約1cm幅で内側に折り曲げられており、その縁には細い沈線が1条巡っている。口唇部は丸みを帯びており、厚さ約1.5mm、胴部から底部は厚さ0.3mmしかない。内外面には轆轤挽きの痕跡が横方向に、底部には同心円状に残る。口縁部直下、沈線部には後から補修孔と思われる小孔が穿けられている。現状では漆黒色を呈するが、蛍光X分析の結果、銅にかなりの割合で錫を加えた「佐波理」であることが判明している。10世紀中葉から11世紀代の年代が与えられる。

【亜別遺跡】 北海道沙流郡平取町川向（図2-12、図10）

亜別遺跡は、日高支庁管内西部のやや内陸寄り、日高山脈を源とする沙流川の左岸、河口からは約16km遡った場所に位置する。銅鏡は、F-7区から破片数にして118点、総重量10.8gが出土したが、全て同一個体である。口縁部は5～6mm幅で内側に折り曲げられており、その部分は1～0.8mmほどの厚みを有する。体部から底部は轆轤挽きにより薄く仕上げられている。銅鏡に共伴した擦文土器は、10世紀後半から11世紀頃の所産と考えられる。

【カンカン2遺跡】 北海道沙流郡平取町二風谷（図2-13～15、図11）

カンカン2遺跡は、日高山脈を源とする沙流川と看看川が合流する左岸段丘上、河口からは約19km遡った場所に位置する。銅鏡は白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm）降下後まもなく営まれたと考えられるX-1周溝盛土遺構の最上層から出土した。銅鏡の破片502点は4個体に判別されている。

13は口縁部に錐状の工具による穿孔が認められる。口縁部の厚みは約1.6mm。材質は銅と鉛の合金で、砒素も含まれる。伏せられた状態で出土した14は、口縁部が鑿状の工具で水平に裁断されている。縁の厚みは約1.1mm。材質は13に近く、錫をほとんど含んでいない。15は口縁部を幅6mmほど内側に折り曲げている。内外面には横方向に轆轤挽きの痕跡が認められる。材質は銅と錫の合金、いわゆる「佐波理」である。図示していないもう一つの個体は、材質的には13・14に近く、砒素を含む銅と鉛の合金で作られている。銅鏡が出土した周溝盛土遺構は、長軸約8m、短軸約5.7mで、溝が方形に巡る。盛土の高さはおよそ25cm、内部に土壙などの掘り込みは一切検出されていない。銅鏡等の遺物は、盛土の最上層からほぼ原位置を保った状態でまとまって出土している。共伴資料の中でとりわけ注目されるものに丸棟平造りで切先が両刃になる直刀がある（図11-15）。この太刀は、京都の鞍馬寺に伝わる伝坂上田村麻呂佩刀の葵鏢に類似する透かしを有する鏢と鉄製の綱が直接茎に摺り合う形で装着されていることから、東北地方の末期古墳から出土する刀剣類に比べより日本刀に近く、中央政府またはその影響下にある地域から運び込まれたと指摘されている（佐藤ほか2003）。遺構の年代は火山灰や土器をはじめとする出土遺物から、10世紀中葉から11世紀とみられる。報告書では、周溝盛土遺構は祭祀遺構であり、銅鏡や太刀・鉾をはじめとする宝物は、供献品と推測している。

【材木町5遺跡】 北海道釧路市材木町7・8番地（図2-16、図3-4、図12）

材木町5遺跡は、釧路川の河口から約2km遡った左岸の海岸段丘上に位置する。銅鏡は第2号住居跡の西側、カマドとは反対側の床面付近からおびただしい数の黒曜石の剥片とともに出土した。銅鏡は口縁部の小

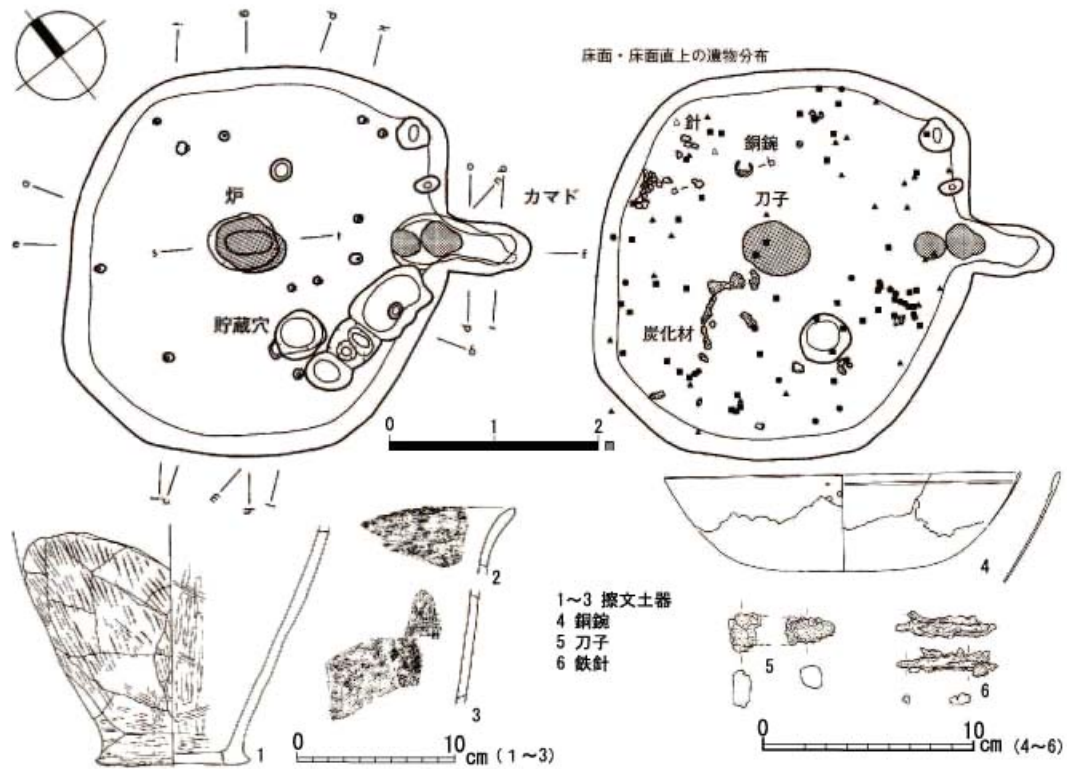


図9 北海道恵庭市カリンバ2遺跡SH-1住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

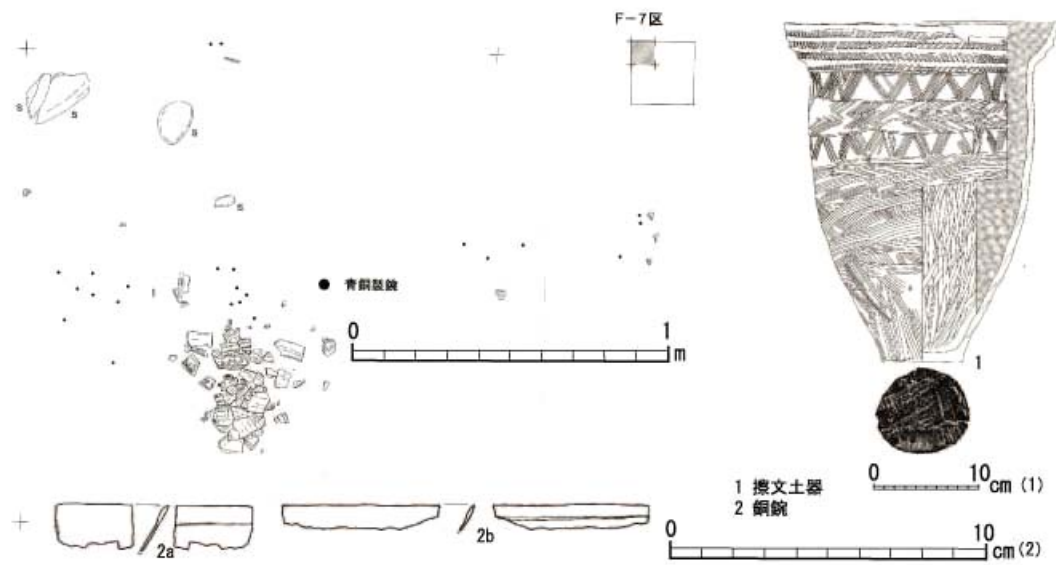


図10 北海道平取町亜別遺跡F-7区出土遺物と遺物出土状況

(報告書より転載)

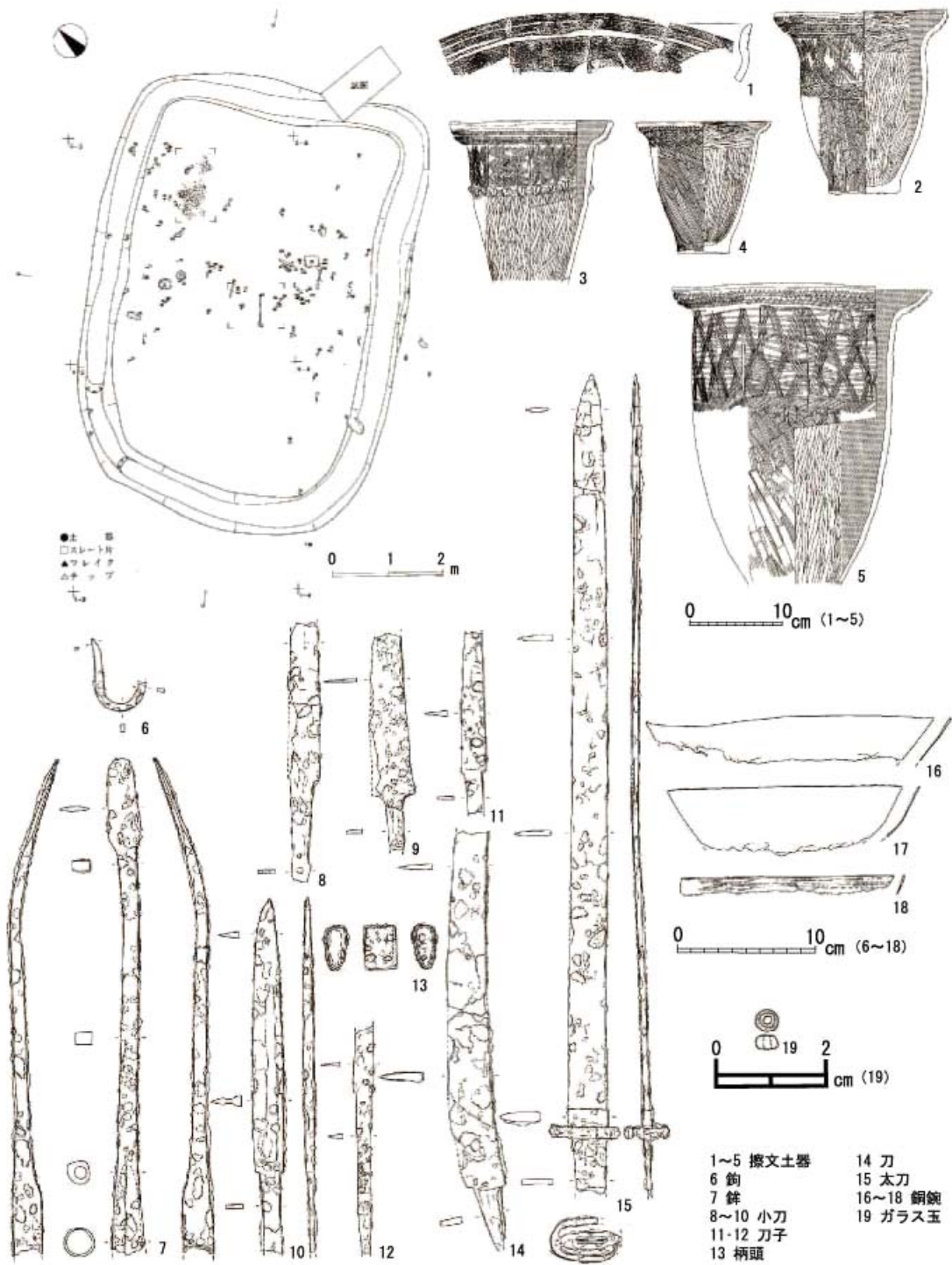


図11 北海道平取町カンカン2遺跡X-1周溝盛土遺構と出土遺物

(報告書より転載)

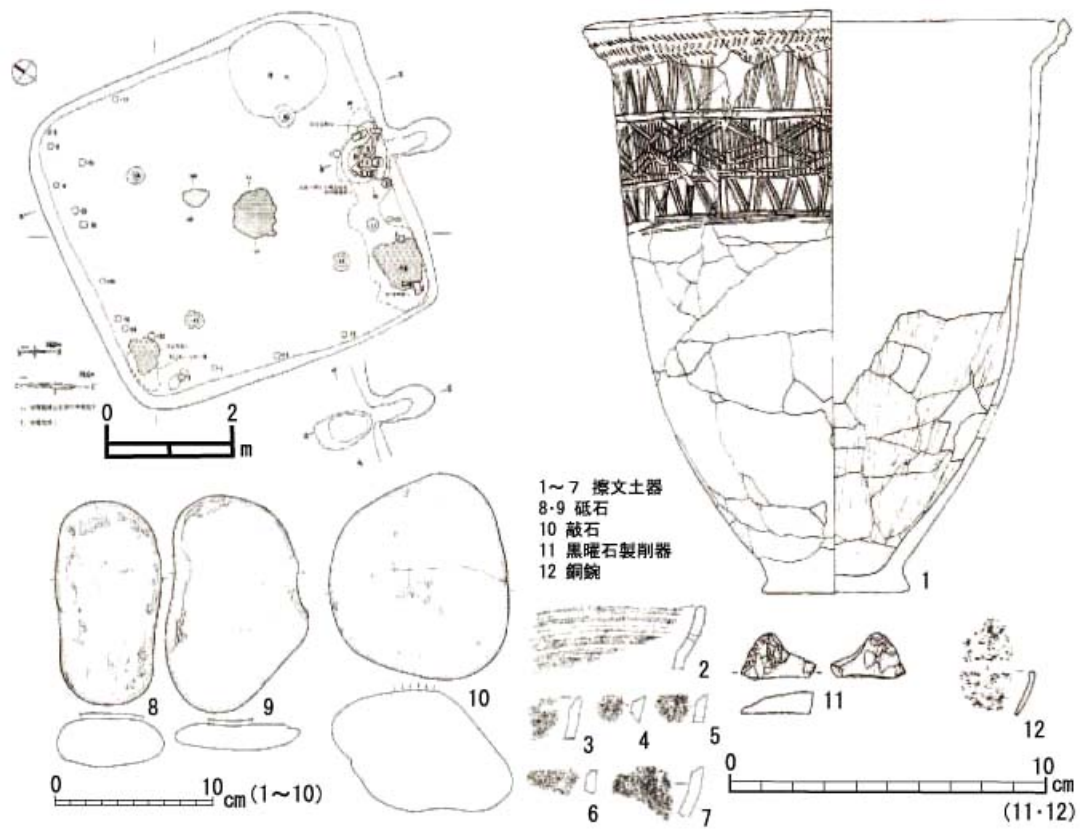


図12 北海道釧路市材木町5遺跡第2号住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

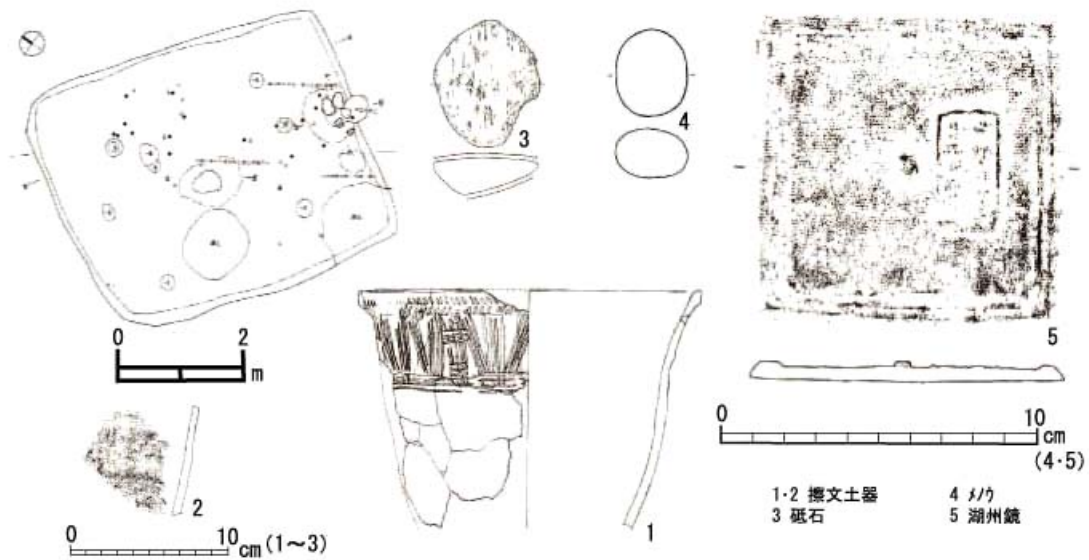


図13 北海道釧路市材木町5遺跡第15号住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

破片で、口縁部は丸みを帯びて肥厚する。器厚は口縁部で2.1mm、体部では0.5mm前後である。二次的に熱を受けており、器胎の一部に空洞が生じているほか、内外面には熔けた金属の小塊が付着している。第2号住居跡の年代は、出土した擦文土器から11世紀後半から12世紀頃と見られる。なお、材木町5遺跡では、第15号住居跡の床面から中国宋代の「湖州真石家念二叔照子」銘をもつ方鏡が1点出土している（図13）。

【横枕Ⅱ遺跡】 岩手県奥州市水沢区佐倉河字横枕（図2-17、図14）

横枕Ⅱ遺跡は、胆沢城跡から北上川を挟んで南へ約2km、水沢段丘上の沖積面に立地する慶徳遺跡群のひとつである。銅鏡は昭和30年代に土師器とともに出土した。銅鏡は口径約16.8cm、器高約3.9cmである。銅鏡には側面に「寺」の墨書のある土師器坏や灰釉陶器を模倣した内黒高台坏が共伴している。これら共伴した土器から、銅鏡の年代は9世紀後半と考えられる。須恵器甕の破片を転用した硯や「寺」の墨書土器からみて、本遺跡は単なる一般集落ではないだろう。銅鏡も仏具として使われた可能性が高い。

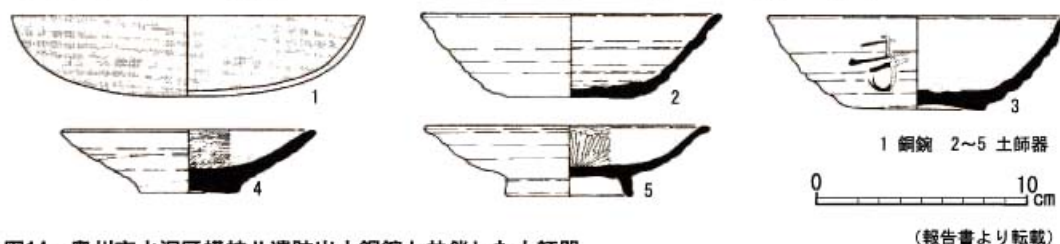


図14 奥州市水沢区横枕Ⅱ遺跡出土銅鏡と共伴した土師器

2. 銅鏡の種類と材質

出土した銅鏡のなかで全体のプロポーションが判る資料は限られているが、そのなかでは最も古い奥州市横枕Ⅱ遺跡例だけが形態が異なる。横枕Ⅱ遺跡の銅鏡は、他のものに比べ、①器胎が厚い、②体部の丸みが強い、③浅いなどの特徴がある。横枕Ⅱ遺跡を除く資料は、比較的残りがよいカリンバ2遺跡やカンカン2遺跡の事例から判断して、口径17cm前後、器高5cm前後の、安定した平底をもつ浅めの鏡と思われる。

口縁部の形状からは、口縁を内側に折り返すもの（A類）と、折り返しのないもの（B類）に分けられるが、両者は数的にはほぼ拮抗する。

19点中15点に関して材質分析が行われており、錫を多く含むものが12点と、鉛を多く含むもの3点を大きく上回っている。口縁部形状との関係では、A類は全て錫を多く含むグループに属する。錫を多く含むグループは、鑄造による成形後、鍛造で叩き締め、轆轤で薄く挽いて仕上げているため、体部の器胎は極めて薄く、内外面には横方向に、底面には同心円状に轆轤挽きの痕跡を残す。

ところで、銅と錫の合金、いわゆる「青銅」は、錫の含有量により多様な色調をみせるという。すなわち錫の古称「白銅」が示す通り、錫が3%以下なら銅赤色だが、錫の含有量が増えるにつれ次第に黄色味が強まり、27%以上になると銀白色を呈するようになる（村上2007）。錫を15~20%程度含む「佐波理」の場合、赤味を帯びた黄色で、色調的にはかなり金色に近い。北日本から出土した擦文・平安時代の銅鏡の大半は、本来、金色に輝いていたと思われる。

3. 銅鏡の年代

北日本では、盛岡市志波城跡の昭和59年度調査においてSI425竪穴住居跡から出土した銅製容器が、共伴

した土師器から8世紀後半の年代が与えられ、最も古い銅鏡になる可能性がある(盛岡市教育委員会1985)。これに次ぐのが胆沢城に近い奥州市横枕Ⅱ遺跡から出土した9世紀後半代の銅鏡である。どちらも律令政府による地域支配の拠点施設が置かれた場所であり、後者は共伴した「寺」墨書土器から、胆沢城に付随する宗教施設で使用された仏具であったと推察される。

内国化されていない北の地域で出土した銅鏡のなかで、唯一、青森市野木遺跡第335号住居跡出土例だけが白頭山-苦小牧火山灰降下以前の10世紀前半代に位置づけられ、残りは全て10世紀中葉以降の年代が与えられる。また、共伴する土師器や擦文土器から、釧路市材木町5遺跡の事例を除き、全て下限は11世紀代に収まる。

材木町5遺跡第2号住居跡出土の銅鏡については、共伴した擦文土器の年代が問題となる。道東の擦文土器の年代観については未だ意見の分かれるところであるが、湖州鏡が出土した第15号住居跡の土器に比較して、第2号住居の土器は型式学的には1段階古相を示めず。ところで宋代に浙江省湖州付近で大量生産されたとされる湖州鏡のうち、材木町5遺跡出土品と同じ方鏡は、国内では畿内以東に多いとの指摘がある(久保1987)。西幸隆の集成によれば、湖州方鏡は全国で10遺跡22例が知られており、東北地方では岩手県花巻市丹内山神社経塚(註1)、秋田県横手市八沢木新庄館、山形県羽黒町羽黒山頂御手洗池、福島県会津坂下町塔寺経塚から出土している(西1988)。新庄館出土例と羽黒鏡を除き、残りの8遺跡は全て経塚の埋納品であり、年代的には全て12世紀に属する。材木町5遺跡の事例だけ特段時代を引き下げて見なければならぬ理由はなく、第15号住居跡出土の擦文土器も12世紀の年代を与えてしかるべきである(註2)。故にそれよりやや古い様相の土器に共伴した第2号住居跡出土の銅鏡は11~12世紀の年代幅に収まるものと考えられる。

4. まとめ

平安時代の銅鏡で思い出されるものに、『枕草子』にあるかなまり(鏡)に関する記述がある。清少納言は、「あて(貴)なるもの」(42段)として「削り氷に甘藷入れて、あたらしきかなまりに入れたる」を挙げ、「清しと見ゆるもの」(148段)でも「あたらしきかなまり」を挙げた。『枕草子』が書かれた10世紀末・11世紀初頭、都の貴族達の間で、かなまりは清浄で涼やかな器として人気があったと思われる。銅鏡はこの時代、仏具であると同時に、高級食膳具でもあったことが確認される。

暑い夏の日、都の貴族や宮中の女房達がかなまりにいた氷菓子を愛でていた時代、未だ内国化されていない津軽海峡を挟んだ、本州北端・石狩低地帯周辺域でも、かなまりが受容されていた。

古墳時代後期、6世紀中頃に朝鮮半島からはじめてもたらされた銅鏡は、6世紀から8世紀代には東日本でも宮城県以南において、主として古墳や横穴から副葬品として出土するとともに、それを模した土師器や須恵器が作られている。しかし9世紀以後の王朝国家の時代に至ると、すくなくとも東日本から銅鏡は姿を消してしまう。その時代になって突如として北の世界に銅鏡が現れるのである。

石狩低地帯を中心に噴火湾沿岸や日高地方など襟裳岬以西の太平洋沿岸地域では、9世紀代に文様帯の下端に貼付円縁帯を巡らせる土器が分布するが、10世紀後葉には本州北端、岩木川水系中下流域・陸奥湾沿岸・下北半島にまで分布を拡大する(斉藤2002)。こうした考古学的事実から、「道央部を含む太平洋沿岸の集団は、日本海沿岸の交易ルートが日本海沿岸集団に管掌されるところとなった10世紀後葉、おそらくそれと競るように太平洋沿岸のルートに活路を求め、本州北端に積極的に進出」(瀬川1997)したとの説が提起されている。銅鏡はまさに道央部を含む太平洋沿岸に分布しており、時期的にも「太平洋沿岸交易集団」が活躍した時代にあたる。銅鏡を受容したのは、「太平洋沿岸交易集団」なのである。

北の世界から出土する銅鏡には「佐波理」と呼ばれる材質・加工技術ともに秀でた製品が含まれることから、その搬入ルートに関しては、本州経由ではなく朝鮮半島から北まわりでもたらされた可能性が指摘されている（村上2007）。その場合サハリンを経由したと考えられるが、これまでサハリンで確認されている擦文土器の多くは11世紀前半の北海道日本海北部域の土器である。もし北まわりのルートでもたらされたなら、銅鏡を入手できたのは「日本海交易集団」であってしかるべきである。銅鏡の分布状況はあきらかにそれらが本州経由でもたらされたことを示している。

ではどのような経緯で銅鏡は「太平洋沿岸交易集団」に渡ったのであろうか。

『類従三代格』（巻19・禁制事）所収の延暦21年6月24日太政官符では、王臣諸家が渡嶋狄と私的に毛皮を交易することが禁じられており、9世紀初頭には既に毛皮交易を媒介として、王臣家と擦文集団とが接点を有していたことが推察される。銅鏡は「太平洋沿岸交易集団」がもたらす北の産物に対する見返りとして、都の王臣家が用意した一品だったのではなかろうか。そうであるなら、既に内国化された北緯40度以南の東北中部・南部から銅鏡が出土しないことの説明もつく。

それでは何故、銅鏡は「日本海交易集団」には受容されなかったのであろうか。

瀬川拓郎は、10世紀以降、擦文社会に流通していた本州製品には須恵器など青森産のものが目立つことなどから、北方交易における本州側の窓口は青森にあり、擦文集団にわたる本州製品も、本州各地に運ばれるワシ羽や海獣類の皮といった北の世界の宝も、そこを介してやりとりされたと言及する（瀬川2007）。北海道南西部に分布する土師器と擦文土器との中間的様相を示す土器は、本州では津軽地方の岩木川水系の遺跡からのみ出土することから、瀬川によって「青苗文化」と命名された人々は、日本海沿岸の擦文集団と精神文化を共有する一方、婚入により岩木川水系の集団とも同族的な関係を維持していたとされる（瀬川2005）。「日本海交易集団」の本州側の窓口は岩木川水系であり、おそらくは岩木川の河口に広がる十三湖周辺に存在していたと推察できよう。一方、「太平洋沿岸交易集団」の本州側の窓口としては、陸奥湾に面する外が浜が有力視される。陸奥湾に注ぐ新田川の河口に近い青森市新田（1）遺跡は10世紀後半から11世紀代の土器とともに、齋串、馬形・刀形などの形代や付札木簡、絵扇など律令的遺物が出土したことで近年注目されている。外が浜には五所川原産の須恵器や岩木山麓で生産された鉄製品・鉄素材、陸奥湾沿岸で作られた塩など北奥の生産物に加え、内国域からも様々な品々が集められたであろう。遠路都から運ばれた銅鏡もそうした品の一つと考えられる。上幌内モイ遺跡やカリンバ2遺跡の銅鏡が補修されていることから判るように、金色に光り輝く銅鏡は、擦文人にとって威信財と呼ぶに相応しい貴重な宝物であったようだ。

12世紀、日本は中国を中心とする東アジアの巨大な物流機構に組み込まれ、中世世界に汎列島的な商品経済圏が形成されるなか、北方交易においては時代を経る毎に日本海交易の比重が高まっていく。釧路市材木町5遺跡から出土した銅鏡や湖州鏡は、12世紀代には、外が浜に到る奥大道の先に太平洋交易ルートが引き続き機能していたことを示しているのではなかろうか。

本稿をまとめるにあたり、資料調査や情報の提供などに関して、次の方々や機関からご協力いただいた。

石川 朗、乾 哲也、井上雅孝、上屋真一、小野哲也、小林 啓、佐藤 剛、佐藤嘉広、竹ヶ原亜希、
蔦川貴祥、松井敏也、三浦圭介（敬称略）

青森県埋蔵文化財調査センター、釧路市立博物館、釧路市埋蔵文化財調査センター、恵庭市郷土資料館、
厚真町教育委員会、平取町立沙流川歴史館

末筆ではありますが、感謝申し上げます。

【註】

- 1 丹内山神社の第2経塚（西経塚）では、方形の石室内に経筒として中国福建省産の白磁四耳壺が納められており、蓋には方形の湖州鏡が使われていた。岩手県内で白磁四耳壺を用いた経塚は他に花巻市高松山経塚と奥州市伝豊田館跡の事例のみで、いずれも平泉藤原氏の本領地にあたる奥六郡南部に位置する（山本1961、岩手県立博物館2000）。
- 2 第15号住居跡から出土した木炭については同一試料が学習院大学理学部と社団法人日本アイソトープ協会により14C年代測定が行われており、前者では850±90B.P. (Gak-13580)、後者では1050±80B.P. (N-5291)の年代が得られている。後者の年代は擦文土器のどの年代観とも全く整合しない。前者の数値に従えば、第15号住居跡は12世紀を中心とする年代となり、湖州鏡の年代観とも矛盾しない。

【引用・参考文献】

- 青森県 2005「青森県史」資料編 考古3（弥生～古代）
- 青森県教育委員会 1998「高屋敷館遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会 1999「野木遺跡Ⅱ」 青森県埋蔵文化財調査報告書第264集
- 青森県教育委員会 2000「野木遺跡Ⅲ」 青森県埋蔵文化財調査報告書第281集
- 青森県教育委員会 2005「林ノ前遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第396集
- 青森県教育委員会 2006「林ノ前遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
- 青森県教育委員会 2007「赤平(2)・赤平(3)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第438集
- 青森市 2006「青森市史」資料編1 考古
- 厚真町教育委員会 2007「上槻内モイ遺跡(2)」
- 天野哲也・小野裕子編 2007「古代蝦夷からアイヌへ」 吉川弘文館
- 岩手県立博物館 2000「岩手の経塚」 岩手県立博物館第50回企画展図録
- 恵庭市教育委員会 1998「カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡」
- 釧路市埋蔵文化財調査センター 1989「釧路市材木町5遺跡調査報告書」
- 工藤雅樹 2005「古代蝦夷の英雄時代」 平凡社
- 久保智康 1987「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史』下 489～511頁 同朋社
- 斎藤 淳 2002「本州における擦文土器の変遷と分布について」『海と考古学とロマン—市川金丸先生古稀記念献呈論文集』267～283頁
- 佐藤矩康・森岡健治・成田重信・山崎克彦・赤沼英男 2003「自然科学的調査からみたカンカン2遺跡出土直刀の刀剣史における位置」『北海道考古学』39 65～76頁
- 澤井 玄 2007「十一～十二世紀の擦文人は何をめざしたか」『アイヌ文化の成立と変容』241～269頁 法政大学国際日本学研究所
- 鈴木 信 2003「統縄文～擦文文化期の渡海交易の品目について」『北海道考古学』39 29～48頁
- 鈴木 信 2004「古代日本の交易システム—北海道系土器と製鉄遺跡の分布から—」『アイヌ文化の成立—宇田川洋先生華甲記念論文集』65～97頁 北海道出版企画センター
- 鈴木 琢也 2004「擦文文化期における須恵器の拡散」『北海道開拓記念館研究紀要』32 21～46頁
- 鈴木 琢也 2005「擦文文化における物流交易の展開とその特性」『北海道開拓記念館研究紀要』33 5～30頁
- 鈴木 琢也 2006 a 「擦文土器からみた北海道と東北部の文化交流」『北方島文化研究』4 19～41頁
- 鈴木 琢也 2006 b 「北日本における古代末期の北方交易」『歴史評論』678 60～69頁
- 瀬川拓郎 1997「擦文時代における交易体制の展開」『北海道考古学』33 19～26頁
- 瀬川拓郎 2005「アイヌ・エコシステムの考古学」 北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎 2007「アイヌの歴史 海と宝のノマド」 講談社選書メチエ401
- 関根達人 2007「平泉文化と北方交易(1)—北奥出土のガラス玉—」『平泉文化研究年報』7 1～13頁
- 中澤寛将 2005「古代津軽における須恵器生産と流通」『中央史学』28 19～41頁
- 西幸 隆 1988「北海道釧路市材木町5遺跡出土の湖州鏡について」『釧路市立博物館紀要』13 1～8頁
- 平取町教育委員会 1996「平取町カンカン2遺跡」 平取町文化財調査報告書Ⅲ
- 平取町教育委員会 2000「平取町亜別遺跡」 平取町文化財調査報告書13
- 水沢市教育委員会 1982「慶徳遺跡群詳細分布調査報告書」 水沢市文化財報告書9
- 北海道考古学情報交換会・東日本埋蔵文化財研究会 1997「第6回東日本埋蔵文化財研究会資料集 遺物からみた律令国家と蝦夷」
- 筑島榮紀 2001「古代国家と北方社会」 吉川弘文館
- 村上 隆 2007「金・銀・銅の日本史」 岩波新書1085
- 盛岡市教育委員会 1985「志波城跡—昭和59年度発掘調査概報—」
- 山本賢三 1961「東和町丹内山神社経塚発掘調査報告」 東和町教育委員会

12 世紀の二つの都市

—平泉末期と鎌倉初期の遺物様相—

鈴木 弘太

はじめに

都市平泉は、1100 年前後に藤原清衡が江刺群豊田館から本拠を移し、12 世紀における奥羽地域の政治拠点として始まった。その後、奥州藤原氏四代のもとで、1189 年の源頼朝による奥州合戦まで、政治、経済、宗教の複合都市として発展する。一方の鎌倉は、頼朝の入部を契機に奥州合戦を経て、東国政権の中心地として出発する。そして 13 世紀代に、やはり政治、経済、宗教の複合都市としての変容を遂げる。この二つの都市は、東国において中世前期を代表する都市であることに間違いはない。そして、注目されるのはこの二つの都市が、東国において同種の機能を持ちながらも、時間的連続性有することである。

近年の東国の研究成果では、平泉や鎌倉はもとより、福島県荒井猫田遺跡や栃木県下古館遺跡などの「都市的な場」と評価される重要遺跡の報告が相次いだ。これらの状況から飯村均は中世を「都市の時代」と評価し、都市の解明から中世史像へのアプローチが重要な視点であるとした(飯村 2006)。これらの相互比較やその連続性の検討は日本中世史において最重要課題の一つであるように思われるが、いまだ十分な検討がなされているとはいえないだろう。

そこで本稿では、まず柳之御所遺跡の最末期の遺物群を抽出しその遺物様相と、鎌倉遺跡群の最初期の遺物群と比較を輸入磁器である白磁と青磁を中心に検討を行なう。それにより、東国都市における同時代の遺物様相の検討を行なう。次に、その年代的範囲を都市の存続時期にあわせて、12 世紀の柳之御所遺跡と 13 世紀から 14 世紀前葉にかけての鎌倉遺跡群との対比を行なう。ここで都市の、あるいは時代の特徴を考察する。また近年注目される中世遺跡の成果を勘案することで、探るべき対象を中世東国に拡大することを試みる。

また在産土器であるかわらけについても検討を加える。ここでは平泉末期と鎌倉初期の手づくねかわらけをとりあげ、その法量の比較を行なう。また平泉と鎌倉の食膳形態を探るため、かわらけの一括資料から大型と小型かわらけの使用状況を比較することによって在産土器の連続性について検討を加える。

1. 平泉末期と鎌倉初期の遺物様相

1-1. 泰衡期の平泉—柳之御所遺跡の最末期—

柳之御所遺跡では各調査報告書や羽柴直人によって変遷案が示されており(羽柴 2002)、柳之御所の史跡整備委員会でも遺跡の変遷が検討されている。また光谷拓実は年輪年代測定法によって出土木製品から遺構の年代を推測している(光谷 2006)。

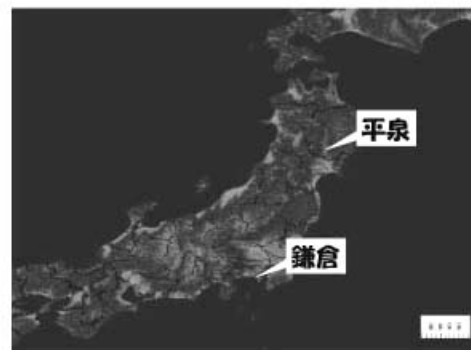


図1 平泉と鎌倉の位置図

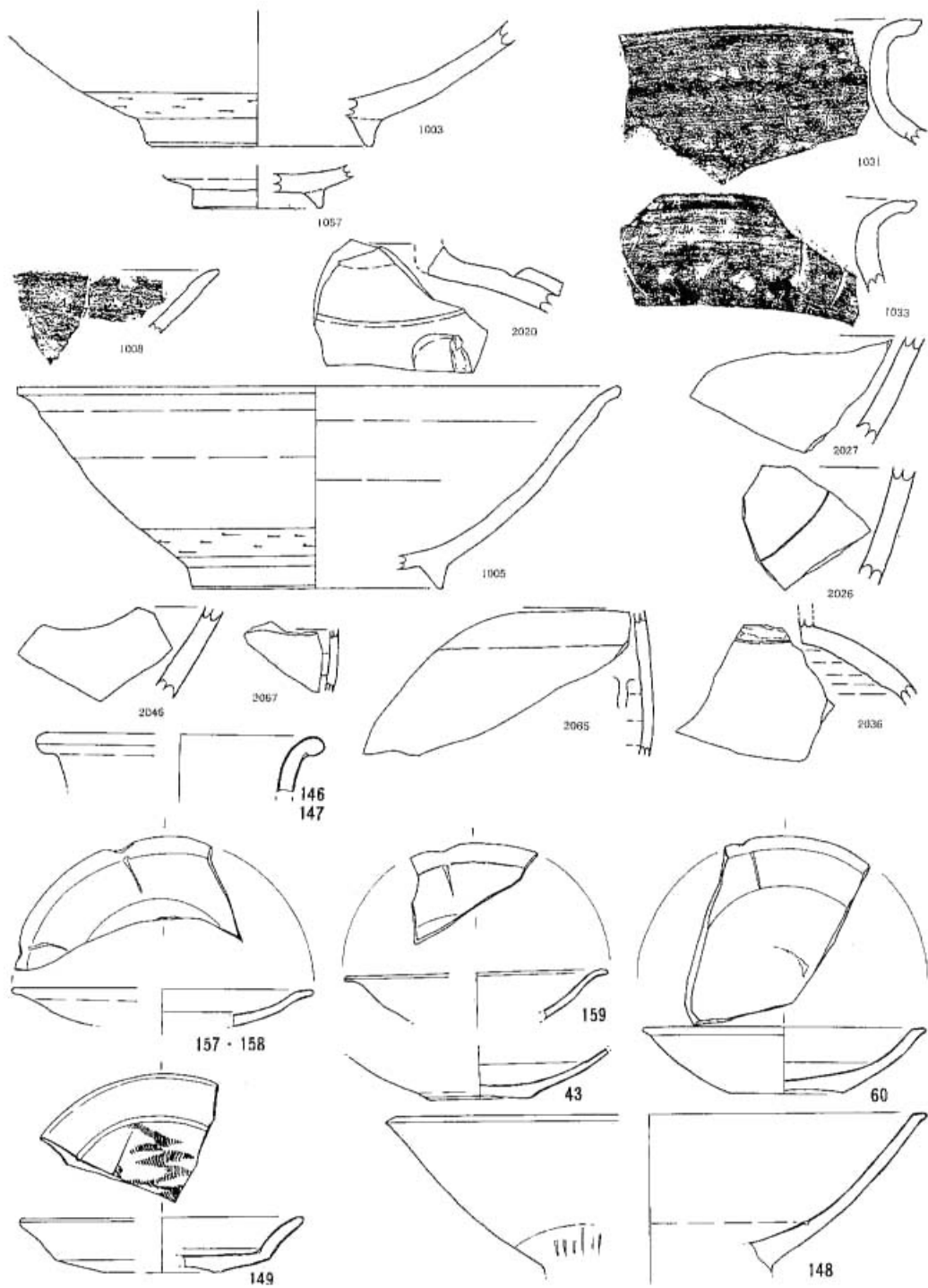


図2 柳之御所遺跡末期の遺物様相

本稿ではこれらの先行研究を参考にしながら、柳之御所遺跡の最末期に属する遺構を抽出し、その遺物様相に検討を加える。ただ上記の研究成果で最新とされた遺構の中でも、掘立柱建物の柱穴からは、陶磁器類の出土は皆無に等しく、遺物の組成から検討を加えようと試みる本稿の資料としては適さない。ここで挙げることができた資料は、井戸跡からの出土遺物のみであった（図2）。

(1) 55SE8

この遺構は、かわらけの変遷においても柳之御所内で最新の遺構であることが想定されており、光谷の年輪年代測定法によって1186年という年代が指摘されている（柳之御所遺跡調査事務所2007）。

出土した遺物は白磁壺（2020、2026、2027、2036、2046、2065、2067）、常滑窯製品の甕（1031、1033）や鉢（1003、1005、1008）、渥美窯製品の鉢（1057）などが出土している。また遺構の下層からは大量の焼土が出土しており、柳之御所滅亡の際の“火事場整理”に伴うものと考えられる。ちなみに二次被熱のみられる白磁が出土しているのも下層であり、上層から国産品が出土している。

(2) 30SE6

この遺構はかわらけの手づくね成形品とロクロ成形品の比率でも最新段階が提示され（柳之御所遺跡調査事務所2007）、光谷の年輪年代推定法では1177年という年代が導き出された。出土した陶磁器類は、白磁壺（146・147）や碗（148）、同安窯系皿（149）や青白磁碗（43、60、157・158、159）などが出土している。同安窯系製品の出土からも遺跡内でも最新段階であったことが示唆される。



図3 鎌倉初期遺物の抽出地点

1-2. 頼朝期の鎌倉—都市中枢域の様相—

鎌倉遺跡群の発掘調査において、鎌倉時代の最初期の遺構が確認されることは多くはない。馬淵和雄は若宮大路や鶴岡八幡宮といった、鎌倉最初期に作られた施設に着目し、層位や遺構の重複状況からそれらより古い遺構を抽出している（馬淵 2004）。また、齋木秀雄はかわらけの変遷を軸に、その最古の型式が出土している地点を概観的に挙げている（齋木 2004）。本報告では若宮大路など構築された年代が文献史料などから推し測れる施設を指標として、鎌倉初期の遺物様相の推移を考察する。なお本来なら柳之御所遺跡と対比すべき遺跡は、源頼朝が鎌倉に入部して最初に御所を置いた大倉の地、現在の遺跡名称では「大倉幕府跡」が最適であるが、この遺跡での調査事例は少なく、狭小の範囲でしか調査が行われていない。そのため本稿の資料としえた発掘調査地点は、頼朝が最初に都市設定をした範囲内と思われる、若宮大路一之鳥居（天文之鳥居）より北側にある各調査地点とした（図 3・4）。

（1）北条時房・顕時邸跡—雪ノ下一丁目 272 番地点—溝 8 裏込め土

この地点では若宮大路の最初期の側溝が検出された。若宮大路は頼朝が寿永元年（1182）に妻政子の安産を祈願して八幡宮の参道を整備したことにはじまるが、その際に側溝も設けられたものと考えられる。本地点では最古の大路側溝が検出されているが、後世の側溝の造り替えによってその大部分が壊されており、覆土の一部分と構築時の裏込め土が確認されているのみである。裏込め土は側溝構築の際に充填されるものであるから、そこから出土する遺物型式の下限年代は構築の実年代と仮定することが可能である（北条時房・顕時邸跡発掘調査団 1997）。しかし、そこから出土した遺物は数少なく、提示できた陶磁器類は龍泉窯系碗 1 点のみである（1）。

（2）今小路西遺跡（御成小学校内）中世 6 面

この調査地点は、鎌倉において最大かつ最高級とされた武家屋敷が検出されたことで著名である。その武家屋敷の南側でも武家屋敷が検出されているが、本稿の資料とする層位はその南側武家屋敷の中世最下層である。検出遺構は溝や土坑が検出されたが、建物跡などは検出されていない。溝は南北溝とそれに直交する東西溝が検出され、鎌倉初期の地割と想定される。年代は頼朝が入部した 1180 年以降と捉えられ、都市としての基盤を成立させる時期、12 世紀第 4 四半期から 13 世紀初頭が充てられる（鎌倉市教育委員会・今小路西遺跡発掘調査団 1990）。出土陶磁器は白磁碗（13）、龍泉窯系青磁碗（7、8、10）や同安窯系劃花文碗（9、11、12）、常滑窯製品（2、3、4）と渥美窯製品（5、6）が出土している。

（3）杉本寺周辺遺跡—二階堂字 912 番 1 ほか地点—堀 1

この調査地点では、鎌倉時代前半に属する大規模な武家屋敷が検出された。その第 1 期遺構群の中でも遺構の重複関係から堀 1 とされた大規模な断面 V 字形の溝が遺跡地の最初期の遺構であるとされる。この大型の断面 V 字形の溝は近隣の調査事例でも確認され、鎌倉の最初期を特徴付ける遺構であると指摘される（岡 2006）。これら大規模な溝の構築は頼朝の大倉御所造営が契機としてあったことが指摘されており、その下限年代は 13 世紀第 1 四半期ごろであるとされており、本報告で着目する堀 1 も 12 世紀第 4 四半期から 13 世紀第 1 四半期が想定できる（杉本寺周辺遺跡発掘調査団編 2002）。この遺構からは龍泉窯系青磁碗（18）や青白磁皿（17）、渥美窯製品（15）や常滑窯製品（14、16）が出土している。

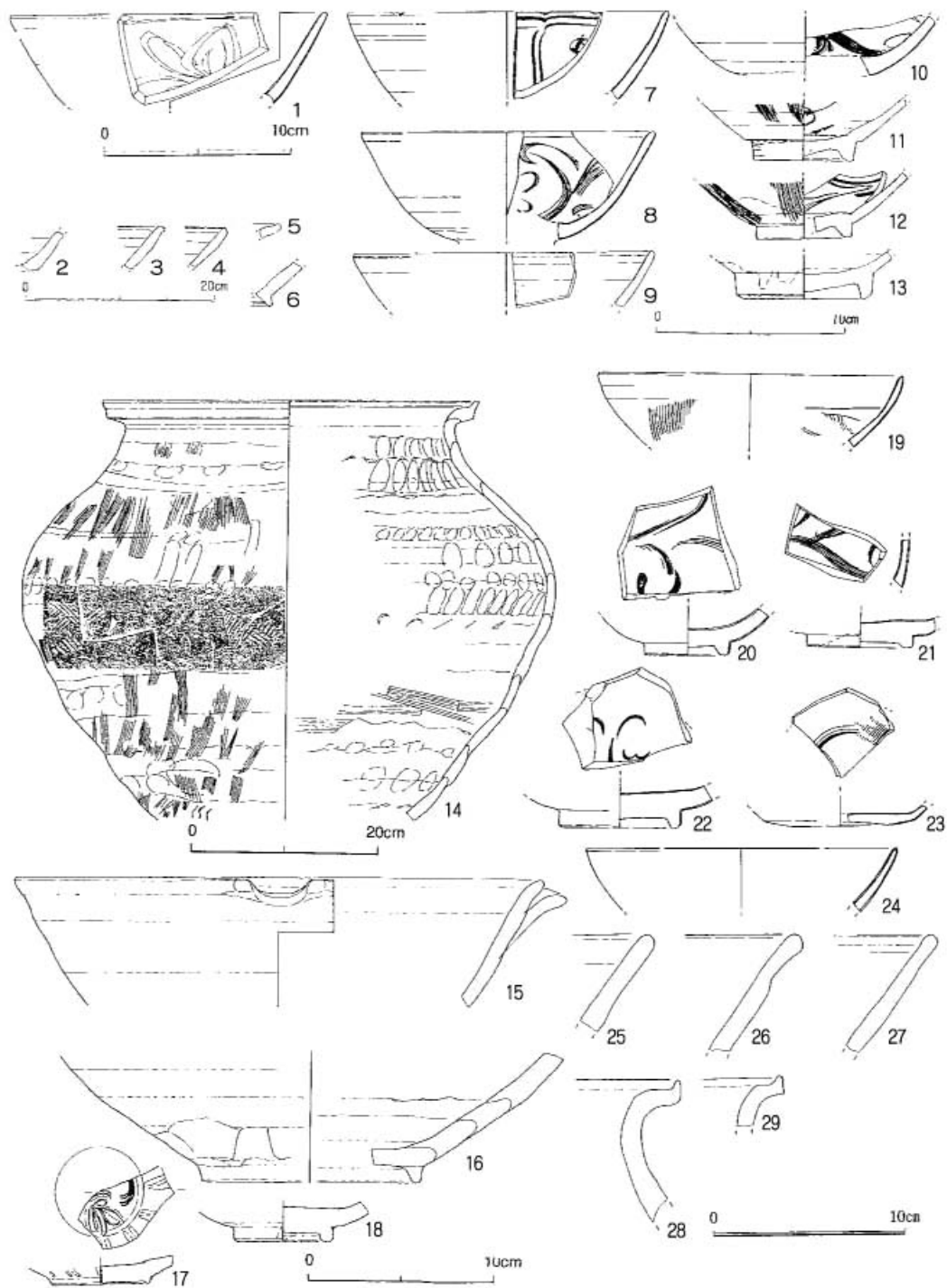


図4 鎌倉遺跡群初期の遺物様相

(4) 北条小町邸跡(泰時・時頼邸)一雪ノ下一丁目367番1、368番1地点—南北溝1下層

この調査地点では、若宮大路東側側溝(南北溝)が検出され、なかでも南北溝1が最古であるとされる。上層は後世の掘り込みによって壊されているが、下層からでは鎌倉初期と推測される遺物が出土している。この遺構の下限年代はやはり若宮大路造営との関わりから、13世紀第1四半期ごろと推定されている(北条小町邸跡発掘調査団2000)。そこから出土した遺物は同安窯系青磁(19、23)や龍泉窯系青磁(20、21、22、24)、常滑窯製品(25~29)が出土している。

1-3. 小結

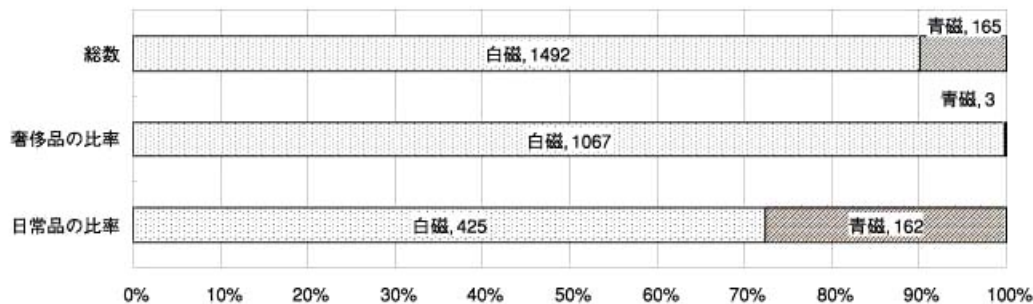
以上、僅かな事例のみではあるが柳之御所遺跡の最末期と鎌倉遺跡群の最初期の遺物様相をみてきた。柳之御所遺跡については、これだけの例数の中でも白磁壺の多さに着目される。八重樫忠郎は平泉の価値観の中で白磁壺が最上位にあると指摘しており、平泉遺跡群の中でも柳之御所遺跡の白磁の優越が認められるとしている。後に触れるように、碗皿でもやはり白磁が多く出土しているとされる(八重樫1997)。

鎌倉遺跡群についても、都市中枢域の代表的な事例であるためごく限られた例数でしかない。ただ輸入磁器類では龍泉窯系青磁と同安窯系青磁が主体をなし、国産陶磁器類では渥美窯製品と常滑窯製品が主体をなしていることが推察される。ちなみに、瀬戸窯製品は良好な資料が得られなかったが、藤澤良祐の研究をみても鎌倉初期段階での瀬戸窯製品の搬入量は極めて少ない(藤澤2002)。

ただ、12世紀中頃から後半とされている輸入磁器類、12世紀後葉とされる渥美窯製品などが鎌倉遺跡群においては13世紀第1四半期ごろに廃棄されていることには着目される。これを生産年代と廃棄年代の差異と捉えることが可能であろうか。そして、鎌倉遺跡群においては頼朝期以前の年代に比定される遺物の出土例は多くは無い。これは都市造営にあたって伝世品を持ち込んだのではなく、鎌倉に直接的に物資を輸入した結果であるといえよう。

さて、二つの様相の遺物様相を比べる場合、まず注目されるのは、柳之御所遺跡での白磁の出土量の多さであろう。先にも挙げた八重樫の指摘のように平泉遺跡群においても柳之御所遺跡での白磁出土量の多さは圧倒的であるとされるが、それは初期の鎌倉と比較しても圧倒的な量であった。碗皿類についても柳之御所遺跡では白磁が卓越しているのに対し、鎌倉では青磁が圧倒的である。次に触れる今小路西遺跡(御成小学校内地点)にみえるように、鎌倉が都市として成熟してくる13世紀中葉以降においても、奢侈品は青磁が主体を占める。これら、白磁と青磁を求める傾向は、平泉と鎌倉を比

グラフ1 柳之御所遺跡出土の白磁と青磁の比率



較した場合、最も顕著な差異であろう事が想定される。

「平泉が栄えた時代は“白磁の時代”」と称されることも散見されるが（手塚 2007 など）、初期鎌倉や平泉遺跡群の他地域との様相を勘案すると、時代の変遷だけではなく、そこに藤原氏の白磁への欲求が働いていたことが想定できる。ただその白磁文化は鎌倉には引き継がれず、代わって台頭したのが青磁文化であった。次にその状況を、年代の幅をもう少し広げて 12 世紀の平泉と 13・14 世紀鎌倉の二つの都市を比較することで、探ってみたい。

2. 都市平泉と鎌倉の遺物様相—近年注目される中世遺跡を含めて

ここでは、柳之御所遺跡について八重樫忠郎による輸入磁器類の整理（八重樫 1997）をもとにグラフを作成し、それと鎌倉遺跡群の比較的広範囲が調査された事例のうち、武家屋敷跡と推察される 2 地点の調査資料の比較検討を行なう。

2-1. 柳之御所遺跡

柳之御所遺跡の白磁と青磁の出土比率をグラフ 1 に示した。それをみると白磁が約 9 割とその大部分を占める。その内、壺類や水注の奢侈品に着目するとほぼすべてが白磁で占められる。それに対し碗皿類の日用品は青磁の比率がやや増大し、白磁が約 7 割と青磁が約 3 割となる。柳之御所遺跡において白磁が優越することは前章と同様の傾向ながら、特に奢侈品の圧倒的な割合には注目すべきである。

2-2. 鎌倉遺跡群の様相

都市鎌倉の様相を今小路西遺跡（御成小学校内地点）と杉本寺周辺遺跡（二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点）から、中世都市鎌倉の遺物様相を鎌倉時代初期と鎌倉が都市と成熟してくる鎌倉時代中後期に分け、その比較を行なう（グラフ 2-4）。

（1）鎌倉時代初期の白磁と青磁

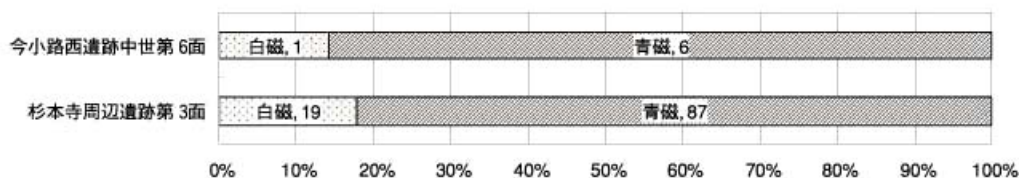
今小路西遺跡（御成小学校内地点）中世第 6 面は、前述のように 12 世紀第 4 四半期ごろから 13 世紀初頭ごろが当てられる。このグラフ 2 の今小路西遺跡の数値は報告書に掲載されているもののみで、多くは無いが、その比率を見ると青磁が 85% と多くを占める。

一方の杉本寺周辺遺跡（二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点）でもやはり青磁が約 8 割と同様の比率を占める。当然ながら、これらは前章での検討と同種の傾向を示す。

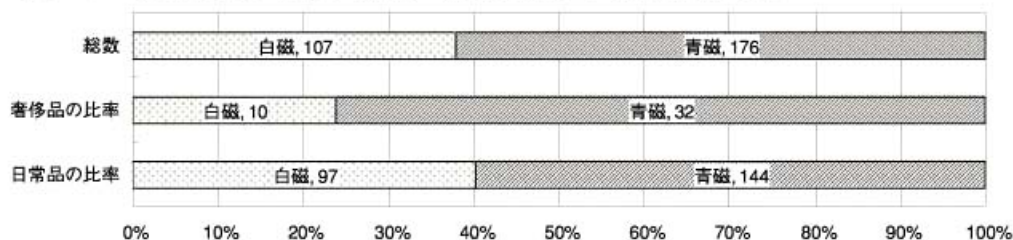
（2）鎌倉時代中後期の白磁と青磁

次に鎌倉遺跡群でも遺物量が増加してくる 13 世紀中葉以降、鎌倉幕府が滅亡する 14 世紀前葉までを対象に同様のグラフを作成した（グラフ 3・4）。

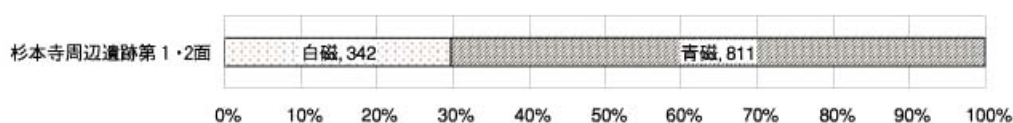
今小路西遺跡（御成小学校内地点）の中世第 3 面は 13 世紀後葉から 14 世紀前葉と考えられ、鎌倉



グラフ3 今小路西遺跡（御成小学校内）中世第3面出土の白磁と青磁の比率



グラフ4 杉本寺周辺遺跡第1・2面出土の白磁と青磁の比率



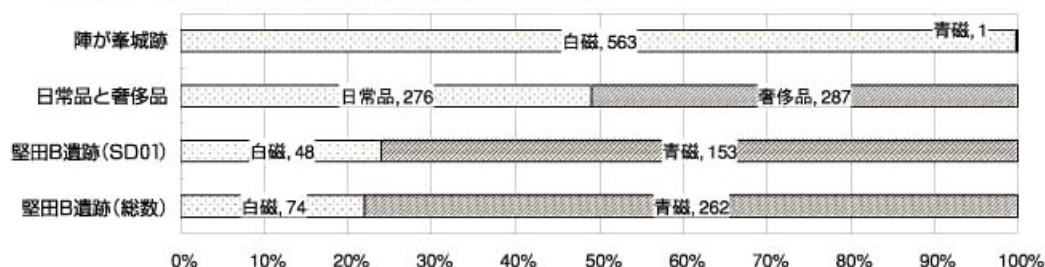
遺跡群内でも大規模かつ最高級とされた武家屋敷が発見されたことで著名である。さて、そこから出土した磁器類をグラフでみると、白磁が約4割と前代に比べると白磁の増加傾向が認められる。また、柳之御所遺跡と同様に、奢侈品と日常品に分けてグラフを作成すると、奢侈品は75%が青磁で占められる。日常品と考えられる碗皿類は約4割を白磁が占める。ここから日常品と考えられる白磁碗皿類の増加傾向が認められ、先の全体比率を反映させている。なお、ここでの数値も報告書に掲載されている遺物のみである。

さて杉本寺周辺遺跡（二階堂字杉本912番1ほか地点）でもやはり、前代に比べ白磁の増加傾向が認められ、白磁が全体の37%を占める。今小路西遺跡（御成小学校内地点）でもそうであったように、鎌倉時代中後期における白磁碗皿類の増加傾向は注目される場所である（グラフ4）。

2-3. 近年注目される中世遺跡—陣が峯城と堅田B遺跡—

ここでは近年注目される発掘調査事例のうち、12世紀の様相をよく示していると考えられる福島県陣が峯城跡と13、14世紀の一括資料が良好な状態で発見された石川県堅田B遺跡を資料とし、平泉と鎌倉の並行期の東国の様相について探っていく（グラフ5）。

グラフ5 近年注目の発掘調査事例から探る東国の様相



(1) 福島県陣が峯城跡

陣が峯城跡は福島県会津坂下町に所在する。2002年から発掘調査が進められ、二重堀に囲まれた居館跡が発見されている。そこから白磁壺をはじめとする12世紀代の遺物が数多く発見された。また近年の研究成果から越後の豪族である城氏との関わりが指摘される(柳原・飯村2007)。八重樫に拠れば、遺跡の年代は12世紀第1四半期後半から第3四半期が推定されており、平泉が都市として栄えた時期と並行する。ここでも八重樫の研究(2007)をもとに陣が峯城跡の白磁と青磁について検討を加える。

陣が峯城跡出土の白磁と青磁の比率を見ると、ほぼすべてを白磁が占め、青磁は1点のみの出土である。これは柳之御所遺跡以上に白磁の優越性が認められる。やや蛇足になるが、白磁における奢侈品の割合の高さにも注目される。これは輸入磁器のみの検討で結論を導き出せるものではないが、日用品と奢侈品が同率比を示す状況は当時どのような空間であったのか、今後検討を加えてみたい。

(2) 石川県堅田B遺跡

この遺跡は石川県金沢市堅田町に所在する。1996年より発掘調査が進められ、中世の居館跡が発見された。注目されるのはSD01とされた堀跡から大量のかわらけや陶磁器、漆器などが出土し、それと共に般若心経が書かれた「巻数板」3点が出土した。その内2点に「建長第三正」(1251)と「弘長三年正月八日」(1263)の記年銘が残る。この記年銘からこれらの出土遺物が13世紀後半の一括資料とすることができる。また居館としての存続年代は13世紀中頃から14世紀後半ごろとされている(向井2006)。この上限年代は都市として成熟をむかえた頃の鎌倉と並行する時期と推定され、また「鎌倉幕府」が滅亡した後の、南北朝期までの様相を示しているものと考えられる。

さてそこから出土した白磁の総数は74点、青磁は262点であった。その内SD01から出土した白磁の総数は48点、青磁は153点であった(金沢市埋蔵文化財センター2004)。SD01出土の白磁青磁の比率で、76%を青磁が占める。その傾向は遺跡の総土点数にも反映され、ほぼ同様の数値を示す。

2-4. 小結

前章でみてきたように、12世紀末から13世紀初頭の二つの都市から出土する白磁と青磁に着目した場合、平泉では白磁が圧倒的であると、鎌倉では青磁に数的優位性が認められた。本章ではさらに時代幅を広くとり、12世紀の平泉と、13世紀から14世紀前葉の鎌倉について検討を行ってきた。その結果でもやはり平泉では白磁の需要が圧倒的であり、鎌倉では青磁が優位であることが確認された。また近年注目される他地域の二つの遺跡の検討を加えることにより、中世東国における傾向を探ってきた。その結果12世紀の城館跡である陣が峯城では白磁が優越し、13世紀後半の一括資料が発見された堅田B遺跡では青磁の数的優位が示唆された。これらを統合して考察すると、中世東国社会において白磁文化から青磁文化の需要の移行が指摘できる。また、これら磁器類の生産地は大陸にあり、それを勘案すると、今後の課題としては、この移行を東アジア規模での変容として検討せねばなるまい。ただ、平泉と鎌倉の二つの中世都市は他地域に比べ圧倒的な物量を有していた空間であったことは留意すべき点であり、先の飯村の指摘を勘案するとこの二つの都市の文化的移行こそが、東アジア規模の変容のモデルケースとして捉えることができよう。

3. 平泉と鎌倉のかわらけ

前章では大陸からの輸入磁器について検討を行ない、平泉と鎌倉の差異を導き出した。次に在地産土器であるかわらけについて、比較検討する。

3-1. 手づくねかわらけの法量の比較

平泉のかわらけ研究については諸論考が挙げられるが（井上 1996、佐藤 2005、羽柴 2001・2003、八重樫 1996 など）、平泉におけるかわらけの法量の減少化についてはほぼ定説となっている。その中で平泉末期の資料群は、柳之御所遺跡の 52SE8 である。なお、本章では大型手づくねかわらけを中心に取り扱いしていく。

大型手づくねかわらけの変遷のうち法量減少化については、佐藤嘉広の研究（2005）を参考にすると、12 世紀第Ⅱ四半期ごろでは口径 15cm 前後あったものが、1150 年から 70 年ごろには 14.5cm から 14 cm 程度になり、1170 年代には 14cm から 13.5cm の範囲内に収まる。1180 年代になると口径は 13.5cm 以下となり、当初の口径より約 1.5cm の減少化が認められるという。

一方の鎌倉の今小路西遺跡（御成小学校内）中世第 6 面の資料は、図示される例数は 20 点と少ないながらも、口径は最小でも 13.5cm、平均値は 14.16cm であり平泉と比べるとその法量は大きい。また一見して、鎌倉のものは厚くぼてりとした器壁で、平泉からの連続性は認められない。

3-2. 一括資料から見る大小かわらけの比率

かわらけは饗宴などのハレの場で一度限りの使用で廃棄された器であった。そのため饗宴が終わった際には大量のかわらけが廃棄される。平泉や鎌倉の発掘調査ではその痕跡が一括資料として発見されることがままたり“かわらけ溜り”などと称される。

羽柴は柳之御所遺跡の井戸跡 52SE10 から出土したかわらけの一括資料をもとに、絵巻に記されたかわらけの饗膳形態との比較検討を行なっている（羽柴 2003）。それに拠ると 52SE10 から出土したかわらけは大型が 15 点で、小型が 74 点である。大皿のうち半数が酒盃と使用されたと仮定して、その比率は 1 : 9 程度になるという。また『信貴山縁起絵巻』と『伴大納言絵巻』に描かれる饗膳形態では（図 5）、大皿と小皿の比率が 1 : 7 ないし 8 であるとし、おおむね近似値であるとしている。

他方の鎌倉では、政所跡の一括資料（かわらけ溜り 1 G 区下層）に着目される。先にも記したようにかわらけの一括資料は、饗宴などの使用された後に廃棄されたものが一括資料として検出されることが多い。しかしこの資料群は、かわらけが未使用の状態、納屋などに保管されていた状況で発見さ

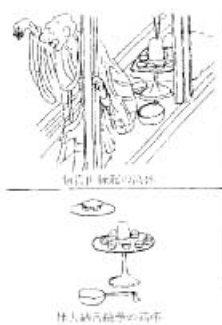


図5 52SE10 かわらけ使用想定図（羽柴 2003）



図6 政所跡かわらけ溜り 1 G 区下層

れた。鎌倉遺跡群では、管見の限り、本資料群しか見当たらず、非常に稀有な発見例といえる（手塚 1993、図 6）。さてそこからは大型かわらけ 74 点と、小型かわらけが 493 点でその比率は 1 : 7 を示し、絵巻に描かれる比率と符合する。これは饗宴に際して必要な数を保管していた状況が示唆され、饗膳形態に合わせてかわらけを買い求めていたことが示唆される（鈴木 2008）。

1-3. 小結

ここでは在産土器であるかわらけについて、平泉末期と鎌倉初期の資料の口径の比較、それと一括資料から大小かわらけの組み合わせの比較検討を行ってきた。口径比較では法量減少化の末期にあたる 52SE8 では 13.5cm 以下であるのに対して、今小路西遺跡中世第 6 面では 14 cm 超である。このことは平泉での法量減少化は鎌倉に反映されないことが指摘でき、器型の比較でも平泉のかわらけ系譜は鎌倉に引き継がれないことが示唆される。

大小かわらけの組み合わせでは、平泉と鎌倉ではおおむね同一の比率を示し、それらは絵画資料に記される饗膳形態と同様の使用状態が示唆される。ただ、平泉では大型かわらけの半数を酒盃と仮定した検討であるのに対して、鎌倉ではそれが含まれない数値での結果である。酒盃の問題は今後の課題としたい。

おわりに

輸入陶磁器である白磁と青磁、在産土器であるかわらけを中心に平泉と鎌倉の比較検討を行ってきた。まず白磁と青磁の出土比率を中心に検討を行ない、平泉末期と鎌倉初期の検討では、平泉は白磁が、鎌倉では青磁がそれぞれ優越することが確認できた。また 12 世紀の平泉と 13 世紀から 14 世紀前葉の鎌倉と、時代幅を広げることによって二つの都市の白磁と青磁の比率の検討を行なった。その結果でもやはり平泉では白磁が、鎌倉では青磁が優越し、とくにそれは奢侈品に顕著であることが示唆される。鎌倉のみに着目すると、13 世紀中期ごろの白磁の増加傾向には注目できる。この時期の鎌倉の遺物量は激増する傾向が指摘できるが、おそらく都市の成熟とともに物量の増加があったのであろう。その増加傾向のなかで白磁の占める割合が増えることは需要と供給に何らかの変化があったものと考えられる。これらは都市の需要はもちろん生産地である大陸や、京都や博多など西国との関わりを含め考察すべきであろう。

次に、近年注目される発掘調査事例では 12 世紀の居館跡である陣が峯城跡と 13・14 世紀の居館跡である堅田 B 遺跡を含めて検討することによって東国の状況を探ろうと試みた。その結果 12 世紀の陣が峯跡では白磁が、13・14 世紀の堅田 B 遺跡では青磁が優越することが示唆され、平泉と鎌倉と同種の状況とすることができる。少ない例数で強調することはやや危惧されるが、白磁から青磁の文化的移行は列島規模の変化であり、生産地である大陸までも含めると東アジア規模の変容であることが示唆される。この白磁から青磁への移行というのはすでに研究史上でも指摘されてきたことであるが、『都市の時代』と称される中世史研究では、平泉と鎌倉の二つの都市を比較検討することによって、この変容のモデルケースとして提示することができるのではあるまいか。

さて、平泉末期と鎌倉初期のかわらけの検討では、口径に着目し比較を行なった。その結果、平泉末期では 13.5 cm 以下であるのに対し、鎌倉では 14 cm 超であり、平泉で指摘されている法量減少化傾向は鎌倉には引き継がれないことが示唆される。また器型からみてもその断続性を追認できる。ただ

しその使用状況、大小かわらけの組み合わせは1：7ないし8で、同様の饗膳形態が採用されていたことが示唆される。

非常に雑駁に平泉と鎌倉の比較検討を行なってきた。その結果、時代の変遷により白磁から青磁への文化的移行が示唆され、時代及び地域の差異によるかわらけの技術系譜の断続が予想された。当然のことながら、これらの要因には政治動向を中心とした社会背景が潜在していると思われるが、検討要素を増加することとともに、今後の課題としたい。冒頭に記したように平泉と鎌倉は中世前期を代表する中世都市である。これらを比較検討することによって、何が同じで何が違うのか、その要因は時期差なのか地域差なのか、時代背景と社会動向とはどう関わりあうのか、これらの明確にしていくことによって、時代の特徴、都市の特徴を導き出せるものと考えている。

末文になったが本稿の執筆および平泉文化フォーラムでの報告に際しては、佐藤嘉広氏をはじめとする岩手県教育委員会の方々には、多大なる資料の提供とご指導、ご協力を賜った。またすべてのご芳名を記すことはできないが、以下の関係機関の方々にもお世話になった。心より感謝申しあげる。

平泉町教育委員会、平泉町埋蔵文化財センター、奥州市教育委員会、岩手県埋蔵文化財センター、鎌倉市教育委員会、鎌倉考古学研究所、鎌倉かわらけ検討会。

<引用・参考文献>

飯村均 2006 「中世の都市と構造」『歴史考古学を知る辞典』東京堂出版。

井上雅孝 1996 「岩手県における古代末から中世前期の土器様相（素描）」『中近世土器の基礎研究』XI中世土器研究会。

岩手県教育委員会 2000 『平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡 第50次発掘調査概報』。

岡陽一郎 2006 「鎌倉の変容」『鎌倉時代の考古学』高志書院。

金沢市埋蔵文化財センター2004 『石川県金沢市堅田B遺跡II（本文・遺物編）』。

鎌倉市教育委員会・今小路西遺跡発掘調査団 1990 『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』。

齋木秀雄 2004 「出土遺物からみる鎌倉の開発」『国立歴史民俗博物館研究報告第118集 日本歴史における災害と開発II』国立歴史民俗博物館。

佐藤嘉広 2005 「柳之御所遺跡出土かわらけの年代推定—ロクロかわらけ大皿を中心に—」『岩手考古学』第17号 岩手考古学会。

杉本寺周辺遺跡発掘調査団編 2002 『杉本寺周辺遺跡 二階堂宇杉本912番1ほか地点発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会。

鈴木弘太 2008 「二つの工房で作られた「かわらけ」—鎌倉・政所跡出土のかわらけ一括出土事例について—」『鶴見考古』第7号 鶴見大学文学部文化財学科河野ゼミ。

手塚直樹・田畑佐和子 1993 「政所跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告9』鎌倉市教育委員会。

手塚直樹 2007 「5. 中世の陶磁器」『土器の考古学』学生社。

羽柴直人 2001 「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第13号 岩手考古学会。

羽柴直人 2003 「平泉におけるかわらけの用途と機能」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院。

羽柴直人 2004 「柳之御所遺跡の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第118集 国立歴史民俗博物館。

平泉町教育委員会 1994 『岩手県平泉町文化財調査報告書第38集 柳之御所発掘調査報告書—平泉バイパス・一閑遊水地関連遺跡発掘調査—』。

- 藤澤良祐 2002 「中世都市鎌倉における古瀬戸と輸入磁器」『国立歴史民俗博物館研究報告第94集 陶磁器が語るアジアと日本』国立歴史博物館。
- 北条小町邸跡発掘調査団 2000 『北条小町邸跡（泰時・時頼邸）発掘調査報告書—鎌倉市雪ノ下一丁目 367番1、368番1—』。
- 北条時房・頼時邸跡発掘調査団 1997 『北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目 272番地点』。
- 馬淵和雄 2004 「中世都市鎌倉成立前史」『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院。
- 光谷拓実 2006 「第V章 付編 自然科学分析調査報告書（1）柳之御所遺跡出土木製品の年輪年代測定結果」『平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡 第59次発掘調査概報』岩手県教育委員会。
- 向井裕知 2006 「〈事例報告〉堅田B遺跡」『鎌倉時代の考古学』高志書院。
- 八重樫忠郎 1995 『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書—平泉郵便局庁舎建設に伴う調査—』平泉郵便局・郵政省東北郵便局。
- 八重樫忠郎 1997 「輸入陶磁器からみた平泉—分布傾向からの考察—」『貿易陶磁研究集会平泉大会資料集 東北の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会。
- 八重樫忠郎 2007 「陶磁器が語る陣が峯城跡」『御館の時代—十二世紀の越後・会津・奥羽—』高志書院。
- 柳之御所遺跡調査事務所 2007 「柳之御所遺跡の検討（中間報告 その3）—史跡整備計画との関わりを中心として—」『平泉文化研究年報』第7号 岩手県教育委員会。

柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷（中間報告 その4）

－史跡整備計画との関わりを中心に－

柳之御所遺跡調査事務所

（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課柳之御所班）

1 はじめに

我々の柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷についての考え方及びその根拠については、本研究年報第7号（2007、中間報告3）において報告したとおりである。しかし、前号報告の段階では、必要とされるすべての対象遺構についての検討作業が間に合わず、結果については中間的段階として提示していた。その後、補足的な作業を続け、並行して、進行中の史跡整備を説明するために必要な、「ロクロかわらけ底部重量比（数量）」と「建物軸方位」について、現段階における全資料の分析が終えたことから、当初の目的に対しての結論として提示するものである^(注1)。したがって、データ量は増加したものの、結論部分については前号と変わることがなく、方法論等についても新たに説明すべき内容は有していない。

ここでは、前号と重複する内容については割愛し、補足作業により分析データの更新が行われた「ロクロかわらけ底部重量比（横軸）と手づくねかわらけ片数量比（縦軸）」（第1図、前号p63第3図を改訂）と「ロクロかわらけ底部重量比（横軸）と建物跡等軸方位（縦軸）の相関」（第2図、前号p65第5図を改訂）についてのみ掲載することとする。また、前号ではそれぞれの遺構^(注2)についての平面図を示さなかったため、今回新たに遺構変遷図として図示することとする（第3図）。さらに、それらの遺構変遷について、当面の歴史的解釈を加えておく。

検討の結果、5段階の遺構変遷が認められたことから、古い段階から順にⅠ～Ⅴ期と呼ぶこととする。このことから、従来圃池の変遷についてⅠ～Ⅲ期としてきたものについては、Ⅰ～Ⅲ期と改める。

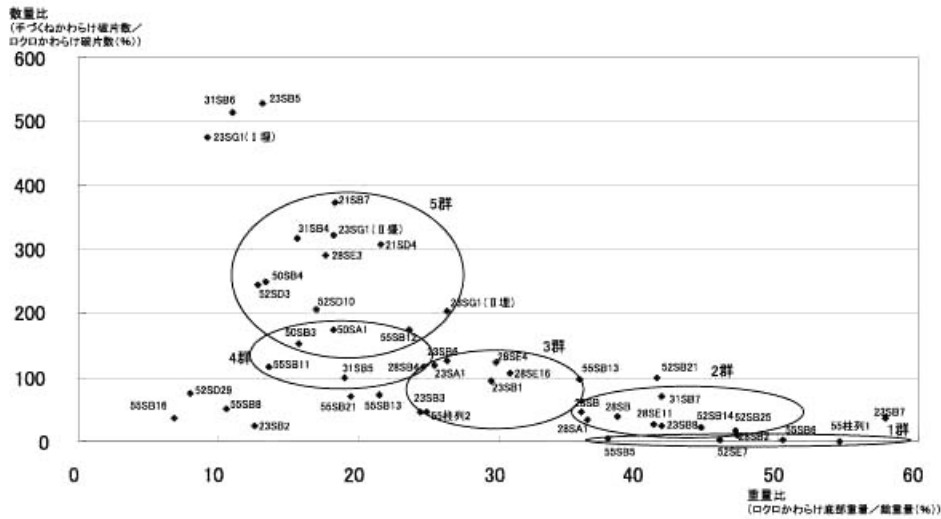
なお、個々の遺構から出土したかわらけについてのデータについては、同時に刊行した「柳之御所遺跡第65次発掘調査報告書」に掲載したので、参照されたい。

2 遺構変遷についての説明

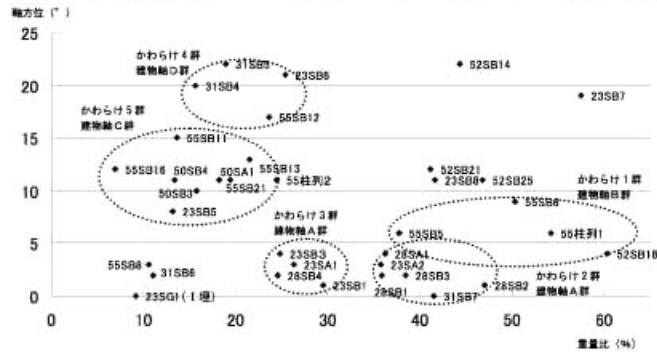
第Ⅰ期（第4図）：建物軸方位6～9°〔B群〕にほぼ対応する。出土かわらけ片では、総重量に対するロクロかわらけ底部重量が30%台後半～50%台で、手づくねかわらけ破片数に対する数量比が10%未満である〔1群〕。実年代として、11世紀末から12世紀第1四半期ごろを想定。

この時期の中心建物として、55SB5及び55SB6が考えられる。いずれも、堀内部の北側に位置する。現況では北東部分が北上川に面した崖面となるが、12世紀当時はさらに北側に一定範囲の平坦面が広がっていた。江刺郡豊田館からの移転先として、衣川など奥六郡方面を見渡すことのできる場所に占地されたと解することも可能であろう。これらの建物跡が、堀外部で確認されている中尊寺方向へ延びる道遺構（25SD3など）の延長上に位置していることも示唆的である。

発掘所見から、55SB5と55SB6は直接重複し、後者が新しいことが確認されている^(注3)。52SE10、55SE



第1図 ロクロかわらけ底部重量比 (横軸) と手づくねかわらけ片数量比 (縦軸)



第2図 ロクロかわらけ底部重量比 (横軸) と建物跡等軸方位 (縦軸) の相関

1、28SE 1はこの段階に機能し、しかも埋没した井戸跡と考えられ、52SE 7も機能していた可能性を有している。

この段階では、園池(23SG 1)はまだ構築されておらず、園池に近接した建物については明確さに欠く。また56SD40を、21SD 1などの二重の堀に先行して構築していた可能性も視野に入れる必要がある。

第Ⅱ期・第Ⅲ期(第5～6図)：建物軸方位0～5°にほぼ対応する〔A群〕。出土かわらけ片では、総重量に対するロクロかわらけ底部重量が第Ⅱ期では30%台後半～40%台前半で、手づくねかわらけ破片数に対する数量比が50%前後〔2群〕、第Ⅲ期ではそれぞれ20%～30%、100%前後となる〔3群〕。実年代として、第Ⅱ期は12世紀第2四半期ごろ、第Ⅲ期は12世紀第3四半期前半を想定^(註4)。

この時期に園池23SG 1が構築され、中心建物が園池北東域に展開する。園池は2時期以上の作り替えがあることが確実である。園池が構築された位置は、給排水にも規制されたと推定する。給水源については必ずしも明確ではないが、自然湧水など複数の給水手段があったのではないかと想定している(岩手県教委2007pp56～57)。排水は一部に木樋を利用し、西側猫間ヶ淵方向に暗渠を構築したことが確認されている。

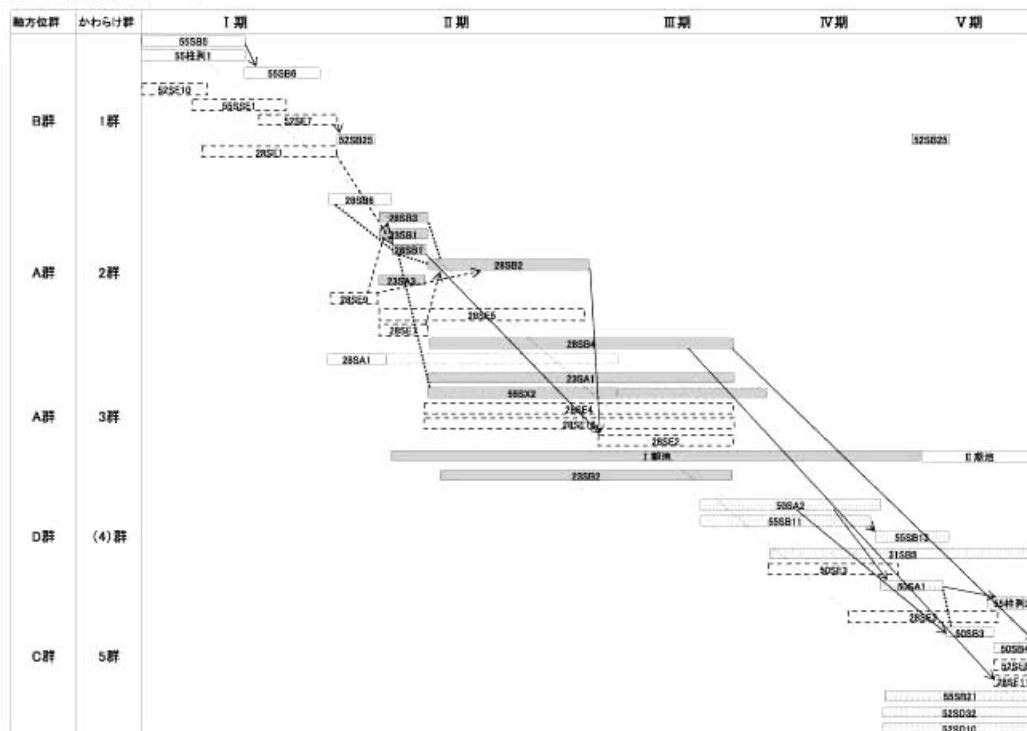
最初の段階(1期)では、園池を跨ぐように東西に架橋されている。この橋は、金鶏山山頂方向に向かっている。金鶏山山頂部から発掘された経塚のうち、袈裟襷文を有する渥美壺(三浦謙一ほか2001 p 236②)

は、12世紀前半（第2四半期）に位置づけられていることから、この時期に金鶏山が平泉全体にとって重要な意味をもった可能性がある。

園池の東側は広く削平されているため、この範囲の遺構は明らかでないものの、園池際を除くと井戸や便所状遺構のように深く掘削される遺構については確認されていないことから、建物等掘削深の浅い遺構が所在したか、もしくは掘り込みを伴う遺構が形成されなかった可能性がある。なお、中心建物域を圍繞する23SA1、28SA1もこの段階に設置されている。

建物軸方位が次の第Ⅲ期と共通していることから、直接・間接に重複している遺構の変遷を跡付けることは難しい^(注6)。28SB1、28SB2、28SB3はそれぞれ四間×五間で、ほぼ同一規格の四面庇付中心建物が連続して三棟存在したと考えられていたが（埋文報告書など）、このうち、28SB3は柱筋からその東側に位置する廊状の23SB1と一連の建物を構成していた蓋然性が高い。23SB1が接続する遺構としてもうひとつ可能性のある28SB4とは柱筋が整合しない。この場合、28SB3は四間×六間の構成となる。28SB2との同時存在は不可能なので、28SB1と並存していた可能性を考えることができる。

一方、四間×九間の四面庇付建物28SB4は、28SB2と並立していた可能性がある。これは、28SB3の機能が28SB4へ、また、28SB1の機能が28SB2へ遷移したと想定することによるものである。その他、堀内部地区の遺構変遷については、これまでの検討に相互の重複関係の整理を加え、第3図のように跡付けることが可能である^(注6)。



第3図 柳之御所遺跡堀内部地区遺構変遷案

各遺構の変遷案を概念的に示したもの。個々の遺構の重複関係等については、下記のとおり。

直接重複 → 直接重複のうち埋文報告書の解釈によらないもの → 間接重複 -----

遺構名説明

B群建物 A群建物 D群建物 C群建物 井戸状遺構

この時期の遺構のうち、堅穴建物55SX2は東側に張り出しを有するが、発掘調査時の所見から、その部分は拡張によるもので、しかも28SB4を避けていると見るべきであることから、両者が並立していたことを傍証する。なお、55SX2については「中間報告1」で『吾妻鏡』文治5年9月22日条の「倉廩」の可能性を考えたが（p51）、堀内部地区最終段階（V期、1189年ごろ）に残存していなかった場合、その可能性は史料解釈上きわめて低いと考えなければならない。一方で、次の段階（第IV期）で比較的大型の総柱建物31SB5が構築されたと考えられることから、「倉」としての機能が堅穴建物から高床建物に移動した可能性も考慮する必要がある。

このほか、主要な井戸跡として、28SE2、28SE4、28SE5、28SE7、28SE9、28SE15、28SE16、31SE2、31SE3があげられる。これらの遺構では大量のかわらけのほか、墨書折敷や祭祀具等も出土し、頻繁な饗宴が行われていたことが想定されるものである。

この段階は、23SB1のような廊状建物が存在したと考えられること、寝殿造風の建物が描かれた折敷が出土していること、四面庇を有する「規格的建物」（中間報告2 p55）が卓越することなどから、堀内部地区がもっとも「京都化」された時期と見る事が可能である。したがって、園池西側に総瓦葺の持仏堂が置かれていたと考えることも十分可能であろう（上原2001）。

この時期が、陸奥守藤原基成の当地への下向と相前後していることは、奥州藤原氏の歴史的性格を検討するうえで重要な視点と考えられる。同時に、建物等の軸方位が南北正方位を中心としているという点では、毛越寺を構成する伽藍や土塁、道路軸等と一致し、平泉全体の都市計画が一気に進められた時期と考えることが可能である。

第IV期（第7図）：建物軸方位17～25°〔D群〕にほぼ対応する。出土かわらけ片では、総重量に対するロクロかわらけ底部重量がおおむね20%前後で、手づくねかわらけ破片数に対する数量比が100%前後である〔4群〕。実年代として、12世紀第3四半期後半～第4四半期前半ごろを想定。

中心建物域は、堀内部北東部に展開する。この範囲は、北上川による後世の崩落が大きいと考えられ、建物の全体構成が明らかでない。一時期、50SA2による堀区画があったと考えられ、その内部には50SE3が含まれ、「磐前村印」や白磁四耳壺が出土している。白磁四耳壺はⅢ類で年代的にも矛盾しない。

園池北側に位置する31SB5は第65次調査により二間×五間の総柱建物であったことが明らかとなっている。この建物が最終段階まで残存していた場合には、『吾妻鏡』に見える「倉廩」と想定することも可能である。

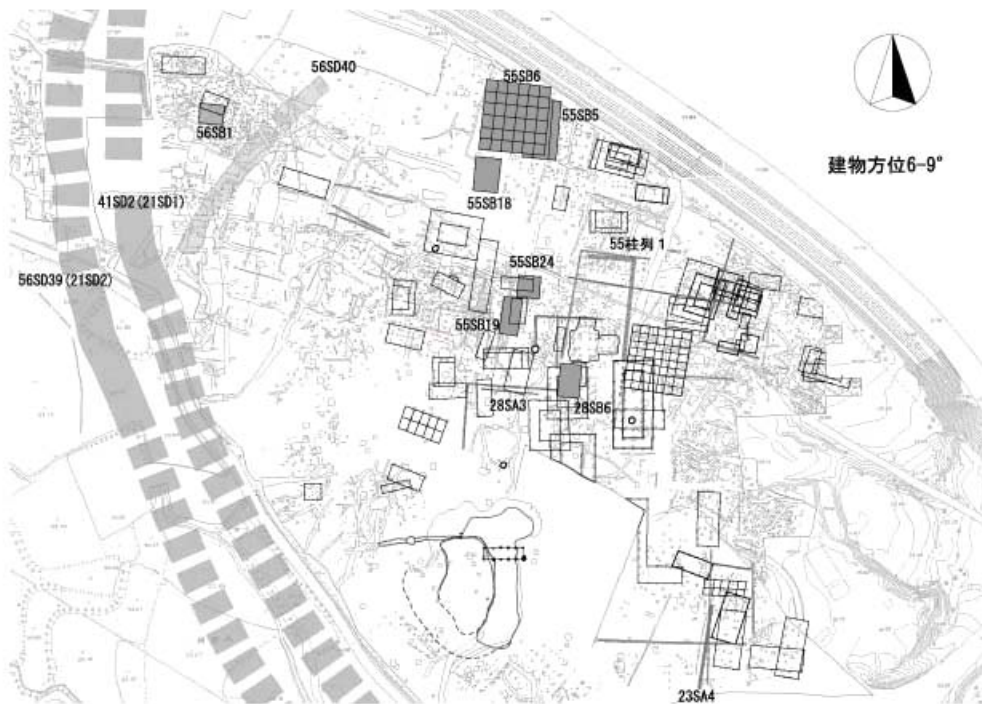
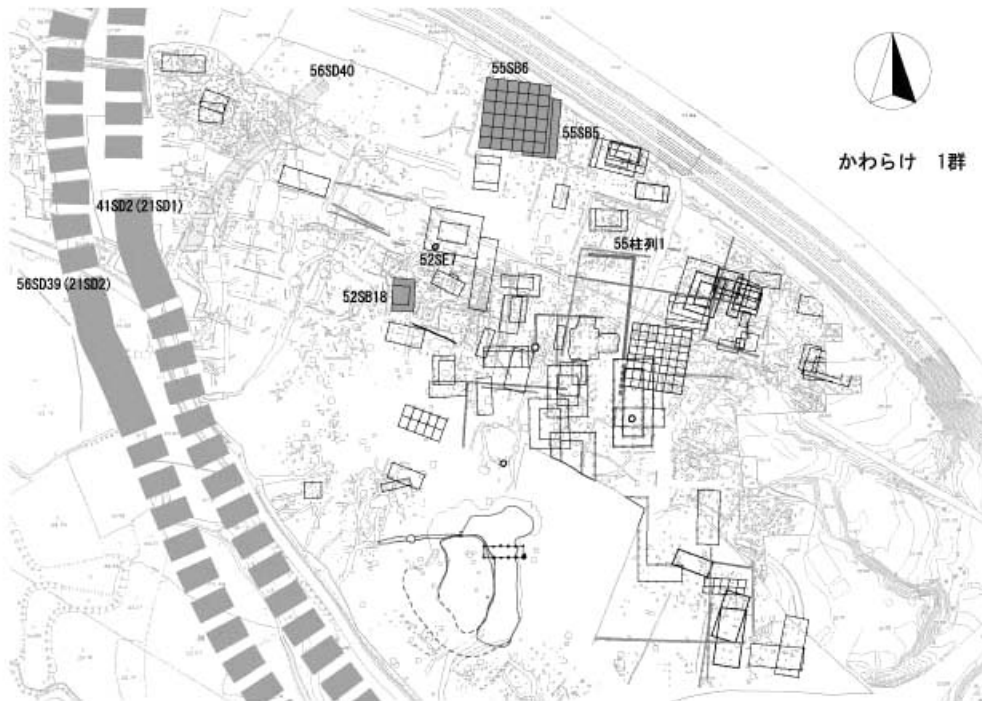
ただしこの第IV期は、建物軸方位の振れ幅が大きいことから、単一の構想に基づいて設計されているかどうか、さらに検討する必要がある。また、かわらけのグルーピングにおいても3群あるいは5群と十分に区分されうるかどうか、慎重に見極める必要がある。

園池は、1期園池か礫敷の2期園池のいずれが伴うか明らかにしえない¹²⁷⁾。いずれの場合も、中心建物との関係は不明瞭である。かわらけの検討結果を重視し、仮に1期園池が伴うとしたなら、前段階（第III期）の建物の一部が園池周辺に残存していた可能性もあるだろう。

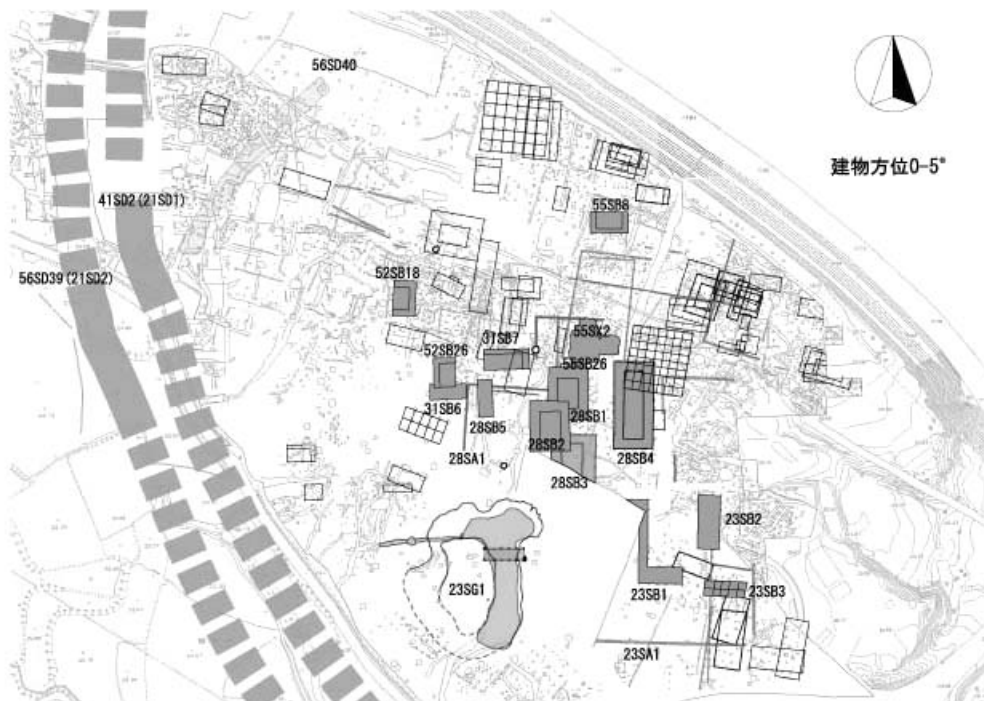
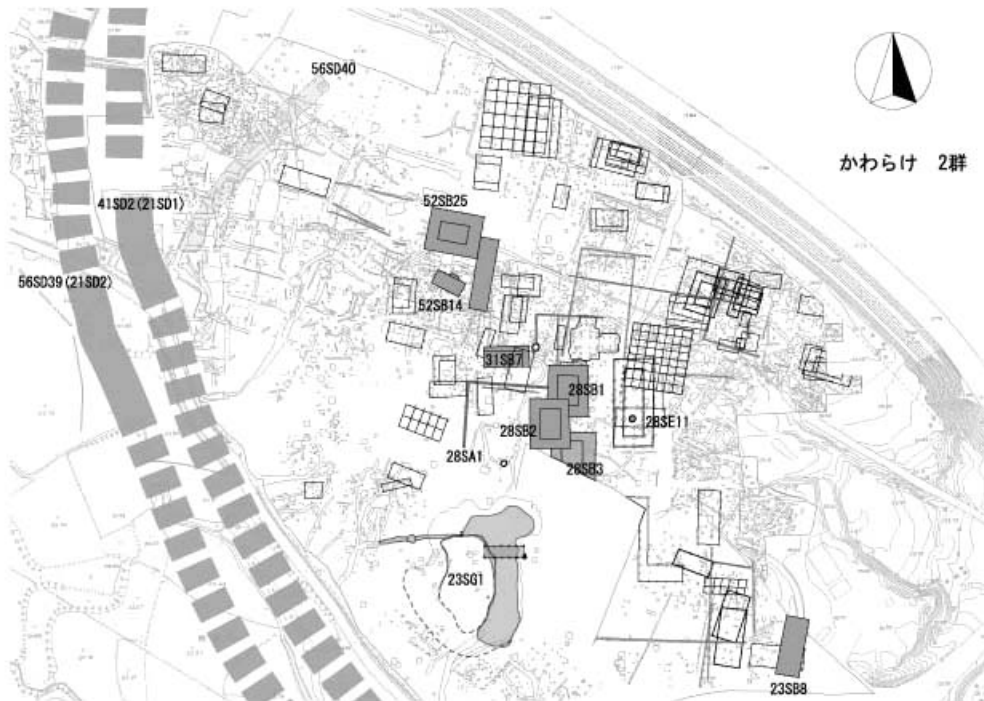
このほか、28SE3、50SE1、55SK44、14C-2（13次）などの井戸状遺構が機能していたか、この段階に埋没したと考えられる。

第V期（第8図）：建物軸方位10～13°〔C群〕にほぼ対応する。出土かわらけ片では、総重量に対するロクロかわらけ底部重量がおおむね20%未満で、手づくねかわらけ破片数に対する数量比が150%以上である〔5群〕。実年代として、12世紀第4四半期後半（平泉滅亡期）ごろを想定。

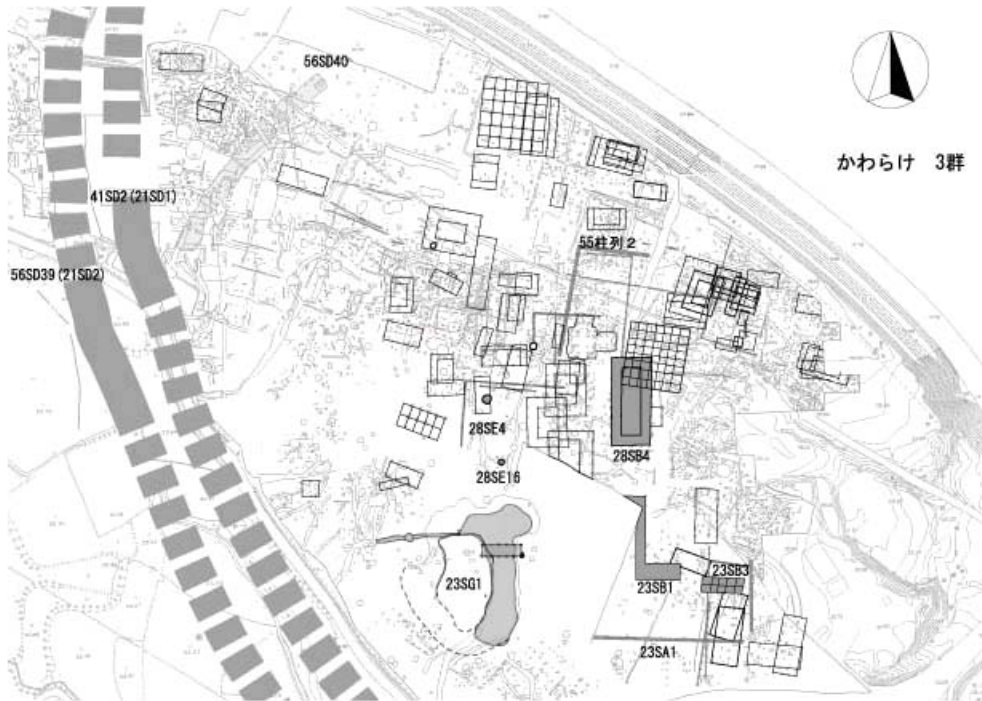
中心建物は、堀内部北東部の50SB4や50SB3などと考えられる。総柱建物50SB4は28SB4と直接重複



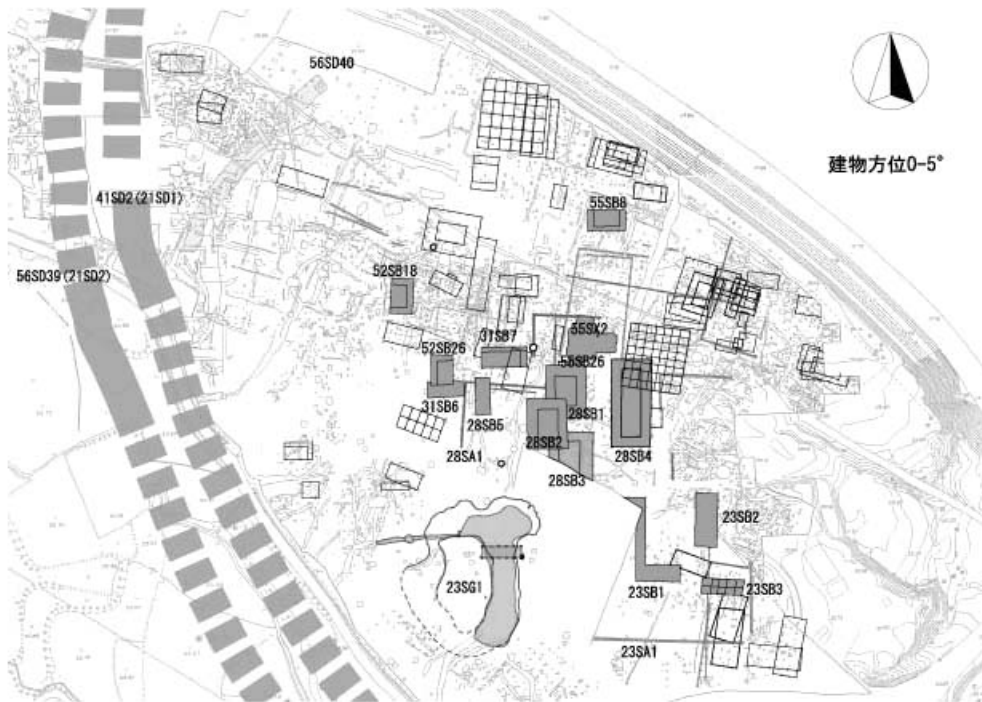
第4図 柳之御所遺跡場内部における出土かわらけ片の分類（1群）による遺構構成（上段）と建物軸方位（B群）による遺構構成（下段）



第5図 柳之御所遺跡場内部における出土かわらけ片の分類（2群）による遺構構成（上段）と建物軸方位（A群）による遺構構成（下段）

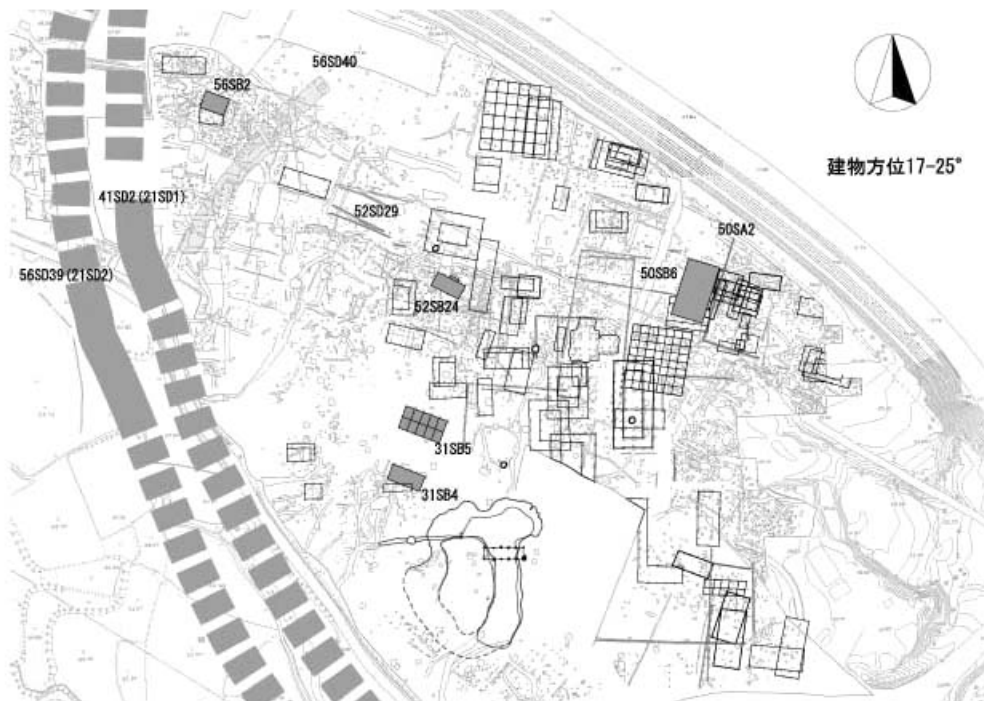


かわらけ 3群

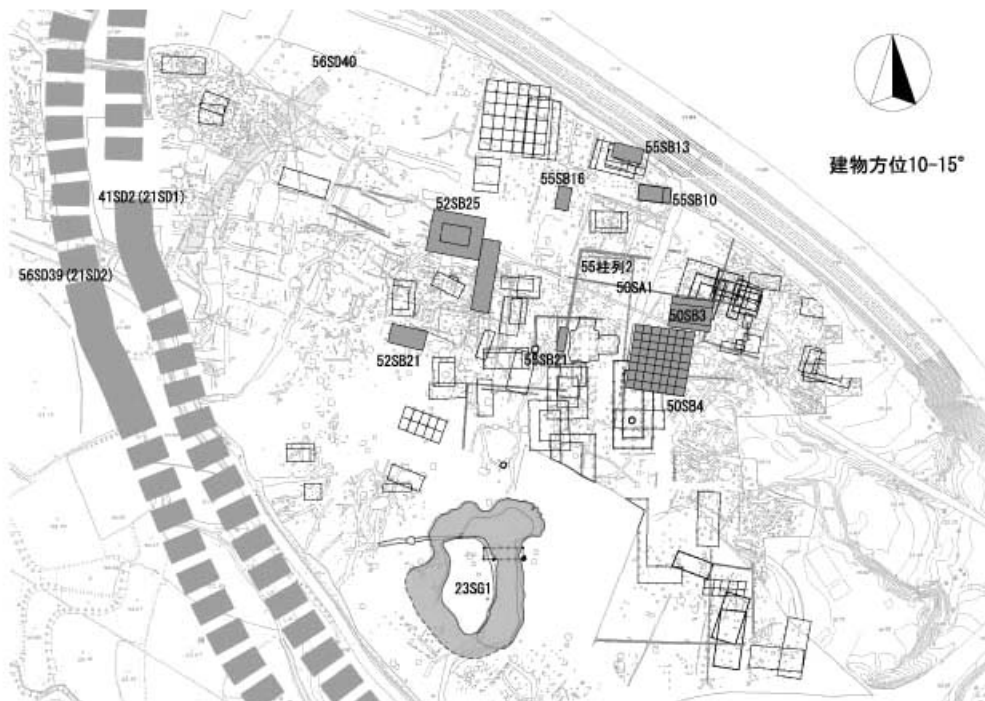
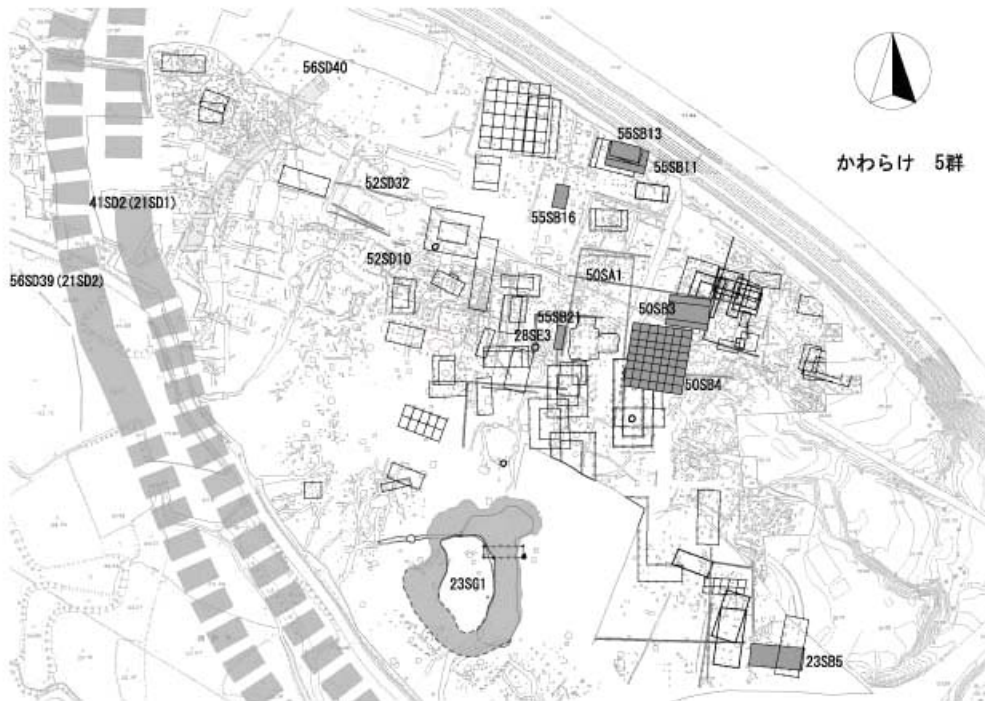


建物方位0-5°

第6図 柳之御所遺跡場内部における出土かわらけ片の分類（3群）による遺構構成（上段）と建物軸方位（A群）による遺構構成（下段）



第7図 柳之御所遺跡堀内部中心域における出土かわらけ片の分類（4群）による遺構構成（上段）と建物軸方位（D群）による遺構構成（下段）



第8図 柳之御所遺跡堀内部中心域における出土かわらけ片の分類（5群）による遺構構成（上段）と建物軸方位（C群）による遺構構成（下段）

し、明確な前後関係にある。建物以外の遺構としては、28SE11、31SE7、52SE8などの井戸状遺構が最終段階に属する。

園池は、2期（礎敷）と考えられるものの、その存続期間が短く、すでにこの段階で溝化し（3期）、園池としての機能を果たしていない可能性も捨てきれない。前段階同様、園池と中心建物の関係の説明が困難である。

なお、無量光院阿弥陀堂は、磁北から17° 33′ 40″ 振れると報告されていることから（文化財保護委員会1954 p34）、軸方位はC群の範囲内に納まるものとみられ、この時期の建物群との密接な関係を考えることができる。

（佐藤嘉広・西澤正晴・吉田 充・岩淵 計）

（注）

- 1 この結果の一部については、「柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷」として2007年度東北史学会研究大会考古学部会（仙台市）席上で口頭発表を行っている。
- 2 個別の遺構について、それぞれの調査時の報告書及び総括的報告書（2004）等で示した内容と異なっている場合がある。また、23SB3のように本年報において初めて用いた遺構名がある。これらについては、本来本誌上又はかわらけ出土量等のデータを報告した第65次調査報告書（2008.3 刊行予定）中で訂正・記載すべきものであるが、紙面の都合上、第68次報告書（2009.3 刊行予定）中で報告することとしたい。
- 3 55SB6については、かつて堀内部最終段階の「平泉館」として考えられたことがあり（富島2006 p4など）、「中間報告1」ではその考え方にしがたった歴史叙述を試みた。しかし、出土遺物から見た場合、明らかに古い段階の遺構として考えざるを得ない。
- 4 「中間報告2」では、園池を中心とするこの範囲内の100年余の遺構変遷を提示した。しかし、出土遺物と建物軸方向に一定の対応関係がみられることから、堀内部地区において、複数回のまとまりをもった建物群の設計が行われたとみるべきであると考え、園池周辺における主要建物の変遷はその一段階を示すものと結論付けるにいたった。したがって、従前の中間報告2における遺構変遷案は撤回することとする。
- 5 II期とIII期はかわらけ群としては2群、3群として区別されるが、遺構の軸方位では分離できない。そのため、個々の遺構の位置づけは流動的要素を含んでいる。しかも「埋文報告書」による重複関係では、遺構変遷の説明が不可能となる範囲である（中間報告1 P46）。変遷については、出土かわらけ2群と3群の差異を重視した場合、他の変遷案を組み立てることも可能である。例えば、28SB2と28SB1の前後関係を逆転させた場合の変遷案などである。したがって、建物軸方位A群については提示した変遷案が不確定といえるが、すでに記録保存に係る緊急調査として調査が完了している範囲でもあり、今後の検討において決定的な証拠を探し出さう可能性は乏しい。
- 6 このほか、園池のほぼ真北70mに四面庇付の52SB25が所在する。この建物は、出土かわらけでは2群の傾向を示しているものの、分析資料が少ないことに加え庇や廊下の部分の柱穴からの出土であることから、軸方位10°を重視した場合5期に属する可能性を残している。
- 7 2期園池の構築時期は、28SK29の廃絶時期よりも新しいという事実、及び2期園池の底面を構築する際に1期園池上に貼った粘土中から出土した遺物によって上限を推定することが可能である。28SK29の廃絶は12世紀第3四半期ごろ、新段階園池構築土から出土したかわらけは5群であることから、従前（中間報告2）の報告どおり、第4四半期ごろに1期から2期への造り替えが行われた可能性が高いと考えられる。

文献

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 「柳之御所跡 一閑遊水地事業・平泉バイパス建設関連第21・28・31・36・41次発掘調査報告」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
- 富島義幸 2006 「平泉柳之御所遺跡の建築についての一考察」『平泉文化研究年報』6 pp1～10
- 文化財保護委員会 1954 『無量光院跡』
- 三浦謙一・菅原計二・相原康二 2001 「北海道・東北地方出土古代末・中世初期陶磁器集成 岩手県」『都市・平泉一成立とその構成』 pp177～268 日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
- 柳之御所遺跡調査事務所 2005 「柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷（中間報告）一史跡整備計画との関わりを中心に一」『平泉文化研究年報』5 pp45～54

- 柳之御所遺跡調査事務所 2006 「柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷（中間報告 その2）－史跡整備計画との関わりを中心に－」
『平泉文化研究年報』6 pp49～60
- 柳之御所遺跡調査事務所 2007 「柳之御所遺跡の検討（中間報告 その3）－史跡整備計画との関わりを中心に－」『平泉文化研究
年報』7 pp57～68

第8回平泉文化フォーラム実施報告

第8回平泉文化フォーラムは、昨年度実施した第7回に引き続き、岩手県教育委員会と文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成－寧波を焦点とする学際的創世－」（代表者：小島毅 東京大学大学院人文科学研究科准教授）、及び岩手大学の三者で共同開催した。内容は以下のとおり。

【第8回平泉文化フォーラム】 平成20年2月2日(土) 午前10時～午後4時

共催：奥州市・奥州市教育委員会・一関市教育委員会・平泉町教育委員会

会場：奥州市文化会館（Zホール） のべ入場者数450名

【研究発表・調査報告】 10：15～12：00

平泉の市街地形成－建物軸方向の特徴について－	磯野 綾（平泉文化共同研究員、千葉工業大学大学院）
平泉文化と北方交易 2－擦文期の銅碗をめぐって－	関根達人（平泉文化共同研究員、弘前大学人文学部）
12世紀の二つの都市－平泉末期と鎌倉初期の遺物様相－	鈴木弘太（平泉文化共同研究員、鶴見大学大学院）
柳之御所遺跡の発掘調査	柳之御所遺跡調査事務所（西澤正晴・吉田充・岩瀨計）
人首川流域の平泉関連遺跡調査	岩手県立博物館考古分野（鎌田勉・佐々木務・高木見）

【基調講演】 12：50

境界論からみた外の浜と平泉

村井章介氏（東京大学大学院教授）

【研究発表・調査報告】 14：10～15：50

「苑池都市」平泉－浄土世界の具現化－	前川佳代（平泉文化共同研究員、京都造形芸術大学）
白鳥館跡の発掘調査	奥州市世界遺産登録推進室（及川真紀）
長者ヶ原廃寺跡の発掘調査	奥州市世界遺産登録推進室（石崎高臣）
無量光院跡の発掘調査	平泉町文化財センター（高原弘征）
花立 I 遺跡の発掘調査	平泉町文化財センター（戸根貴之）

村井章介氏による基調講演は、「境界」であった平泉が「中心」化したというもので、国家と平泉の相対的位置関係を東アジア的視点で再考する機会を与えていただいた。

また、フォーラムと並行して、岩手大学地域連携推進センターが、「奥州地域の歴史や文化を見て、聞いて、歩く『がんちゃん歴史と文化体験バスツアー』」を企画・実施した。午前中は胆沢城跡など奥州市内の史跡や施設を見学し、午後はフォーラム会場に合流した。（参加者120名）



平泉文化研究年報 第8号

平成20年3月31日

発行：岩手県教育委員会

020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1

編集：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課

HIRAIZUMI BUNKA KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi Studies

Contents

Articles

- 'Hiraizumi' the City in the Shape of Garden:
concrete design of the Pure Land MAEKAWA Kayo 1
- Formation Process of Medieval Hiraizumi City, Japan:
characteristics of the architecture's axis ISONO Aya 17
- Hiraizumi Culture and Northern Trade, part 2:
bronze bowls of the Satsumon period in Northern Japan
SEKINE Tatsuhito 33
- Two Cities in the 12th Century
a comparative study of archaeological remains between
the end of Hiraizumi and the beginning of Kamakura SUZUKI Kota 51
- Reconstructive Study of Yanaginogosho Site, part 4
Yanaginogosho Iseki Chosa Jimusho
Archaeological Research Institute of Yanaginogosho Site 65
- Report of the 8th Hiraizumi Culture Forum in Oshu, Iwate 76

Iwate Board of Education

10-1 Uchimaru, Morioka-shi 020-8570, Japan